# BXjscls パッケージ (BXJS 文書クラス集) ソースコード説明書

# 八登崇之(Takayuki YATO; aka. "ZR" v1.7 [2017/10/21]

この文書はソースコード説明書です。一般の文書作成者向けの解説については、ユーザマニュアル bxjscls-manual.pdf を参照してください。

## 目次

1	はじめに	3
2	オプション	7
3	和文フォントの変更	36
4	フォントサイズ	36
5 5.1	<b>レイアウト</b> ページレイアウト	42 43
6	改ページ(日本語 T <sub>E</sub> X 開発コミュニティ版のみ)	56
7	ページスタイル	57
8.1 8.2 8.3 8.4 8.5 8.6	文書のマークアップ 表題 章・節 リスト環境 パラメータの設定 フロート キャプション	60 65 77 85 86 87
9	フォントコマンド	89

10	相互参照	91
10.1	目次の類	91
10.2	参考文献	96
10.3	索引	98
10.4	脚注	99
11	段落の頭へのグルー挿入禁止	102
12	いろいろなロゴ	106
13	amsmath との衝突の回避	106
14	初期設定	107
付録 A	和文ドライバの仕様 圏	111
付録 B	和文ドライバ:minimal 響	112
B.1	補助マクロ	112
B.2	(u)pT <sub>E</sub> X 用の設定	114
B.3	pdfT <sub>E</sub> X 用の処理	118
B.4	X <sub>H</sub> T <sub>E</sub> X 用の処理	119
B.5	後処理(エンジン共通)	119
付録 C	和文ドライバ:standard 圏	122
C.1	共通処理 (1)	123
C.2	pT <sub>E</sub> X 用設定	130
C.3	pdfT <sub>E</sub> X 用設定:CJK + bxcjkjatype	133
C.4	X <sub>H</sub> T <sub>E</sub> X 用設定:xeCJK + zxjatype	135
C.5	LuaT <sub>E</sub> X 用設定:LuaT <sub>E</sub> X-ja	137
C.6	共通処理 (2)	140
付録 D	和文ドライバ:modern 🕾	141
D.1	フォント設定	141
D.2	fixltx2e 読込	142
D.3	和文カテゴリコード	142
D.4	完了	142
付録 E	和文ドライバ:pandoc 圏	142
E.1	dupload システム	143
E.2	lang 変数	143
E.3	geometry 変数	144
E.4	CJKmainfont 変数	144
E.5	paragraph のマーク	145

E.6	全角空白文字	145
E.7	完了	146
付録 F	補助パッケージー覧 圏	146
付録 G	補助パッケージ:bxjscompat 圏	146
G.1	準備	146
G.2	X <sub>H</sub> T <sub>E</sub> X 部分	147
G.3	LuaT <sub>E</sub> X 部分	147
G.4	完了	149
付録 H	補助パッケージ:bxjscjkcat 圏	149
H.1	準備	149
H.2	和文カテゴリコードの設定	150
H.3	ギリシャ・キリル文字の扱い	150
H.4	初期設定	157
H.5	完了	157
付録 I	補助パッケージ:bxjspandoc 圏	157
I.1	準備	157
I.2	パッケージ読込の阻止	157
I.3	fixltx2e パッケージ	158
I.4	cmap パッケージ	158
I.5	microtype パッケージ	158
I.6	Unicode 文字変換対策	159
I.7	PandoLa モジュール	160
1.8	<b>皇</b> 了	160

## 1 はじめに

この文書は「BXJS ドキュメントクラス」の DocStrip 形式のソースである。インストール時のモジュール指定は以下のようである。

```
⟨article⟩ bxjsarticle.cls 短いレポート (章なし) ⟨report⟩ bxjsreport.cls 長いレポート (章あり) ⟨book⟩ bxjsbook.cls 書籍用
```

 $\langle slide \rangle$  bxjsslide.cls スライド用

本ドキュメントクラスは奥村晴彦氏および日本語 TeX 開発コミュニティによる 「pIATeX  $2\varepsilon$  新ドキュメントクラス」に改変を加えたものである。本ドキュメントクラス に関する説明は全てこの形式の枠の中に記す。枠の外にあるものは原版著者による原版に対する解説である。

これは IATrX3 Project の classes.dtx と株式会社アスキーの jclasses.dtx に基づい て奥村が改変したものです。権利については両者のものに従います。奥村は何の権利も主張 しません。

[2009-02-22] 田中琢爾氏による upIATFX 対応パッチを取り込みました。 以下では実際のコードに即して説明します。

- 1 %<\*cls>
- 2 %% このファイルは日本語文字を含みます.

\bxjs@clsname

文書クラスの名前です。エラーメッセージ表示などで使われます。

- 3 %<article>\def\bxjs@clsname{bxjsarticle}
- 4 % <book > \def \bxjs@clsname {bxjsbook}
- 5 %<report>\def\bxjs@clsname{bxjsreport}
- 6 %<slide>\def\bxjs@clsname{bxjsslide}

\ifjsc@needsp@tch

[2016-08-22] 従来 jsclasses では、pLMTFX や LATFX の不都合な点に対して、クラスファ イル内で独自に対策を施していました。しかし、2016年以降、コミュニティ版 pIATeX が次 第に対策コードをカーネル内に取り込むようになりました。そこで,新しい pIATrX カーネ ルと衝突しないように、日付が古い場合だけパッチをあてる場合があります。この処理に使 用するフラグを定義します。

- 7 \newif\ifjsc@needsp@tch
- 8 \jsc@needsp@tchfalse

#### ■BXJS クラス特有の設定 彎

長さ値の指定で式を利用可能にするため calc を読み込む。

9 \RequirePackage{calc}

クラスオプションで key-value 形式を使用するため keyval を読み込む。

10 \RequirePackage{keyval}

クラスの本体ではこの他に geometry パッケージが読み込まれる。 互換性のための補助パッケージを読み込む。

- 11 \IfFileExists{bxjscompat.sty}{%
- 12 \let\jsAtEndOfClass\@gobble
- 13 \RequirePackage{bxjscompat}%
- 14 }{}

\jsDocClass [トークン] 文書クラスの種別。以下の定値トークンの何れかと同等:\jsArticle=bxjsarticle, \jsBook=bxjsbook, \jsReport=bxjsreport, \jsSlide=bxjsslide.

- 15 \let\jsArticle=a
- 16 \let\jsBook=b
- 17 \let\jsReport=r
- 18 \let\jsSlide=s
- 19 %<article>\let\jsDocClass\jsArticle
- 20 % <book > \let \ jsDocClass \ jsBook

```
21 %<report>\let\jsDocClass\jsReport
               22 % <slide > \let \ jsDocClass \ jsSlide
     \jsEngine
               [暗黙文字トークン]エンジン(TrX の種類)の種別:j = pTrX 系、x = XqTrX、p =
               pdfTFX(含 DVI モード)、1 = LuaT<sub>E</sub>X、J = NTT jT<sub>E</sub>X、0 = Omega 系、n =以上の何
                れでもない。
               23 \le 5 
               24 \def\bxjs@test@engine#1#2{%
               25 \edef\bxjs@tmpa{\string#1}%
               26 \edef\bxjs@tmpb{\meaning#1}%
                   \ifx\bxjs@tmpa\bxjs@tmpb #2\fi}
               28 \bxjs@test@engine\kanjiskip{\let\jsEngine=j}
               29 \bxjs@test@engine\jintercharskip{\let\jsEngine=J}
               30 \bxjs@test@engine\Omegaversion{\let\jsEngine=0}
               31 \bxjs@test@engine\XeTeXversion{\let\jsEngine=x}
               32 \bxjs@test@engine\pdftexversion{\let\jsEngine=p}
               33 \bxjs@test@engine\luatexversion{\let\jsEngine=1}
\ifjsWithupTeX [スイッチ] エンジンが(内部漢字コードが Unicode の) upTrX であるか。
               34 \newif\ifjsWithupTeX
               35 \ifx\ucs\@undefined\else \ifnum\ucs"3000="3000
               36 \jsWithupTeXtrue
               37 \fi\fi
               38 \let\if@jsc@uplatex\ifjsWithupTeX
\ifjsWithpTeXng 〔スイッチ〕エンジンが pTpX-ng であるか。
               39 \newif\ifjsWithpTeXng
               40 \bxjs@test@engine\ngbanner{\jsWithpTeXngtrue}
 \ifjsWitheTeX 〔スイッチ〕エンジンが\varepsilon-TFX 拡張をもつか。
               41 \neq 1
               42 \bxjs@test@engine\eTeXversion{\jsWitheTeXtrue}
                  非サポートのエンジンの場合は強制終了させる。
                ※ NTT jT<sub>F</sub>X と Omega 系。
               43 \let\bxjs@tmpa\relax
               44 \ifx J\jsEngine \def\bxjs@tmpa{NTT-jTeX}\fi
               45 \ifx O\jsEngine \def\bxjs@tmpa{Omega}\fi
               46 \ifx\bxjs@tmpa\relax \expandafter\@gobble
               47 \else
                   \ClassError\bxjs@clsname
               48
                    {The engine in use (\bxjs@tmpa) is not supported}
                     {It's a fatal error. I'll quit right now.}
                   \expandafter\@firstofone
               51
               52 \fi{\endinput\@@end}
\bxjs@protected \varepsilon-TrX 拡張が有効な場合にのみ \protected の効果をもつ。
```

53 \ifjsWitheTeX \let\bxjs@protected\protected

```
54 \else \let\bxjs@protected\@empty
                55 \fi
\bxjs@robust@def 無引数の頑強な命令を定義する。
                56 \ifjsWitheTeX
                57 \def\bxjs@robust@def{\protected\def}
                58 \else
                59 \def\bxjs@robust@def{\DeclareRobustCommand*}
                60 \fi
 \ifjsInPdfMode 〔スイッチ〕pdfTFX / LuaTFX が PDF モードで動作しているか。
                ※ LuaT<sub>F</sub>X 0.8x 版でのプリミティブ名変更に対応。
                61 \newif\ifjsInPdfMode
                62 \Onameuse{ImposeOldLuaTeXBehavior}
                63 \let\bxjs@tmpa\PackageWarningNoLine
                64 \let\PackageWarningNoLine\PackageInfo % suppress warning
                65 \RequirePackage{ifpdf}
                66 \let\PackageWarningNoLine\bxjs@tmpa
                67 \Onameuse{RevokeOldLuaTeXBehavior}
                68 \left| ijsInPdfMode\right| 
     T<sub>F</sub>X の if-文 (\if XXX······(真)\else(偽)\fi) を末尾呼出形式に変換するためのマクロ。
                69 \@gobbletwo\if\if \def\bxjs@cond#1\fi{%
                70 #1\expandafter\@firstoftwo
                71 \else\expandafter\@secondoftwo
                72 \fi}
    \bxjs@cslet \bxjs@cslet{\名前 1\}\制御綴:
                73 \def\bxjs@cslet#1{%
                74 \expandafter\let\csname#1\endcsname}
  \bxjs@csletcs \bxjs@csletcs{\langle4前 1\rangle}{\langle4前 2\rangle}:
                75 \def\bxjs@csletcs#1#2{%
                76 \expandafter\let\csname#1\expandafter\endcsname\csname#2\endcsname}
   \bxjs@catopt \bxjs@catopt{\langle文字列 1\rangle}{\langle文字列 2\rangle}: 2つの文字列を , で繋いだ文字列。ただし片方
                が空の場合は, を入れない。完全展開可能。
                77 \def\bxjs@catopt#1#2{%
```

\jsAtEndOfClass このクラスの読込終了時に対するフック。(補助パッケージ中で用いられる。)

78 #1\if\relax#1\relax\else\if\relax#2\relax\else,\fi\fi#2}

79 \def\jsAtEndOfClass{%

80 \expandafter\g@addto@macro\csname\bxjs@clsname.cls-h@@k\endcsname}

 $\operatorname{LuaT}_{\mathbf{E}}\!\mathbf{X}$  の場合、原版のコード中のコントロールワード中に現れる日本語文字のカテゴリコードを一時的に 11 に変更する。クラス読込終了時点で元に戻される。

※現在の LualATEX では、漢字のカテゴリコードは最初から 11 になっているので、この処理は特段の意味を持たない。しかし、昔は 12 になっていて、この場合、日本語文字のコントロールワードの命令を使用するには、カテゴリコードを 11 に変更する必要がある。

- 81 \@onlypreamble\bxjs@restore@jltrcc
- 82 \let\bxjs@restore@jltrcc\@empty
- 83 \if 1\jsEngine
- 84 \def\bxjs@change@jltrcc#1{%
- 85 \xdef\bxjs@restore@jltrcc{%
- 86 \bxjs@restore@jltrcc
- 87 \catcode`#1=\the\catcode`#1\relax}%
- 88 \catcode`#1=11\relax}
- 89 \@tfor\bxjs@x:=西暦\do
- 90 {\expandafter\bxjs@change@jltrcc\bxjs@x}
- 91 \fi

\jsInhibitGlue は \inhibitglue が定義されていればそれを実行し、未定義ならば何もしない。

- 92 \bxjs@robust@def\jsInhibitGlue{%
- 93 \ifx\inhibitglue\@undefined\else \inhibitglue \fi}

万が一「2.09 互換モード」になっていた場合は、これ以上進むと危険なので強制終了させる。

- 94 \if@compatibility
- 95 \ClassError\bxjs@clsname
- 96 {Something went chaotic!\MessageBreak
- 97 (How come '\string\documentstyle' is there?)\MessageBreak
- 98 I cannot go a single step further...}
- 99 {If the chant of '\string\documentstyle' was just a blunder of yours,\MessageBreak
- 100 then there'll still be hope....}
- 101 \expandafter\@firstofone
- $102 \ensuremath{\,^{\circ}}\ensur$
- 103 \fi{\typeout{Farewell!}\endinput\@@end}

### 2 オプション

これらのクラスは \documentclass{jsarticle} あるいは \documentclass[オプション]{jsarticle} のように呼び出します。

まず、オプションに関連するいくつかのコマンドやスイッチ(論理変数)を定義します。

\if@restonecol 段組のときに真になる論理変数です。

104 \newif\if@restonecol

\ifOtitlepage これを真にすると表題、概要を独立したページに出力します。

105 \newif\if@titlepage

\ifCopenright \chapter, \part を右ページ起こしにするかどうかです。横組の書籍では真が標準で、要

するに片起こし, 奇数ページ起こしになります。

106 %<book|report>\newif\if@openright

\ifCopenleft [2017-02-24] \chapter, \part を左ページ起こしにするかどうかです。
107 % \chook|report \newif\ifCopenleft

\if@mainmatter 真なら本文, 偽なら前付け・後付けです。偽なら \chapter で章番号が出ません。

BXJS では report 系でも定義されることに注意。

108 % <book | report > \newif \if@mainmatter \@mainmattertrue

\if@enablejfam 和文フォントを数式フォントとして登録するかどうかを示すスイッチです。

JS クラスと異なり、初期値は偽とする。

109 \newif\if@enablejfam \@enablejfamfalse

以下で各オプションを宣言します。

■用紙サイズ JIS や ISO の A0 判は面積  $1 \, \mathrm{m}^2$ ,縦横比  $1:\sqrt{2}$  の長方形の辺の長さを  $\mathrm{mm}$  単位に切り捨てたものです。これを基準として順に半截しては  $\mathrm{mm}$  単位に切り捨てたものが A1,A2,…です。

B 判は JIS と ISO で定義が異なります。JIS では B0 判の面積が  $1.5\,\mathrm{m}^2$  ですが,ISO では B1 判の辺の長さが A0 判と A1 判の辺の長さの幾何平均です。したがって ISO の B0 判は  $1000\,\mathrm{mm} \times 1414\,\mathrm{mm}$  です。このため,I $\Delta$ TEX  $2_{\varepsilon}$  の b5paper は  $250\,\mathrm{mm} \times 176\,\mathrm{mm}$  ですが,pI $\Delta$ TEX  $2_{\varepsilon}$  の b5paper は  $257\,\mathrm{mm} \times 182\,\mathrm{mm}$  になっています。ここでは pI $\Delta$ TEX  $2_{\varepsilon}$  に ならって JIS に従いました。

デフォルトは a4paper です。

b5var (B5 変形, 182mm×230mm), a4var (A4 変形, 210mm×283mm) を追加しました。

BXJS クラスではページレイアウト設定に geometry パッケージを用いる。用紙サイズ設定は geometry に渡すオプションの指定と扱われる。

- 110 \def\bxjs@setpaper#1{\def\bxjs@param@paper{#1}}
- 111 \DeclareOption{a3paper}{\bxjs@setpaper{a3paper}}
- 112 \DeclareOption{a4paper}{\bxjs@setpaper{a4paper}}
- 113 \DeclareOption{a5paper}{\bxjs@setpaper{a5paper}}
- 114 \DeclareOption{a6paper}{\bxjs@setpaper{a6paper}}
- $116 \verb|\DeclareOption{b5paper}{\bxjs@setpaper{{182truemm}{257truemm}}}|$
- 117 \DeclareOption{b6paper}{\bxjs@setpaper{{128truemm}}}
- 118 \DeclareOption{a4j}{\bxjs@setpaper{a4paper}}
- 119 \DeclareOption{a5j}{\bxjs@setpaper{a5paper}}
- $120 \ensuremath{\texttt{DeclareOption}\{b4j\}{\texttt{bxjs@setpaper}\{257truemm\}\{364truemm\}\}}}$

- 121 \DeclareOption{b5j}{\bxjs@setpaper{{182truemm}}{257truemm}}}
- 122 \DeclareOption{a4var}{\bxjs@setpaper{{210truemm}{283truemm}}}
- 123 \DeclareOption{b5var}{\bxjs@setpaper{{182truemm}{230truemm}}}
- ※...var を Pandoc で使えるように後ろに paper をつけた形を用意する。
- 124 \DeclareOption{a4varpaper}{\bxjs@setpaper{{210truemm}}{283truemm}}}
- 125 \DeclareOption{b5varpaper}{\bxjs@setpaper{{182truemm}{230truemm}}}
- 126 \DeclareOption{letterpaper}{\bxjs@setpaper{letterpaper}}
- 127 \DeclareOption{legalpaper}{\bxjs@setpaper{legalpaper}}
- 128 \DeclareOption{executivepaper}{\bxjs@setpaper{executivepaper}}
- ■横置き 用紙の縦と横の長さを入れ換えます。
- 129 \newif\if@landscape
- 130 \@landscapefalse
- 131 \DeclareOption{landscape}{\@landscapetrue}
- ■slide オプション slide を新設しました。

[2016-10-08] slide オプションは article 以外では使い物にならなかったので、簡単のため article のみで使えるオプションとしました。

132 \newif\if@slide

BXJS ではスライド用のクラス bxjsslide を用意しているので、本来はこのスイッチは不要なはずである。しかし、JS クラスの一部のコードをそのまま使うために保持している。 ※この \if @slide という制御綴は、ユニークでないにも関わらず、衝突した場合に正常動作が保たれない、という問題を抱えている。

- 133 %<!slide>\@slidefalse
- 134 %<slide>\@slidetrue

■サイズオプション 10pt, 11pt, 12pt のほかに, 8pt, 9pt, 14pt, 17pt, 21pt, 25pt, 30pt, 36pt, 43pt を追加しました。これは等比数列になるように選んだものです(従来の20pt も残しました)。\@ptsize の定義が変だったのでご迷惑をおかけしましたが、標準的なドキュメントクラスと同様にポイント数から 10 を引いたものに直しました。

[2003-03-22] 14Q オプションを追加しました。

[2003-04-18] 12Q オプションを追加しました。

[2016-07-08] \mag を使わずに各種寸法をスケールさせるためのオプション nomag を新設しました。usemag オプションの指定で従来通りの動作となります。デフォルトは usemag です。

[2016-07-24] オプティカルサイズを調整するために NFSS ヘパッチを当てるオプション nomag\* を新設しました。

\Optsize は 10pt, 11pt, 12pt が指定された時のみ従来と同じ値とし、それ以外は

```
\jsUnusualPtSize (=-20) k \neq \delta.
135 \newcommand{\@ptsize}{0}
```

136 \def\bxjs@param@basefontsize{10pt}

137 \def\jsUnusualPtSize{-20}

\bxjs@setbasefontsize 基底フォントサイズを実際に変更する。

- 138 \def\bxjs@setbasefontsize#1{%
- \bxjs@setbasefontlength\@tempdima{#1}%
- \edef\bxjs@param@basefontsize{\the\@tempdima}% 140
- 141 \ifdim\@tempdima=10pt \long\def\@ptsize{0}%
- \else\ifdim\@tempdima=10.95pt \long\def\@ptsize{1}%
- \else\ifdim\@tempdima=12pt \long\def\@ptsize{2}% 143
- \else \long\edef\@ptsize{\jsUnusualPtSize}\fi\fi\fi}

#### \bxjs@setbasefontlength

base、jbase で指定される長さ(式)のための特別な \setlength。与えられた式が"(実 数〉Q"の形の場合、Q単位の長さを代入する(この場合"式"は使えない)。

※クラスオプションのトークン列の中に展開可能なトークンがある場合、IAT<sub>F</sub>X はファイル の読込の前にそれを展開しようとする。このため、この位置で \jQ をサポートすることは原 理的に不可能である。

145 \def\bxjs@setbasefontlength#1#2{%

ここで true の長さが使われるのは不合理なので、式が "true" を含む場合には警告を出す。

146 \bxjs@setbasefontlength@a#2true\@nnil

式の末尾が"Q"である時は特別に扱い、それ以外は\setlengthに移譲する。

- \ifx j\jsEngine \setlength#1{#2}% 147
- 148 \else
- 149 \bxjs@setbasefontlength@b#2\@nil Q\@nil\@nnil
- \ifx\bxjs@tmpa\relax \setlength#1{#2}% 150
- 151 \else \@tempdimc0.25mm #1=\bxjs@tmpa\@tempdimc
- \fi 152
- 153
- 154 \def\bxjs@setbasefontlength@b#1Q\@nil#2\@nnil{%
- \ifx\@nnil#2\@nnil \let\bxjs@tmpa\relax 155
- \else \def\bxjs@tmpa{#1}% 156
- 157 fi
- 158 \def\bxjs@setbasefontlength@a#1true#2\@nnil{%
- \ifx\@nnil#2\@nnil\else
- \ClassWarningNoLine\bxjs@clsname 160
- {You should not use 'true' lengths here}% 161
- 162 \fi}

\ifjsc@mag は「\mag を使うか」を表すスイッチ。

\ifjsc@mag@xreal は「NFSS にパッチを当てるか」を表すスイッチ。

- 163 \newif\ifjsc@mag
- 164 \newif\ifjsc@mag@xreal
- 165 %\let\jsc@magscale\@undefined
- 166 \DeclareOption{8pt}{\bxjs@setbasefontsize{8pt}}

```
167 \DeclareOption{9pt}{\bxjs@setbasefontsize{9pt}}
168 \DeclareOption{10pt}{\bxjs@setbasefontsize{10pt}}
169 \DeclareOption{11pt}{\bxjs@setbasefontsize{10.95pt}}
170 \DeclareOption{12pt}{\bxjs@setbasefontsize{12pt}}
171 \DeclareOption{14pt}{\bxjs@setbasefontsize{14.4pt}}
172 \DeclareOption{17pt}{\bxjs@setbasefontsize{17.28pt}}
173 \DeclareOption{20pt}{\bxjs@setbasefontsize{20pt}}
174 \DeclareOption{21pt}{\bxjs@setbasefontsize{20.74pt}}
175 \DeclareOption{25pt}{\bxjs@setbasefontsize{24.88pt}}
176 \DeclareOption{30pt}{\bxjs@setbasefontsize{29.86pt}}
177 \DeclareOption{36pt}{\bxjs@setbasefontsize{35.83pt}}
178 \DeclareOption{43pt}{\bxjs@setbasefontsize{43pt}}
179 \DeclareOption{12Q}{\bxjs@setjbasefontsize{3mm}}
180 \DeclareOption{14Q}{\bxjs@setjbasefontsize{3.5mm}}
181 \DeclareOption{10ptj}{\bxjs@setjbasefontsize{10pt}}
182 \DeclareOption{10.5ptj}{\bxjs@setjbasefontsize{10.5pt}}
183 \verb|\DeclareOption{11ptj}{\bxjs@setjbasefontsize{11pt}}|
184 \DeclareOption{12ptj}{\bxjs@setjbasefontsize{12pt}}
  JS クラス互換の magstyle 設定オプション。
185 \verb|\DeclareOption{usemag}{\let\bxjs@magstyle\bxjs@magstyle@usemag}| \\
186 \DeclareOption{nomag}{\let\bxjs@magstyle\bxjs@magstyle@nomag}
187 \DeclareOption{nomag*}{\let\bxjs@magstyle\bxjs@magstyle@xreal}
```

**■トンボオプション** トンボ (crop marks) を出力します。実際の処理は pIATEX  $2_{\varepsilon}$  本体 で行います (plcore.dtx 参照)。オプション tombow で日付付きのトンボ, オプション tombo で日付なしのトンボを出力します。これらはアスキー版のままです。カウンタ \hour, \minute は pIATEX  $2_{\varepsilon}$  本体で宣言されています。

取りあえず、 $pT_EX$  系の場合に限り、JS クラスのトンボ関連のコードをそのまま活かしておく。正常に動作する保証はない。

```
188 \if j\jsEngine
189 \hour\time \divide\hour by 60\relax
190 \@tempcnta\hour \multiply\@tempcnta 60\relax
191 \minute\time \advance\minute-\@tempcnta
192 \DeclareOption{tombow}{%
     \tombowtrue \tombowdatetrue
193
194
     \setlength{\@tombowwidth}{.1\p@}%
195
     \@bannertoken{%
        \jobname\space(\number\year-\two@digits\month-\two@digits\day
196
        \space\two@digits\hour:\two@digits\minute)}%
197
198
     \maketombowbox}
199 \DeclareOption{tombo}{%
     \tombowtrue \tombowdatefalse
     \setlength{\@tombowwidth}{.1\p@}%
201
```

- 202 \maketombowbox}
- 203 \fi
- ■面付け オプション mentuke で幅ゼロのトンボを出力します。面付けに便利です。これ もアスキー版のままです。
- 204 \if j\jsEngine
- 205 \DeclareOption{mentuke}{%
- 206 \tombowtrue \tombowdatefalse
- 207 \setlength{\@tombowwidth}{\z@}%
- 208 \maketombowbox}
- 209 \fi
- ■両面、片面オプション twoside で奇数ページ・偶数ページのレイアウトが変わります。 [2003-04-29] vartwoside でどちらのページも傍注が右側になります。
- 210 \DeclareOption{oneside}{\@twosidefalse \@mparswitchfalse}
- 211 \DeclareOption{twoside}{\@twosidetrue \@mparswitchtrue}
- ■二段組 twocolumn で二段組になります。
- 213 \DeclareOption{onecolumn}{\Otwocolumnfalse}
- $214 \verb|\DeclareOption{twocolumn}{\Qtwocolumntrue}|$
- ■表題ページ titlepage で表題・概要を独立したページに出力します。
- 215 \DeclareOption{titlepage}{\@titlepagetrue}
- 216 \DeclareOption{notitlepage}{\@titlepagefalse}
- ■右左起こし 書籍では章は通常は奇数ページ起こしになりますが、横組ではこれを openright と表すことにしてあります。 openany で偶数ページからでも始まるようになります。

[2017-02-24] openright は横組では奇数ページ起こし、縦組では偶数ページ起こしを表します。ややこしいですが、これは IATEX の標準クラスが西欧の横組事情しか考慮せずに、奇数ページ起こしと右起こしを一緒にしてしまったせいです。縦組での奇数ページ起こしと横組での偶数ページ起こしも表現したいので、jsclasses では新たに openleft も追加しました。

- 217 %<book|report>\DeclareOption{openright}{\@openrighttrue\@openleftfalse}
- $218 \ \% \ book|report> \ DeclareOption\{openleft\} \ (@openlefttrue \ @openrightfalse\}$
- ${\tt 219 \% book|report>\DeclareOption\{openany}\{\Qopenrightfalse\Qopenleftfalse\}}$
- ■eqnarray 環境と数式の位置 森本さんのご教示にしたがって前に移動しました。
- - 220 \def\eqnarray{%
  - 221 \stepcounter{equation}%
  - 222 \def\@currentlabel{\p@equation\theequation}%

```
223
      \global\@eqnswtrue
224
      \m@th
225
      \global\@eqcnt\z@
      \tabskip\@centering
226
      \let\\\@egncr
227
      $$\everycr{}\halign to\displaywidth\bgroup
228
          \hskip\@centering$\displaystyle\tabskip\z@skip{##}$\@eqnsel
229
230
         &\global\@eqcnt\@ne \hfil\displaystyle{{}##{}}\hfil
         &\global\@eqcnt\tw@ $\displaystyle{##}$\hfil\tabskip\@centering
231
         &\global\@eqcnt\thr@@ \hb@xt@\z@\bgroup\hss##\egroup
232
            \tabskip\z@skip
233
234
         \cr
   leqno で数式番号が左側になります。fleqn で数式が本文左端から一定距離のところに出
力されます。森本さんにしたがって訂正しました。
235 \DeclareOption{leqno}{\input{leqno.clo}}
236 \verb|\DeclareOption{fleqn}{\input{fleqn.clo}}|
237 % fleqn 用の eqnarray 環境の再定義
     \def\eqnarray{%
238
       \stepcounter{equation}%
239
       \def\@currentlabel{\p@equation\theequation}%
240
241
       \global\@eqnswtrue\m@th
       \global\@eqcnt\z@
242
243
       \tabskip\mathindent
       \left| \cdot \right| = \ensuremath{\mbox{Qeqncr}}
244
245
       \setlength\abovedisplayskip{\topsep}%
       \ifvmode
246
247
         \addtolength\abovedisplayskip{\partopsep}%
       \verb|\addtolength| above displayskip{\parskip}||%
249
       \setlength\belowdisplayskip{\abovedisplayskip}%
250
       \setlength\belowdisplayshortskip{\abovedisplayskip}%
251
252
       \setlength\abovedisplayshortskip{\abovedisplayskip}%
       $$\everycr{}\halign to\linewidth% $$
253
       \bgroup
254
         \hskip\@centering$\displaystyle\tabskip\z@skip{##}$\@eqnsel
255
256
         &\global\@eqcnt\@ne \hfil$\displaystyle{{}##{}}$\hfil
         &\global\@eqcnt\tw@
257
           $\displaystyle{##}$\hfil \tabskip\@centering
258
         &\global\@eqcnt\thr@@ \hb@xt@\z@\bgroup\hss##\egroup
259
       \tabskip\z@skip\cr
260
261
       }}
■文献リスト 文献リストを open 形式(著者名や書名の後に改行が入る)で出力します。
 これは使われることはないのでコメントアウトしてあります。
262 % \DeclareOption{openbib}{%
       \AtEndOfPackage{%
263 %
```

\renewcommand\@openbib@code{%

264 %

- 265 % \advance\leftmargin\bibindent
- 266 % \itemindent -\bibindent
- 267 % \listparindent \itemindent
- 268 % \parsep \z@}%
- 269 % \renewcommand\newblock{\par}}}

■数式フォントとして和文フォントを登録しないオプション 数式中では 16 通りのフォントしか使えません。AMSFonts や mathptmx パッケージを使って数式フォントをたくさん使うと "Too many math alphabets …"というエラーが起こってしまいます。disablejfamオプションを付ければ、明朝・ゴシックを数式用フォントとして登録するのをやめますので、数式用フォントが二つ節約できます。いずれにしても \textmc や \mbox や amsmath パッケージの \text を使えば数式中で和文フォントが使えますので、この新ドキュメントクラスでは標準で和文フォントを数式用に登録しないことにしていたのですが、従来のドキュメントクラスの仕様に合わせることにしました。

\bxjs@enablejfam 〔暗黙文字トークン〕enablejfam オプションの状態:

270 %\let\bxjs@enablejfam\@undefined

enablejfam オプションの処理。

- 271 \def\bxjs@kv@enablejfam@true{\let\bxjs@enablejfam=t}
- $272 \end{center} $$272 \end{ce$
- $273 \end{tabular} $$273 \end{tabular} $$273$
- 274 \define@key{bxjs}{enablejfam}[true]{%
- 275 \bxjs@set@keyval{enablejfam}{#1}{}}

JS クラスとの互換のため disablejfam オプションを定義する。

 $276 \ensuremath{\verb| DeclareOption{disablejfam}{ \langle bxjs@enablejfam=f}|}$ 

※実際に何らかの設定を行うのは和文ドライバである。和文ドライバとエンジンの組合せにより、enablejfam が default である場合に「数式和文ファミリ」が有効と無効の選択は異なるし、またそもそも有効と無効の一方しか選択できない場合もある。

■ドラフト draft で overfull box の起きた行末に 5pt の罫線を引きます。 [2016-07-13] \ifdraft を定義するのをやめました。

\ifjsDraft JS クラスは \ifdraft という公開名のスイッチを用いているが、これは ifdraft パッケージと衝突するので、代わりに \ifjsDraft の名前を用い、本文開始時に \ifdraft が未定義の場合に限り、\ifjsDraft を \ifdraft にコピーする処理にする。

※ JS クラスの \ifdraft が廃止されたので、\ifdraft は 2.0 版で廃止を予定する。

- 277 \let\ifjsDraft\iffalse
- 278 \@onlypreamble\bxjs@draft
- 279 \def\bxjs@draft#1{%
- 280 \expandafter\let\expandafter\ifjsDraft\csname if#1\endcsname}

- $281 \end{draft} {\bf \{bxjs@draft\{true\}\end{draft}\}}$
- $282 \end{final}{\end{final}{\end{final}{\end{final}{\end{final}{\end{final}{\end{final}{\end{final}}}}}}$
- 283 \AtBeginDocument{%
- 284 \expandafter\ifx\csname ifdraft\endcsname\relax
- 285 \expandafter\let\csname ifdraft\expandafter\endcsname
- 286 \csname ifjsDraft\endcsname
- 287 \fi}

■和文フォントメトリックの選択 ここでは新しい jis フォントメトリックを標準で使いますが、古い min10、goth10 などを使いたいときは mingoth というオプションを指定します。また、winjis オプションで winjis メトリックが使えます。

BXJS クラスではここは和文ドライバの管轄。

■papersize スペシャルの利用 dvips や dviout で用紙設定を自動化するにはオプション papersize を与えます。

BXJS クラスでは geometry パッケージがこの処理を行う。

\ifbxjs@papersize

[スイッチ] papersize スペシャルを出力するか。既定で有効であるが、nopapersize オプションで無効にできる。

- ※ JS クラスでは \ifpapersize という制御綴だが、これは採用しない。
- 288 \newif\ifbxjs@papersize
- 289 \bxjs@papersizetrue
- 291 \DeclareOption{papersize}{\bxjs@papersizetrue}
- ■英語化 オプション english を新設しました。
- 292 \newif\if@english
- 293 \@englishfalse
- $294 \verb|\DeclareOption{english}{\Qenglishtrue}|$
- ■jsbook を jsreport もどきに オプション report を新設しました。

[2017-02-13] 従来は「jsreport 相当」を jsbook の report オプションで提供していましたが、新しく jsreport クラスも作りました。どちらでもお好きな方を使ってください。

BXJS では当初から bxjsreport クラスが用意されている。

■jslogo パッケージの読み込み IATEX 関連のロゴを再定義する jslogo パッケージを読み 込まないオプション nojslogo を新設しました。jslogo オプションの指定で従来どおりの 動作となります。デフォルトは jslogo で、すなわちパッケージを読み込みます。

BXJS クラスでは、nojslogo を既定とする。

 $295 \newif\if@jslogo \@jslogofalse$ 

- 296 \DeclareOption{jslogo}{\@jslogotrue}
- 297 \DeclareOption{nojslogo}{\@jslogofalse}

#### ■BXJS 特有のオプションの一覧 湾

- エンジンオプション:xelatex 等。
- ドライバオプション: dvipdfmx 等。
- 複合設定オプション: pandoc 等。
- nopapersize: papersize (既定で有効)の否定。
- zw / nozw: \jsZw と等価な命令として \zw を定義する/しない。
- js / nojs: JS クラスを読込済として扱う/扱わない。
- precisetext / noprecisetext: X<sub>H</sub>T<sub>E</sub>X の "generateactualtext" を有効/無効に する。
- simplejasetup / nosimplejasetup : XTEX の "linebreaklocale" を有効/無効にする。
- bigcode / nobigcode :  $upT_EX$  で CMap として UTF8-UCS2 の代わりに UTF8-UTF16 を使う/使わない。
- oldfontcommands / nooldfontcommands: 古い "二文字フォント命令" に対する 警告を抑止する/しない。
- base= $\langle dimen \rangle$ : 基底フォントサイズを直接指定する。(xxpt オプションの代用なので、既定値は  $10\,\mathrm{pt}$  である。)
- jbase=(dimen): 基底フォントサイズを "和文規準で"直接指定する。
- scale= $\langle real \rangle$ : 和文フォントのスケールを表すマクロ \jsScale の値を設定する。もちろんこの値を何らかの方法で和文処理モジュールに渡さないと意味を成さない。既定値は 0.924715 (=  $13\,\mathrm{Q}/10\,\mathrm{pt}$ )。
- noscale: scale=1 と等価。
- $mag=\langle int \rangle$ : \mag 値の直接設定。既定は base から算出する。
- paper={\langle dimen:width\rangle} {\langle dimen:height\rangle} : 用紙サイズ設定。用紙サイズオプション の代用で、既定値は a4paper 相当。
- ja=⟨name⟩: 使用する和文ドライバの指定。
- jafont= $\langle name \rangle$ : 和文フォントプリセットの指定。
- japaram= $\langle name \rangle$ : 和文フォントパラメタの指定。
- magstyle= $\langle name \rangle$ : "版面拡大"の実現方法の選択。
- $dvi=\langle name \rangle: DVI$  モードの時のみに参照されるドライバ指定。
- geometry={class | user}: geometry パッケージの読込を自動的に行うかユーザに

任せるか。

- fancyhdr=\langle bool\rangle: fancyhdr パッケージ用の調整を行うか。
- layout=(name): レイアウト変種の指定。
- textwidth-limit= $\langle number \rangle$ : bxjsbook における、\textwidth の上限の全角単位での値。
- paragraph-mark= $\langle char \rangle$  :  $\mathcal{N} \ni \mathcal{O} \ni \mathcal{O}$
- whole-zw-lines=(bool): 行長を全角単位に丸めるか。
- hyperref-enc= $\langle bool \rangle$ : hyperref の文字コード指定補正を行うか。

\bxjs@invscale \bxjs@invscale は TEX における「長さのスケール」の逆関数を求めるもの。例えば \bxjs@invscale\dimX{1.3} は \dimX=1.3\dimX の逆の演算を行う。

※局所化の \begingroup ~ \endgroup について、以前は \group ~ \egroup を使っていたが、これだと数式モード中では空のサブ数式を生み出してしまうため修正した。

※元の長さが 128 pt 以上の場合でも動作するように修正した。

```
298 \mathchardef\bxjs@isc@ll=128
```

- 299 \mathchardef\bxjs@isc@sl=259
- $300 \def\bxjs@isc@sl@h{65539}$ }
- 301 \def\bxjs@invscale#1#2{%
- 302 \begingroup \@tempdima=#1\relax \@tempdimb#2\p@\relax
- 303 \ifdim\@tempdima<\bxjs@isc@ll\p@
- 304 \@tempcnta\@tempdima \multiply\@tempcnta\@cclvi
- 305 \divide\@tempcnta\@tempdimb \multiply\@tempcnta\@cclvi
- 306 \else
- 307 \@tempcnta\@tempdima \divide\@tempcnta\@tempdimb
- 308 \multiply\@tempcnta\p@ \let\bxjs@isc@sl\bxjs@isc@sl@h
- 309 \fi
- 310 \@tempcntb\p@ \divide\@tempcntb\@tempdimb
- 311 \advance\@tempcnta-\@tempcntb \advance\@tempcnta-\tw@
- $\tt 312 \qquad \verb|\dtempdimb|\dtempcnta|\dne$
- $\verb| advance @ temponta & advance & tempontb | advance & tempontb | temponta & tempontb | tempontb$
- 315 \@whiledim\@tempdimb<\@tempdimc\do{%
- $\verb| \dots| $$ \dots| $$ \dots| \dots$
- 317 \advance\@tempcntb\@ne \divide\@tempcntb\tw@
- 318 \ifdim #2\@tempcntb>\@tempdima
- 319 \advance\@tempcntb\m@ne \@tempdimc=\@tempcntb\@ne
- 320 \else \@tempdimb=\@tempcntb\@ne \fi}%
- 321 \xdef\bxjs@gtmpa{\the\@tempdimb}%
- 322 \endgroup #1=\bxjs@gtmpa\relax}

#### ■複合設定オプション 彎

複合設定オプションとは、「エンジンやドライバや和文ドライバの設定を含む、複数の設定を一度に行うオプション」のことである。ある特定の設定を短く書く必要性が高いと判断さ

れる場合に用意される。

\bxjs@composite@proc 複合設定オプションのための遅延処理マクロ。

323 \let\bxjs@composite@proc\relax

pandoc オプションは、Pandoc で LATEX 用の既定テンプレートを用いて他形式から LATEX (および PDF) 形式に変換する用途に最適化した設定を与える。

324 \DeclareOption{pandoc}{%

和文ドライバを pandoc に、エンジン指定を autodetect-engine に変更する。

※実際の和文ドライバ・エンジン設定より優先される。

- 325 \def\bxjs@composite@proc{%
- \bxjs@oldfontcommandstrue 326
- \setkeys{bxjs}{ja=pandoc}% 327
- 328 \let\bxjs@engine@given=\*}%

ドライバオプションを dvi=dvipdfmx 相当に変更する。

※これは実際のドライバ設定で上書きできる(オプション宣言順に注意)。

TODO: できない気がする…。

- \def\bxjs@driver@opt{dvipdfmx}%
- \bxjs@dvi@opttrue} 330

#### ■エンジン・ドライバオプション 彎

\bxjs@engine@given オプションで明示されたエンジンの種別。

331 %\let\bxjs@engine@given\@undefined

\bxjs@engine@opt 明示されたエンジンのオプション名。

エンジン明示指定のオプションの処理。

- ※ 0.9pre 版の暫定仕様と異なり、エンジン名は ...latex に限定する。xetex や pdftex は一般的な IATEX の慣習に従って「ドライバの指定」とみなすべきだから。
- 333 \DeclareOption{autodetect-engine}{%
- \let\bxjs@engine@given=\*}
- 335 \DeclareOption{latex}{%
- \def\bxjs@engine@opt{latex}% 336
- 337 \let\bxjs@engine@given=n}
- 338 \DeclareOption{platex}{%
- \def\bxjs@engine@opt{platex}%
- \let\bxjs@engine@given=j}
- 341 \DeclareOption{uplatex}{%
- 342 \def\bxjs@engine@opt{uplatex}%
- \let\bxjs@engine@given=u}
- 344 \DeclareOption{xelatex}{%
- 345 \def\bxjs@engine@opt{xelatex}%

```
\let\bxjs@engine@given=x}
                   346
                   347 \DeclareOption{pdflatex}{%
                        \def\bxjs@engine@opt{pdflatex}%
                        \let\bxjs@engine@given=p}
                   349
                   350 \DeclareOption{lualatex}{%
                        \def\bxjs@engine@opt{lualatex}%
                   351
                        \let\bxjs@engine@given=1}
                   352
                   353 \DeclareOption{platex-ng}{%
                        \def\bxjs@engine@opt{platex-ng}%
                   354
                        \let\bxjs@engine@given=g}
                   355
                   356 \DeclareOption{platex-ng*}{%
                        \def\bxjs@engine@opt{platex-ng*}%
                   357
                        \let\bxjs@platexng@nodrv=t%
                   358
                        \let\bxjs@engine@given=g}
                   359
\bxjs@driver@given オプションで明示されたドライバの種別。
                   360 %\let\bxjs@driver@given\@undefined
                   361 \let\bxjs@driver@@dvimode=0
                   362 \let\bxjs@driver@@dvipdfmx=1
                   363 \let\bxjs@driver@@pdfmode=2
                   364 \let\bxjs@driver@@xetex=3
                   365 \let\bxjs@driver@@dvips=4
                   366 \let\bxjs@driver@@none=5
  \bxjs@driver@opt 明示された「ドライバ指定」のオプション名。
                   367 %\let\bxjs@driver@opt\@undefined
                   368 \DeclareOption{dvips}{%
                        \def\bxjs@driver@opt{dvips}%
                        \let\bxjs@driver@given\bxjs@driver@@dvips}
                   371 \DeclareOption{dviout}{%
                        \def\bxjs@driver@opt{dviout}%
                   372
                        \let\bxjs@driver@given\bxjs@driver@@dvimode}
                   373
                   374 \DeclareOption{xdvi}{%
                        \def\bxjs@driver@opt{xdvi}%
                   375
                        \let\bxjs@driver@given\bxjs@driver@@dvimode}
                   377 \DeclareOption{dvipdfmx}{%
                   378
                        \def\bxjs@driver@opt{dvipdfmx}%
                        \let\bxjs@driver@given\bxjs@driver@@dvipdfmx}
                   380 \DeclareOption{nodvidriver}{%
                        \def\bxjs@driver@opt{nodvidriver}%
                   381
                   382
                        \let\bxjs@driver@given\bxjs@driver@@none}
                   383 \DeclareOption{pdftex}{%
                        \def\bxjs@driver@opt{pdftex}%
                        \let\bxjs@driver@given\bxjs@driver@@pdfmode}
                   385
                   386 \DeclareOption{luatex}{%
                        \def\bxjs@driver@opt{luatex}%
                   387
                        \let\bxjs@driver@given\bxjs@driver@@pdfmode}
                   388
                   389 \DeclareOption{xetex}{%
```

- 390 \def\bxjs@driver@opt{xetex}%
- 391 \let\bxjs@driver@given\bxjs@driver@@xetex}

「もし DVI モードであればドライバを dvipdfmx にする」というオプション。

- ※1.2 版で dvi オプションが新設されたが、互換性のためこのオプションも残す。
- 392 \DeclareOption{dvipdfmx-if-dvi}{%
- 393 \setkeys{bxjs}{dvi=dvipdfmx}}

#### ■その他の BXJS 独自オプション 彎

\ifbxjs@usezw \jsZw の同義語として \zw を使えるようにするか。既定は真。

394 \newif\ifbxjs@usezw \bxjs@usezwtrue

zw、nozw オプションの定義。

 $395 \verb|\DeclareOption{nozw}{{\{\%}}$ 

396 \bxjs@usezwfalse}

397 \DeclareOption{zw}{%

398 \bxjs@usezwtrue}

\ifbxjs@disguise@js JS クラスの派生クラスのふりをするか。既定は真。

 $399 \newif\ifbxjs@disguise@js \bxjs@disguise@jstrue$ 

nojs、js オプションの定義。

400 \DeclareOption{nojs}{%

401 \bxjs@disguise@jsfalse}

402 \DeclareOption{js}{%

403 \bxjs@disguise@jstrue}

\ifbxjs@precisetext XFTFX の "generateactualtext" を有効にするか。既定は偽。

 $404 \neq 04$ 

noprecisetext / precisetext オプションの定義。

405 \DeclareOption{noprecisetext}{%

406 \bxjs@precisetextfalse}

407 \DeclareOption{precisetext}{\%

408 \bxjs@precisetexttrue}

\ifbxjs@simplejasetup XxTeX の "linebreaklocale" を有効にするか。既定は真(であるが多くの場合は後に無効化される)。

 $409 \verb|\newif\ifbxjs@simplejasetup| \verb|\bxjs@simplejasetuptrue|$ 

nosimplejasetup / simplejasetup オプションの定義。

410 \DeclareOption{nosimplejasetup}{%

411 \bxjs@simplejasetupfalse}

412 \DeclareOption{simplejasetup}{%

413 \bxjs@simplejasetuptrue}

\ifbxjs@bigcode upTEX で有効化する ToUnicode CMap として「UTF8-UCS2」の代わりに「UTF8-UTF16」 を使うか。BMP 外の文字に対応できる「UTF8-UTF16」の方が望ましいのであるが、この ファイルが利用可能かの確実な判定が困難であるため、オプションで指定することとする。

414 \newif\ifbxjs@bigcode \bxjs@bigcodefalse

その上で、「 $T_{FX}$  環境がある程度新しければ利用可能であろう」と判断し bxjs@bigcode の 既定値を真とする。具体的な判断基準として、「TpX のバージョンが 3.14159265(2014年1 月)以上であるか」を採用する。

- 415 \edef\bxjs@tmpa{\expandafter\noexpand\csname\endcsname}
- 416 \def\bxjs@tmpb#1 #2#3\@nil{%
- 417 \ifx1#2\bxjs@bigcodetrue \fi}
- 418 \expandafter\bxjs@tmpb\meaning\bxjs@tmpa1 0\@nil

nobigcode / bigcode オプションの定義。

- 419 \DeclareOption{nobigcode}{%
- 420 \bxjs@bigcodefalse}
- 421 \DeclareOption{bigcode}{%
- \bxjs@bigcodetrue}

\ifbxjs@oldfontcommands \allowoldfontcommands を既定で有効にするか。

423 \newif\ifbxjs@oldfontcommands

nooldfontcommands、oldfontcommands オプションの定義。

- ※ oldfontcommands オプションの名前は memoir クラスに倣った。 ちなみに KOMA-Script では enabledeprecatedfontcommands であるがこれはチョットアレなので避けた。
- 424 \DeclareOption{nooldfontcommands}{%
- \bxjs@oldfontcommandsfalse}
- 426 \DeclareOption{oldfontcommands}{%
- \bxjs@oldfontcommandstrue}

#### ■keyval 型のオプション 彎

- 428 \def\bxjs@setkey{%
- \expandafter\bxjs@setkey@a\expandafter{\CurrentOption}}
- 430 \def\bxjs@setkey@a{\bxjs@safe@setkeys{bxjs}}
- 431 \DeclareOption\*{\bxjs@setkey}

\bxjs@safe@setkeys 未知のキーに対してエラー無しで無視する \setkeys。

- 432 \def\bxjs@safe@setkeys#1#2{%
- 433 \let\bxjs@KV@errx\KV@errx
- 434 \let\KV@errx\bxjs@safe@setkeys@a
- 435 \setkeys{#1}{#2}%
- 436 \let\KV@errx\bxjs@KV@errx}
- 437 \def\bxjs@safe@setkeys@a#1{}

 $\verb|\bxjs@set@keyval| \{\langle key\rangle\} \{\langle value\rangle\} \{\langle error\rangle\}|$ 

```
\bxjs@kv@\key\@\value\ が定義済ならそれを実行し、未定義ならエラーを出す。
                                        438 \det \bxjs@set@keyval#1#2#3{%}
                                                   \verb|\expandafter\bxjs@next\csname| bxjs@kv@#1@#2\endcsname| |
                                        439
                                                   \ifx\bxjs@next\relax
                                        440
                                        441
                                                        \bxjs@error@keyval{#1}{#2}%
                                       442
                                                        #3%
                                        443
                                                   \else \bxjs@next
                                        444
                                                   \fi}
                                       445 \@onlypreamble\bxjs@error@keyval
                                        446 \def\bxjs@error@keyval#1#2{%
                                        447
                                                    \ClassError\bxjs@clsname
                                                      {Invalid value '#2' for option #1}\@ehc}
\ifbxjs@scaleset 和文スケール値が指定されたか。
                                       449 \newif\ifbxjs@scaleset
                  \jsScale 〔実数値マクロ〕和文スケール値。
                                       450 \def\jsScale{0.924715}
                                              base オプションの処理。
                                        451 \define@key{bxjs}{base}{\bxjs@setbasefontsize{#1}}
                                              jbase オプションの処理。ここでは \jsScale の値を使用する。scale の処理との順序
                                         依存を消すため、jbase の処理の実行を遅延させている。
                                        452 \@onlypreamble\bxjs@do@opt@jbase
                                        453 \let\bxjs@do@opt@jbase\relax
                                       454 \ensuremath{\mbox{\mbox{$4$}}} \{jbase} {\ensuremath{\mbox{\mbox{$4$}}}} \ensuremath{\mbox{$4$}} \} to the contract of the
                                       455 \def\bxjs@setjbasefontsize#1{%
                                       456
                                                   \def\bxjs@do@opt@jbase{%
                                                        \bxjs@setbasefontlength\@tempdima{#1}%
                                       457
                                        458
                                                        \bxjs@invscale\@tempdima\jsScale
                                                        \bxjs@setbasefontsize{\@tempdima}}}
                                        459
                                              scale オプションの処理。
                                       460 \leq e^{60} 
                                                    \bxjs@scalesettrue
                                                   \edef\jsScale{#1}}
                                              noscale オプションの処理。
                                        463 \DeclareOption{noscale}{%
                                                   \bxjs@scalesettrue
                                                   \def\jsScale{1}}
  \bxjs@param@mag mag オプションの値。
                                        466 \let\bxjs@param@mag\relax
                                              mag オプションの処理。
                                        467 \ensuremath{$\ $$ \ensuremath{$\ $$}{\mbox{edef}\xspaces} \ensuremath{$\ $$}}{\mbox{edef}\xspaces} \ensuremath{$\ $$}
                                              paper オプションの処理。
                                        468 \define@key{bxjs}{paper}{\edef\bxjs@param@paper{#1}}
```

```
\bxjs@jadriver 和文ドライバの名前。
                                   469 \let\bxjs@jadriver\relax
                                   470 %\let\bxjs@jadriver@given\@undefined
                                          ja オプションの処理。
                                     ※ jadriver は 0.9 版で用いられた旧称。
                                     ※単なる ja という指定は無視される (Pandoc 対策)。
                                   471 \define@key{bxjs}{jadriver}{\edef\bxjs@jadriver{#1}}
                                   472 \displaystyle \frac{472 \text{ } \text{define@key{bxjs}{ja}[\relax]{%}}}{}
                                   473 \ifx\relax#1\else\edef\bxjs@jadriver{#1}\fi}
           \jsJaFont 和文フォント設定の名前。
                                   474 \let\jsJaFont\@empty
                                          jafont オプションの処理。
                                   475 \define@key{bxjs}{jafont}{\edef\jsJaFont{#1}}
         \jsJaParam 和文ドライバパラメタの文字列。
                                   476 \let\jsJaParam\@empty
                                          japaram オプションの処理。
                                   477 \end{fine} \end{fine} \begin{fine} \end{fine} \align{fine} \alig
\bxjs@magstyle magstyle 設定値。(古いイマイチな名前。)
                                   478 \let\bxjs@magstyle@mag=m
                                   479 \let\bxjs@magstyle@real=r
                                   480 \let\bxjs@magstyle@xreal=x
                                     (新しい素敵な名前。)
                                     ※ただし制御綴としては、*付の名前は扱い難いので、\bxjs@magstyle@xreal の方を優先
                                      させる。
                                   481 \let\bxjs@magstyle@usemag\bxjs@magstyle@mag
                                   482 \let\bxjs@magstyle@nomag\bxjs@magstyle@real
                                   483 \expandafter\let\csname bxjs@magstyle@nomag*\endcsname\bxjs@magstyle@xreal
                                     \bxjs@magstyle@default は既定の値を表す。
                                   484 \let\bxjs@magstyle@default\bxjs@magstyle@usemag
                                   485 \ifx 1\jsEngine \ifnum\luatexversion>86
                                   {\tt 486} \qquad \verb|\label{thm:magstyle@defaultbxjs@magstyle@xreal}|
                                   487 \fi\fi
                                   488 \ifjsWithpTeXng
                                   489 \let\bxjs@magstyle@default\bxjs@magstyle@xreal
                                   490 \fi
                                   491 \let\bxjs@magstyle\bxjs@magstyle@default
                                          magstyle オプションの処理。
                                   492 \ensuremath{ \mbox{define@key{bxjs}{magstyle}{\%}}}
                                             \expandafter\let\expandafter\bxjs@magstyle\csname
```

```
\ClassError\bxjs@clsname
                496
                        {Invalid value '#1' for option magstyle}\@ehc
                497
                       \let\bxjs@magstyle\bxjs@magstyle@default
                498
                     fi
                499
 \bxjs@geometry geometry オプションの値。
                500 \let\bxjs@geometry@class=c
                501 \let\bxjs@geometry@user=u
                502 \let\bxjs@geometry\bxjs@geometry@class
                   geometry オプションの処理。
                503 \define@key{bxjs}{geometry}{%
                504
                     \expandafter\let\expandafter\bxjs@geometry\csname
                505
                      bxjs@geometry@#1\endcsname
                     \verb|\ifx\bxjs@geometry\relax| \\
                506
                       \ClassError\bxjs@clsname
                507
                        {Invalid value '#1' for option geometry}\@ehc
                508
                       \let\bxjs@geometry\bxjs@geometry@class
                509
                510
                     \fi}
\ifbxjs@fancyhdr 〔スイッチ〕fancyhdr パッケージに対する調整を行うか。
                511 \newif\ifbxjs@fancyhdr \bxjs@fancyhdrtrue
                   fancyhdr オプションの処理。
                512 \let\bxjs@kv@fancyhdr@true\bxjs@fancyhdrtrue
                513 \let\bxjs@kv@fancyhdr@false\bxjs@fancyhdrfalse
                514 \define@key{bxjs}{fancyhdr}[true]{%
                     \bxjs@set@keyval{fancyhdr}{#1}{}}
\ifbxjs@dvi@opt dvi オプションが指定されたか。
                516 \newif\ifbxjs@dvi@opt
                   DVIモードのドライバとドライバ種別との対応。
                517 \let\bxjs@dvidriver@@dvipdfmx=\bxjs@driver@@dvipdfmx
                518 \let\bxjs@dvidriver@@dvips=\bxjs@driver@@dvips
                519 \let\bxjs@dvidriver@@dviout=\bxjs@driver@@dvimode
                520 \let\bxjs@dvidriver@@xdvi=\bxjs@driver@@dvimode
                521 \let\bxjs@dvidriver@@nodvidriver=\bxjs@driver@@none
                   dvi オプションの処理。
                522 \define@key{bxjs}{dvi}{%
                     \expandafter\let\expandafter\bxjs@tmpa\csname
                      bxjs@dvidriver@@#1\endcsname
                524
                     \ifx\bxjs@tmpa\relax
                525
                526
                       \ClassError\bxjs@clsname
                527
                        {Invalid value '#1' for option dvi}\@ehc
                     \else
                528
```

bxjs@magstyle@#1\endcsname

\ifx\bxjs@magstyle\relax

494

495

```
\bxjs@driver@given を未定義にしていることに注意。
                                   \def\bxjs@driver@opt{#1}%
                            529
                                   \let\bxjs@driver@given\@undefined
                            530
                                   \bxjs@dvi@opttrue
                            531
                                 \fi}
 \ifbxjs@layout@buggyhmargin [スイッチ] bxjsbook の左右マージンがアレか。
                             ※ layout が v1 の場合はアレになる。
                            533 \newif\ifbxjs@layout@buggyhmargin
\ifbxjs@force@chapterabstract 〔スイッチ〕abstract 環境を chapterabstract にするか。
                             ※ bxjsbook では常に真。bxjsreport では layout が v1 の場合に真になる。
                            534 \newif\ifbxjs@force@chapterabstract
                            535 %<book>\bxjs@force@chapterabstracttrue
                               layout オプションの処理。
                            536 \@namedef{bxjs@kv@layout@v1}{%
                            537 %<book>\bxjs@layout@buggyhmargintrue
                            538 %<report>\bxjs@force@chapterabstracttrue
                            540 \@namedef{bxjs@kv@layout@v2}{%
                            541 %<book>\bxjs@layout@buggyhmarginfalse
                            542 %<report>\bxjs@force@chapterabstractfalse
                            543 }
                            544 \define@key{bxjs}{layout}{%
                                 \bxjs@set@keyval{layout}{#1}{}}
       \bxjs@textwidth@limit textwidth-limit の指定値。\textwidth の上限。
                            546 %\let\bxjs@textwidth@limit\@undefined
                            547 \ensuremath{\mbox{define@key{bxjs}{textwidth-limit}{\%}}}
                                 \edef\bxjs@textwidth@limit{#1}}
        \bxjs@paragraph@mark paragraph-mark の指定値。パラグラフのマーク。
                            549 %\let\bxjs@paragraph@mark\@undefined
                            550 \define@key{bxjs}{paragraph-mark}{%
                                \edef\bxjs@paragraph@mark{#1}}
      \ifbxjs@whole@zw@lines 〔スイッチ〕whole-zw-lines の指定値。
                            552 \newif\ifbxjs@whole@zw@lines \bxjs@whole@zw@linestrue
                            553 \let\bxjs@kv@wholezwlines@true\bxjs@whole@zw@linestrue
                            554 \let\bxjs@kv@wholezwlines@false\bxjs@whole@zw@linesfalse
                            555 \define@key{bxjs}{whole-zw-lines}[true] {\bxjs@set@keyval{wholezwlines}{#1}{}}
         \ifbxjs@jaspace@cmd 〔スイッチ〕jaspace-cmd の指定値。
                            556 \newif\ifbxjs@jaspace@cmd \bxjs@jaspace@cmdtrue
                            557 \let\bxjs@kv@jaspacecmd@true\bxjs@jaspace@cmdtrue
                            558 \let\bxjs@kv@jaspacecmd@false\bxjs@jaspace@cmdfalse
                            559 \define@key{bxjs}{jaspace-cmd}[true]{\bxjs@set@keyval{jaspacecmd}{#1}{}}
                            560 \define@key{bxjs}{xkanjiskip-cmd}[true]{\bxjs@set@keyval{jaspacecmd}{#1}{}}
```

\ifbxjs@hyperref@enc 〔スイッチ〕hyperref-enc の指定値。

- 561 \newif\ifbxjs@hyperref@enc \bxjs@hyperref@enctrue
- 562 \let\bxjs@kv@hyperrefenc@true\bxjs@hyperref@enctrue
- $563 \verb|\label{lem:bxjs@kv@hyperrefenc@false|bxjs@hyperref@encfalse|}$
- 564 \define@key{bxjs}{hyperref-enc}[true]{\bxjs@set@keyval{hyperrefenc}{#1}{}}

\bxjs@everyparhook everyparhook の指定値。

- 565 \chardef\bxjs@everyparhook@none=0
- 566 \chardef\bxjs@everyparhook@compat=1
- 567 \chardef\bxjs@everyparhook@modern=2
- 568 \if j\jsEngine
- \let\bxjs@everyparhook\bxjs@everyparhook@compat
- 570 \else
- \let\bxjs@everyparhook\bxjs@everyparhook@modern 571
- 572 \fi
- 573 \def\bxjs@kv@everyparhook@none{\let\bxjs@everyparhook\bxjs@everyparhook@none}
- 574 \def\bxjs@kv@everyparhook@compat{\let\bxjs@everyparhook\bxjs@everyparhook@compat}
- 575 \def\bxjs@kv@everyparhook@modern{\let\bxjs@everyparhook\bxjs@everyparhook@modern}
- $576 \end{fine} \label{thm:condition} $$ \end{fine} \end{fine} \end{fine} $$ \end{fine} \end{fine} $$ \end{fine}$

#### ■オプションの実行

LATEX の実装では、クラスやパッケージのオプションのトークン列の中に { } が含まれ ると正常に処理ができない。これに対処する為 \@removeelement の実装に少し手を加える (仕様は変わらない)。

- ※クラスに \DeclareOption\* がある場合は \@unusedoptions は常に空のままであるこ とを利用している。
- 577 \let\bxjs@ltx@removeelement\@removeelement
- 578 \def\@removeelement#1#2#3{%
- \def\reserved@a{#2}% 579
- 580 \ifx\reserved@a\@empty \let#3\@empty
- \else \bxjs@ltx@removeelement{#1}{#2}{#3}%
- 582 \fi}

デフォルトのオプションを実行し、dvi ファイルの先頭に dvips の papersize special を書 き込みます。この special は dvips や最近の dviout が対応しています。multicols や url を \RequirePackage するのはやめました。

- 583 %<article>\ExecuteOptions{a4paper,oneside,onecolumn,notitlepage,final}
- 584 % <book > \ExecuteOptions {a4paper, two side, one column, title page, open right, final}
- 585 %<rerort>\ExecuteOptions{a4paper,oneside,onecolumn,titlepage,openany,final}
- 586 %<slide>\ExecuteOptions{36pt,a4paper,landscape,oneside,onecolumn,titlepage,final}
- 587 \ProcessOptions\relax
- 588 \bxjs@composite@proc

後処理

```
589 \if@slide
590 \def\maybeblue{\@ifundefined{ver@color.sty}{}{\color{blue}}}
591 \fi
592 \if@landscape
593 \setlength\@tempdima {\paperheight}
594 \setlength\paperheight{\paperwidth}
595 \setlength\paperwidth {\@tempdima}
596 \fi
```

#### ■グローバルオプションの整理 灣 –

グローバルオプションのトークン列に  $\{ \}$  が含まれていると、やはり後のパッケージの読込処理で不具合を起こすようである( $\ProcessOptions*$  がエラーになる)。従って、このようなオプションは除外することにする。

```
597 \@onlypreamble\bxjs@purge@brace@elts
598 \def\bxjs@purge@brace@elts{%
    \def\bxjs@tmpa{\@gobble}%
     \expandafter\bxjs@purge@be@a\@classoptionslist,\@nil,%
    \let\@classoptionslist\bxjs@tmpa}
602 \@onlypreamble\bxjs@purge@be@a
603 \def\bxjs@purge@be@a#1,{%
    \ifx\@nil#1\relax\else
604
       \bxjs@purge@be@b#1{}\@nil
605
606
       \if@tempswa \edef\bxjs@tmpa{\bxjs@tmpa,#1}\fi
607
       \expandafter\bxjs@purge@be@a
608
    \fi}
609 \@onlypreamble\bxjs@purge@be@b
610 \def\bxjs@purge@be@b#1#{\bxjs@purge@be@c}
611 \@onlypreamble\bxjs@purge@be@c
612 \def\bxjs@purge@be@c#1\@nil{%
613 \ifx\@nil#1\@nil \@tempswatrue \else \@tempswafalse \fi}
614 \bxjs@purge@brace@elts
  papersize、10pt、noscale の各オプションは他のパッケージと衝突を起こす可能性が
あるため、グローバルオプションから外す。
615 \@expandtwoargs\@removeelement
     {papersize}\@classoptionslist\@classoptionslist
617 \@expandtwoargs\@removeelement
    {10pt}\@classoptionslist\@classoptionslist
619 \@expandtwoargs\@removeelement
    {noscale}\@classoptionslist\@classoptionslist
```

■使用エンジンの検査・自動判定 ユーザが uplatex オプションの有無により指定したエンジンが、実際に使われているものと一致しているかを検査し、一致しない場合はエラーメッセージを表示します。

[2016-11-09] pLFT<sub>E</sub>X/ upLFT<sub>E</sub>X を自動判別するオプション autodetect-engine を新設しました。upLFT<sub>E</sub>X の場合は、グローバルオプションに uplatex を追加することで、自動

判定に応じて otf パッケージにも uplatex オプションが渡るようにします。

[2016-11-11] pI $\stackrel{\text{LY}}{\text{LE}}$ X の場合は、オプション uplatex が指定されていれば必ずエラーを出します。autodetect-engine が有効になっていてもエラーを出しますが、これは otf パッケージに uplatex オプションが渡ってしまうのを防ぐためです。

現在の(正規化前の)和文ドライバの値を \bxjs@jadriver@given に保存する。 621 \ifx\bxjs@jadriver\relax\else 623 \fi エンジン明示指定のオプションが与えられた場合は、それが実際のエンジンと一致するか を検査する。 624 \let\bxjs@tmpb\jsEngine 625 \ifx j\bxjs@tmpb\ifjsWithpTeXng 626 \let\bxjs@tmpb=g 627 \fi\fi 628 \ifx j\bxjs@tmpb\ifjsWithupTeX 629 \let\bxjs@tmpb=u 630 \fi\fi 631 \ifx p\bxjs@tmpb\ifjsInPdfMode\else 632 \let\bxjs@tmpb=n 633 \fi\fi (この時点で \bxjs@tmpb は \bxjs@engine@given と同じ規則で分類したコードをもって いる。) 634 \ifx \*\bxjs@engine@given 635 \let\bxjs@engine@given\bxjs@tmpb エンジン指定が autodetect-engine であり、かつ実際のエンジンが (u)pIATpX だった場 合は、本来のエンジンオプションをグローバルオプションに加える。 636 \ifx j\bxjs@engine@given \g@addto@macro\@classoptionslist{,platex} 637 638 \else\ifx u\bxjs@engine@given \g@addto@macro\@classoptionslist{,uplatex} 639 \fi\fi 640 641 **\fi** 642 \ifx\bxjs@engine@given\@undefined\else \ifx\bxjs@engine@given\bxjs@tmpb\else \ClassError\bxjs@clsname 644 {Option '\bxjs@engine@opt' used on wrong engine}\@ehc 645646 \fi 647\fi エンジンが pTpX-ng の場合、グローバルオプションに uplatex を追加する。 648 \ifjsWithpTeXng 650 \fi

■**ドライバ指定** 圏 ドライバ指定のオプションが与えられた場合は、それがエンジンと整合するかを検査する。

```
651 \@tempswatrue
652 \ifx \bxjs@driver@given\@undefined\else
    \ifjsInPdfMode
       \ifx\bxjs@driver@given\bxjs@driver@@pdfmode\else
654
655
        \@tempswafalse
      \fi
656
     \else\ifx x\jsEngine
657
      \ifx\bxjs@driver@given\bxjs@driver@@xetex\else
658
        \@tempswafalse
659
      \fi
660
661
     \else
      \ifx\bxjs@driver@given\bxjs@driver@@pdfmode
662
663
        \@tempswafalse
       \else\ifx\bxjs@driver@given\bxjs@driver@@xetex
664
        \@tempswafalse
665
666
      \ifjsWithpTeXng\ifx\bxjs@driver@given\bxjs@driver@@dvipdfmx\else
667
668
        \@tempswafalse
      \fi\fi
669
670
    \fi\fi
671 \fi
672 \if@tempswa\else
    \ClassError\bxjs@clsname
      {Option '\bxjs@driver@opt' used on wrong engine}\@ehc
675 \fi
  DVI 出力のエンジンである場合の追加処理。
676 \ifjsInPdfMode \@tempswafalse
677 \else\ifx x\jsEngine \@tempswafalse
678 \else\ifjsWithpTeXng \@tempswafalse
679 \else \@tempswatrue
680 \fi\fi\fi
681 \if@tempswa
 ドライバオプションがない場合は警告を出す。
※ただし ja 非指定の場合はスキップする (0.3 版との互換性のため)。
    \ifx\bxjs@driver@opt\@undefined \ifx\bxjs@jadriver@given\@undefined\else
683
      \ClassWarningNoLine\bxjs@clsname
684
       {No driver option is given}
dvi=XXX が指定されていた場合は、XXX が指定された時と同じ動作にする。(グローバルオ
 プションに XXX を追加する。)
    \ifbxjs@dvi@opt
686
      \edef\bxjs@nxt{%
687
```

\let\noexpand\bxjs@driver@given

688

```
\csname bxjs@dvidriver@@\bxjs@driver@opt\endcsname
689
690
        \noexpand\g@addto@macro\noexpand\@classoptionslist
691
         {,\bxjs@driver@opt}%
692
      }\bxjs@nxt
    \fi
693
694\fi
  エンジンが pTrX-ng の場合、グローバルオプションに dvipdfmx を追加する。ただし、
 エンジンオプションが platex-ng*(*付)の場合、および既に dvipdfmx が指定されてい
 る場合を除く。
695 \ \texttt{ifjsWithpTeXng}
    \ifx\bxjs@driver@given\bxjs@driver@@dvipdfmx
      \let\bxjs@platexng@nodrv\@undefined
697
    \else\ifx t\bxjs@platexng@nodrv\else
698
      \g@addto@macro\@classoptionslist{,dvipdfmx}
699
   \fi\fi
700
701 \fi
   ドライバが nodvidriver であった場合の処理。DVI ウェア依存の処理を全て無効化する。
702 \ifx\bxjs@driver@given\bxjs@driver@@none
703 \bxjs@papersizefalse
704\fi
■その他の BXJS 特有の後処理 ⑧ \bxjs@jadriver の正規化。値が未指定の場合は
minimal に変える。ただしエンジンが (u)pTpX である場合は standard に変える。
705 \def\bxjs@@minimal{minimal}
706 \ifx\bxjs@jadriver\relax
707
    \ifx j\jsEngine
708
      \def\bxjs@jadriver{standard}
    \else
709
      \let\bxjs@jadriver\bxjs@@minimal
710
711
712 \fi
  エンジンオプションがない場合はエラーを出す。
※ただし ja 非指定の場合はスキップする。
713 \ifx\bxjs@jadriver@given\@undefined\else
    \ifx\bxjs@engine@given\@undefined
      \ClassError\bxjs@clsname
715
       {An engine option must be explicitly given}%
716
       {When you use a Japanese-driver you must specify a correct\MessageBreak
717
        engine option.\MessageBreak\@ehc}
718
719 \fi\fi
  新しい LuaT<sub>F</sub>X (0.87 版以降) では mag がアレなので、magstyle=usemag が指定されて
```

新しい Lua $T_EX$  (0.87 版以降) では mag がアレなので、magstyle=usemag が指定されていた場合はエラーを出す。(この場合の既定値は nomag\* であり、エラーの場合は既定値に置き換えられる。)

 $720 \ \texttt{ifx} \texttt{bxjs@magstyle@default\bxjs@magstyle@mag\else}$ 

```
721 \ifx\bxjs@magstyle\bxjs@magstyle@mag
722 \left\bxjs@magstyle@magstyle@default
723 \ClassError\bxjs@clsname
724 {The engine does not support 'magstyle=usemag'}%
725 {LuaTeX v0.87 or later no longer supports the "mag" feature of TeX.\MessageBreak
726 The default value 'nomag*' is used instead.\MessageBreak \@ehc}
727 \fi
728 \fi
```

オプション処理時に遅延させていた jbase の処理をここで実行する。

729 \bxjs@do@opt@jbase

| Cjascale 和文クラス共通仕様 (※ただし ZR 氏提唱) における、和文スケール値の変数。 730 | let | Cjascale | jsScale |

8bit 欧文  $T_{EX}$  の場合は、高位バイトをアクティブ化しておく。(和文を含むマクロ定義を通用させるため。)

731 \if \if p\jsEngine T\else\if n\jsEngine T\else F\fi\fi T

732 \@tempcnta="80 \loop \ifnum\@tempcnta<"100

733 \catcode\@tempcnta\active

734 \advance\@tempcnta\@ne

735 \repeat

736 \fi

js オプション指定時は、jsarticle (または jsbook) クラスを読込済のように振舞う。 ※「2 つのクラスを読み込んだ状態」は \LoadClass を使用した場合に出現するので、別に 異常ではない。

737 \ifbxjs@disguise@js

738 %<book|report>\def\bxjs@js@clsname{jsbook}

739 %<!book&!report>\def\bxjs@js@clsname{jsarticle}

 $\label{eq:cls} $$ \end{figure} $$ \end{figur$ 

741 \fi

color/graphics パッケージが持つ出力用紙サイズ設定の機能は、BXJS クラスでは余計なので無効にしておく。このため、グローバルで nosetpagesize を設定しておく。

oldfontcommands オプション指定時は \allowoldfontcommands 命令を実行する。

743 \ifbxjs@oldfontcommands

744 \AtEndOfClass{\allowoldfontcommands}

745 \fi

■papersize スペシャルの出力 dvips の papersize スペシャルを出力します。これで dvips や新しい dviout で出力領域が自動設定できます。トンボの付いたときの用紙サイズは無意味ですが、いわゆる「ノビ」サイズという縦横1インチずつ長い用紙に出力することを考え

て、1 インチずつ加えました。ところが pIATEX  $2\varepsilon$  はトンボ出力幅を両側に 1 インチとって いますので、dvips 使用時に

-0.5in, -0.5in

というオプションを与えて両側 0.5 インチのトンボにするといいでしょう。

[2003-05-17] トンボをプレビューに使うことを考えて1インチを2インチにしました。

[2016-07-11] memoir クラスのマニュアルによると、トンボを含めた用紙の寸法は\stockwidth、\stockheightと呼ぶようですので、これを使うことにしました。

[2017-01-11] トンボオプションが指定されているとき「だけ」\stockwidth, \stockheight を定義するようにしました。

BXJS では出力用紙サイズ記録は geometry パッケージが行う。 また、JS クラスと異なり、\stockwidth、\stockheight は常に定義される。

746 \newdimen\stockwidth \newdimen\stockheight

747 \begingroup\expandafter\expandafter\expandafter\endgroup

748 \expandafter\ifx\csname iftombow\expandafter\endcsname\csname iftrue\endcsname

749 % \newdimen\stockwidth \newdimen\stockheight

750 \setlength{\stockwidth}{\paperwidth}

751 \setlength{\stockheight}{\paperheight}

752 \advance \stockwidth 2in

753 \advance \stockheight 2in

754\fi

#### ■基準となる行送り

\n@baseline 基準となる行送りをポイント単位で表したものです。

756 %<!slide>\ifdim\bxjs@param@basefontsize<10pt \def\n@baseline{15}%

757 %<!slide>\else \def\n@baseline{16}\fi

#### ■拡大率の設定

\bxjs@magstyle の値に応じてスイッチ jsc@mag と jsc@mag@xreal を設定する。

758 \ifx\bxjs@magstyle\bxjs@magstyle@mag

759 \jsc@magtrue

760 \else\ifx\bxjs@magstyle\bxjs@magstyle@xreal

761 \jsc@mag@xrealtrue

762 \fi\fi

サイズの変更は  $T_EX$  のプリミティブ  $\mbox{mag}$  を使って行います。9 ポイントについては行送 9 も若干縮めました。サイズについては全面的に見直しました。

[2008-12-26] 1000 / \mag に相当する \inv@mag を定義しました。truein を使っていた

ところを \inv@mag in に直しましたので、geometry パッケージと共存できると思います。 なお、新ドキュメントクラス側で 10pt 以外にする場合の注意:

- geometry 側でオプション truedimen を指定してください。
- geometry 側でオプション mag は使えません。

設定すべき \mag 値を (基底サイズ)/( $10\,\mathrm{pt}$ ) ×  $1000\,\mathrm{c}$  2算出。BXJS クラスでは、\mag を直接指定したい場合は、geometry 側ではなくクラスのオプションで行うものとする。

```
763 \ifx\bxjs@param@mag\relax
```

- 764 \@tempdima=\bxjs@param@basefontsize
- 765 \advance\@tempdima.001pt \multiply\@tempdima25
- 766 \divide\@tempdima16384\relax \@tempcnta\@tempdima\relax
- 767 \edef\bxjs@param@mag{\the\@tempcnta}
- 768 \else
- 769 % mag 値が直接指定された場合
- 770 \let\c@bxjs@cnta\@tempcnta
- 771 \setcounter{bxjs@cnta}{\bxjs@param@mag}
- 772 \ifnum\@tempcnta<\z@ \@tempcnta=\z@ \fi
- 773 % 有効な mag 値の範囲は 1--32768
- 774 \edef\bxjs@param@mag{\the\@tempcnta}
- 775 \advance\@tempcnta100000
- 776 \def\bxjs@tmpa#1#2#3#4#5\@nil{\@tempdima=#2#3#4.#5\p@}
- 777 \expandafter\bxjs@tmpa\the\@tempcnta\@nil
- 778 \edef\bxjs@param@basefontsize{\the\@tempdima}
- 779 \fi
- 780 \@tempcnta\bxjs@param@mag \advance\@tempcnta100000
- 781 \def\bxjs@tmpa#1#2#3#4\@nil{\@tempdima=#2#3.#4\p@}
- 782 \expandafter\bxjs@tmpa\the\@tempcnta\@nil
- 783 \edef\jsc@magscale{\strip@pt\@tempdima}
- $784 \verb|\label{lem:space}| 184 \verb|\label{lem:sp$
- 785 %\typeout{\string\jsDocClass: \meaning\jsDocClass}
- 786 %\typeout{\string\jsEngine: \meaning\jsEngine}
- 787 %\typeout{\string\jsBaseFontSize: \jsBaseFontSize}
- 788 %\typeout{\string\bxjs@param@mag: \bxjs@param@mag}
- 789 %\typeout{\string\jsc@magscale: \jsc@magscale}
- 790 %\typeout{\string\ifjsc@mag: \meaning\ifjsc@mag}
- 791 %\typeout{\string\ifjsc@mag@xreal: \meaning\ifjsc@mag@xreal}

[2016-07-08] \jsc@mpt および \jsc@mmm に, それぞれ 1pt および 1mm を拡大させた値を格納します。以降のレイアウト指定ではこちらを使います。

 $\mbox{mag}$  する場合 (現状はこれが既定) にコードの変更を低減するために、以下では必要に応じて、 $\mbox{jsc@mpt}$  を  $\mbox{p@?}$  と書く。その上で、 $\mbox{mag}$  する場合は ? を無視して  $\mbox{p@}$  と解釈させ、 $\mbox{mag}$  しない場合は ? を英字扱いにして  $\mbox{p@}$ ? という制御綴を $\mbox{jsc@mpt}$  と同値にする。

```
% (多分 2.0 版あたりで) JS クラスに合わせるため p0? 表記を止める予定。
        792 \newdimen\jsc@mpt
        793 \newdimen\jsc@mmm
        794 \ifjsc@mag
             \jsc@mmm=1mm
        796
             \color= \color= 9 \% p@? read as p@
        797
        798 \else
             \jsc@mpt=\jsc@magscale\p@
        799
             \jsc@mmm=\jsc@magscale mm
             \catcode`\?=11 \let\p@?\jsc@mpt
        802\fi
        803 \chardef\bxjs@qmcc=\catcode`\?\relax
           ここで pTeX の zw に相当する単位として用いる長さ変数 \jsZw を作成する。約束によ
         り、これは \jsScale × (指定フォントサイズ) に等しい。
           nozw 非指定時は \zw を \jsZw と同義にする。
        804 \newdimen\jsZw
        805 \jsZw=10\jsc@mpt \jsZw=\jsScale\jsZw
        806 \ifbxjs@usezw
        807 \providecommand*\zw{\jsZw}
        808 \fi
\zwspace 全角幅の水平空き。
        809 \def\zwspace{\hskip\jsZw\relax}
           そして、magstyle が nomag* の場合は、NFSS にパッチを当てる。
        810 \ifjsc@mag@xreal
             \RequirePackage{type1cm}
        811
             \let\jsc@invscale\bxjs@invscale
         ムニャムニャムニャ……。
             \expandafter\let\csname OT1/cmr/m/n/10\endcsname\relax
             \expandafter\let\csname OMX/cmex/m/n/10\endcsname\relax
        814
             \let\jsc0get0external0font\get0external0font
        815
             \def\get@external@font{%
               \jsc@preadjust@extract@font
        817
               \jsc@get@external@font}
        818
             \def\jsc@fstrunc#1{%
        819
        820
               \edef\jsc@tmpa{\strip@pt#1}%
               \expandafter\jsc@fstrunc@a\jsc@tmpa.****\@nil}
        821
             \def\jsc@fstrunc@a#1.#2#3#4#5#6\@ni1{%
        822
               \f $1$
        823
        824
                 \edef\jsc@tmpa{#1%
                 \frac{1}{1} ifnum#2#3>\z@ .#2\ifnum#3>\z@ #3\fi\fi}%
        825
        826
             \def\jsc@preadjust@extract@font{%
        827
               \let\jsc@req@size\f@size
        828
```

```
829
                    \dimen@\f@size\p@ \jsc@invscale\dimen@\jsc@magscale
             830
                    \advance\dimen@.005pt\relax \jsc@fstrunc\dimen@
                    \let\jsc@ref@size\jsc@tmpa
             831
                    \let\f@size\jsc@ref@size}
             832
                  \def\execute@size@function#1{%
             833
             834
                    \let\jsc@cref@size\f@size
                    \let\f@size\jsc@req@size
             835
             836
                    \csname s@fct@#1\endcsname}
                  \let\jsc@DeclareErrorFont\DeclareErrorFont
             837
             838
                  \def\DeclareErrorFont#1#2#3#4#5{%
                    \@tempdimc#5\p@ \@tempdimc\jsc@magscale\@tempdimc
             839
                    840
                    \expandafter\jsc@DeclareErrorFont\jsc@tmpa}
             841
             842
                  \def\gen@sfcnt{%
                    \edef\mandatory@arg{\mandatory@arg\jsc@cref@size}%
             843
                    \empty@sfcnt}
             844
                  \def\genb@sfcnt{%
             845
             846
                    \edef\mandatory@arg{%
             847
                      \empty@sfcnt}
             848
             849
                  \label{lem:declareErrorFont} $$ \operatorname{Cmr}_{m}_{n}_{10}$
             850 \fi
                [2016-11-16] latex.ltx (ltspace.dtx) で定義されている \smallskip の, 単位 pt を
              \jsc@mpt に置き換えた \jsc@smallskip を定義します。これは \maketitle で用い
              られます。\jsc@medskip と \jsc@bigskip は必要ないのでコメントアウトしています。
\jsc@smallskip
  \jsc@medskip 851 \def\jsc@smallskip{\vspace\jsc@smallskipamount}
```

```
\jsc@medskip 851 \def\jsc@smallskip{\vspace\jsc@smallskipamount} 852 %\def\jsc@medskip{\vspace\jsc@medskipamount} 853 %\def\jsc@bigskip{\vspace\jsc@bigskipamount}
```

\jsc@smallskipamount

 $\verb|\jsc@medskipamount|| 854 \verb|\newskip\jsc@smallskipamount||$ 

\jsc@bigskipamount

855 \jsc@smallskipamount=3\jsc@mpt plus 1\jsc@mpt minus 1\jsc@mpt

856 %\newskip\jsc@medskipamount

857 %\jsc@medskipamount =6\jsc@mpt plus 2\jsc@mpt minus 2\jsc@mpt

858 %\newskip\jsc@bigskipamount

859 %\jsc@bigskipamoun =12\jsc@mpt plus 4\jsc@mpt minus 4\jsc@mpt

[2016-07-11] 新しく追加した\stockwidth, \stockheight も\mag にあわせてスケールします。

[2017-01-11] トンボオプションが指定されているとき「だけ」\stockwidth,\stockheight が定義されています。

■pagesize スペシャルの出力 [2003-05-17] dvipdfm(x) の pagesize スペシャルを出力します。

[2004-08-08] 今の dvipdfmx は dvips 用スペシャルを理解するようなので外しました。

```
860 % \ifpapersize
861 % \setlength{\Otempdima}{\paperwidth}
862 % \setlength{\Otempdimb}{\paperheight}
863 % \iffombow
864 % \advance \Otempdima 2truein
865 % \advance \Otempdimb 2truein
866 % \fi
867 % \AtBeginDvi{\special{pdf: pagesize width \the\Otempdima\space height \the\Otempdimb}}
868 % \fi
```

### 3 和文フォントの変更

和文フォントの設定は和文ドライバの管轄。

\@ 欧文といえば、 $I \neq T_E X$  の \def\@{\spacefactor\@m} という定義(\@m は 1000)では I watch  $TV \setminus @$ . と書くと V とピリオドのペアカーニングが効かなくなります。そこで、次 のような定義に直し、I watch  $TV \setminus @$  と書くことにします。

[2016-07-14] 2015-01-01 の IATEX で、auxiliary files に書き出されたときにスペースが食われないようにする修正が入りました。これに合わせて {} を補いました。

- 869 \chardef\bxjs@periodchar=`\.
- 870 \bxjs@protected\def\bxjs@SE{\spacefactor\sfcode\bxjs@periodchar}
- $871 \def\0{\bxjs0SE{}}$

#### 4 フォントサイズ

フォントサイズを変える命令(\normalsize, \small など)の実際の挙動の設定は、三つの引数をとる命令 \@setfontsize を使って、たとえば

\@setfontsize{\normalsize}{10}{16}

のようにして行います。これは

\normalsize は 10 ポイントのフォントを使い, 行送りは 16 ポイントである

という意味です。ただし、処理を速くするため、以下では 10 と同義の  $IAT_{EX}$  の内部命令 Contolerapha を使っています。この Contolerapha の類は次のものがあり、Contolerapha 本体で定義されています。

```
      \@vpt
      5
      \@vipt
      6
      \@viipt
      7

      \@viipt
      8
      \@ixpt
      9
      \@xpt
      10

      \@xipt
      10.95
      \@xiipt
      12
      \@xivpt
      14.4
```

ここでは \@setfontsize の定義を少々変更して、段落の字下げ \parindent, 和文文字間のスペース \kanjiskip, 和文・欧文間のスペース \xkanjiskip を変更しています。

\kanjiskip は pIAT<sub>E</sub>X  $2_{\varepsilon}$  で Opt plus .4pt minus .5pt に設定していますが,これは そもそも文字サイズの変更に応じて変わるべきものです。それに,プラスになったりマイナスになったりするのは,追い出しと追い込みの混在が生じ,統一性を欠きます。 なるべく追い出しになるようにプラスの値だけにしたいところですが,ごくわずかなマイナスは許すことにしました。

\xkanjiskip については、四分つまり全角の 1/4 を標準として、追い出すために三分あるいは二分まで延ばすのが一般的ですが、ここでは Times や Palatino のスペースがほぼ四分であることに着目して、これに一致させています。これなら書くときにスペースを空けても空けなくても同じ出力になります。

\parindent については、0 (以下) でなければ全角幅 (1zw) に直します。 [2008-02-18] english オプションで \parindent を 1em にしました。

\set@fontsize \fontsize 命令(\large 等でなく)でフォントサイズ変更した場合にもフックが実行されるように、\@setfontsize ではなく \set@fontsize に対してパッチを当てるように変更。

 $872 \end{area} $$872 \end{area} \end{area} $$12 \end{area} $$1442443$$ 

873 \expandafter\bxjs@tmpa\expandafter{%

874 \set@fontsize{#1}{#2}{#3}%

875 % 末尾にコードを追加

876 \expandafter\def\expandafter\size@update\expandafter{%

877 \size@update

878 \jsFontSizeChanged}%

879 }

\jsFontSizeChanged フォントサイズ変更時に呼ばれるフック。\jsZw を再設定している。その後でユーザ定義用のフック \jsResetDimen を実行する。

880 \newcommand\*\jsFontSizeChanged{%

881  $\jsZw=\f@size\p@$ 

882 \jsZw=\jsScale \jsZw

883 \ifdim\parindent>\z@

884 \if@english \parindent=1em

885 \else \parindent=1\jsZw

886 \fi

 $887 \fi\relax$ 

888 \jsResetDimen}

\jsResetDimen ユーザ定義用のフック。

889 \newcommand\*\jsResetDimen{}

\jsc@setfontsize クラスファイルの内部では、拡大率も考慮した \jsc@setfontsize を\@setfontsize の 変わりに用いることにします。

 $890 \ifjsc@mag$ 

891 \let\jsc@setfontsize\@setfontsize

892 \else

- 893 \def\jsc@setfontsize#1#2#3{%
- 894 \@setfontsize#1{#2\jsc@mpt}{#3\jsc@mpt}}

895 \fi

これらのグルーをもってしても行分割ができない場合は、 $\ensuremath{\mathsf{\centergencystretch}}$  に訴えます。

これはフォントサイズ非依存なので \Cwd で書くのが適当だが、\Cwd はまだ定義されていない。

896 \emergencystretch 3\jsZw

\ifnarrowbaselines

欧文用に行間を狭くする論理変数と、それを真・偽にするためのコマンドです。

\narrowbaselines \widebaselines

[2003-06-30] 数式に入るところで \narrowbaselines を実行しているので \abovedisplayskip 等が初期化されてしまうという shintok さんのご指摘に対して、しっぽ愛好家さんが次の修正を教えてくださいました。

[2008-02-18] english オプションで最初の段落のインデントをしないようにしました。 TODO: Hasumi さん [qa:54539] のご指摘は考慮中です。

別行立て数式に入るときに \narrowbaselines が呼ばれるが、このコードでは「数式中で \normalsize などのサイズ命令(\@currsize の実体)が呼ばれた」ことになり警告が出る。JS クラスでは、\@setfontsize 中の \@nomath 実行を消して「そもそもサイズ命令で警告が出ない」ようにしている。警告が常に出ないのも望ましくないので、BXJS クラスの実装では、\narrowbaselines の時だけ警告が出ないようにする。

- 897 \newif\ifnarrowbaselines
- 898 \if@english
- 899 \narrowbaselinestrue
- 900\fi
- 901 \def\narrowbaselines{%
- 902 \narrowbaselinestrue
- 903 \skip0=\abovedisplayskip
- 904  $\sl_2=\abovedisplayshortskip$
- 905  $\slip_{905} \slip_{905}$
- 906 \skip6=\belowdisplayshortskip
- 907% 一時的に警告を無効化する
- 909 \let\@nomath\@gobble
- 910 \@currsize\selectfont
- 911 \let\@nomath\bxjs@ltx@nomath
- 912 \abovedisplayskip=\skip0
- 913 \abovedisplayshortskip=\skip2
- 914 \belowdisplayskip=\skip4
- 915 \belowdisplayshortskip=\skip6\relax}
- $916\ \texttt{\def\widebaselines\{\narrowbaselinesfalse\@currsize\selectfont\}}$

microtype パッケージを読み込んだ場合、\normalsize 等のフォントサイズ変更命令の 定義の中に if 文が使われていると、不可解なエラーが発生する。これは microtype が邪悪 なトリックを使用しているせいなのだが、一応こちら側で対策をとることにする。

- 917 \def\bxjs@if@narrowbaselines{%
- \ifnarrowbaselines\expandafter\@firstoftwo
- \else \expandafter\@secondoftwo 919
- 920
- 921 }

\normalsize 標準のフォントサイズと行送りを選ぶコマンドです。

本文 10 ポイントのときの行送りは、欧文の標準クラスファイルでは 12 ポイント、アス キーの和文クラスファイルでは 15 ポイントになっていますが,ここでは 16 ポイントにしま した。ただし \narrowbaselines で欧文用の 12 ポイントになります。

公称 10 ポイントの和文フォントが約 9.25 ポイント (アスキーのものの 0.961 倍) である こともあり、行送りがかなりゆったりとしたと思います。実際、 $16/9.25 \approx 1.73$  であり、和 文の推奨値の一つ「二分四分」(1.75)に近づきました。

microtype 対策のため if 文を避ける。

- 922 \renewcommand{\normalsize}{%
- \bxjs@if@narrowbaselines{%
- 924 \jsc@setfontsize\normalsize\@xpt\@xiipt
- 925 }{%else
- \jsc@setfontsize\normalsize\@xpt{\n@baseline}% 926
- 927 }%

数式の上のアキ(\abovedisplayskip),短い数式の上のアキ(\abovedisplayshortskip), 数式の下のアキ(\belowdisplayshortskip)の設定です。

[2003-02-16] ちょっと変えました。

[2009-08-26] T<sub>F</sub>X Q&A 52569 から始まる議論について逡巡していましたが、結局、微調 節してみることにしました。

- \abovedisplayskip 11\p0? \@plus3\p0? \@minus4\p0?
- \abovedisplayshortskip \z@ \@plus3\p@?
- \belowdisplayskip 9\p0? \@plus3\p0? \@minus4\p0?
- \belowdisplayshortskip \belowdisplayskip

最後に, リスト環境のトップレベルのパラメータ \@listI を, \@listi にコピーしてお きます。\@listIの設定は後で出てきます。

932 \let\@listi\@listI}

ここで実際に標準フォントサイズで初期化します。

933 \normalsize

\Cht 基準となる長さの設定をします。 $pIAT_EX\ 2_{\varepsilon}\ カーネル$ (plfonts.dtx)で宣言されているパ \Cdp ラメータに実際の値を設定します。たとえば \Cwd は \normalfont の全角幅(1zw)です。 \Cwd [2017-08-31] 基準とする文字を「全角空白」(EUC コード 0xA1A1)から「漢」(JIS コー \Cvs ド 0x3441)へ変更しました。

\Chs

\Cwd 等の変数は pTFX 系以外では未定義なのでここで定義する。

```
934 \left( \frac{\mbox{\line} \mbox{\line}}{935 \mbox{\line} \m
```

938 \ifx\Chs\@undefined \newdimen\Chs \fi

規約上、現在の \jsZw の値が \Cwd である。BXJS では \Cht と \Cdp は単純に \Cwd の88% と 12% の値とする。

```
939 \setlength\Cht{0.88\jsZw}
940 \setlength\Cdp{0.12\jsZw}
941 \setlength\Cwd{1\jsZw}
942 \setlength\Cvs{\baselineskip}
943 \setlength\Chs{1\jsZw}
```

\small \small も \normalsize と同様に設定します。行送りは,\normalsize が 16 ポイントなら,割合からすれば  $16 \times 0.9 = 14.4$  ポイントになりますが,\small の使われ方を考えて,ここでは和文 13 ポイント,欧文 11 ポイントとします。また,\topsep と \parsep は,元はそれぞれ  $4\pm 2$ , $2\pm 1$  ポイントでしたが,ここではゼロ(\z0)にしました。

microtype 対策のため if 文を避ける。後の \footnotesize も同様。

```
944 \newcommand{\small}{\%
945 \bxjs@if@narrowbaselines{%
946 %<!kiyou>
                \jsc@setfontsize\small\@ixpt{11}%
947 %<kiyou>
               \jsc@setfontsize\small{8.8888}{11}%
948 }{%else
949 %<!kiyou>
                \jsc@setfontsize\small\@ixpt{13}%
950 %<kiyou>
               \jsc@setfontsize\small{8.8888}{13.2418}%
951
     }%
     \abovedisplayskip 9\p0? \@plus3\p0? \@minus4\p0?
952
     \abovedisplayshortskip \z@ \@plus3\p@?
     \belowdisplayskip \abovedisplayskip
954
     \belowdisplayshortskip \belowdisplayskip
955
     \def\@listi{\leftmargin\leftmargini
956
                 \topsep \z@
957
958
                 \parsep \z@
                 \itemsep \parsep}}
959
```

\footnotesize \footnotesize も同様です。\topsep と \parsep は、元はそれぞれ  $3\pm 1$ 、 $2\pm 1$  ポイン

```
トでしたが、ここではゼロ(\z0)にしました。
          960 \newcommand{\footnotesize}{%
          961 \bxjs@if@narrowbaselines{%
          962 %<!kiyou>
                         \jsc@setfontsize\footnotesize\@viiipt{9.5}%
          963 %<kiyou>
                        \jsc@setfontsize\footnotesize{8.8888}{11}%
          964 }{%else
          965 %<!kiyou>
                        \jsc@setfontsize\footnotesize\@viiipt{11}%
          966 %<kiyou>
                        \jsc@setfontsize\footnotesize{8.8888}{13.2418}%
               ጉ%
          967
          968
               \abovedisplayskip 6\p0? \@plus2\p0? \@minus3\p0?
               \abovedisplayshortskip \z@ \@plus2\p@?
               \belowdisplayskip \abovedisplayskip
          970
          971
               \belowdisplayshortskip \belowdisplayskip
               \def\@listi{\leftmargin\leftmargini
          972
          973
                          \topsep \z@
                          \parsep \z@
          974
                          \itemsep \parsep}}
          975
\scriptsize それ以外のサイズは、本文に使うことがないので、単にフォントサイズと行送りだけ変更し
           ます。特に注意すべきは \large で,これは二段組のときに節見出しのフォントとして使い,
     \tiny
           行送りを \normalsize と同じにすることによって, 節見出しが複数行にわたっても段間で
    \large
           行が揃うようにします。
    \Large
             [2004-11-03] \HUGE を追加。
    \LARGE
          976 \newcommand{\scriptsize}{\jsc@setfontsize\scriptsize\@viipt\@viiipt}
     \huge
          977 \newcommand{\tiny}{\jsc@setfontsize\tiny\@vpt\@vipt}
     \Huge _{978} \if@twocolumn
     \HUGE 979 %<!kiyou> \newcommand{\large}{\jsc@setfontsize\large\@xiipt{\n@baseline}}
          980 %<kiyou> \newcommand{\large}{\jsc0setfontsize\large{11.111}{\n0baseline}}
          981 \else
          982 %<!kiyou> \newcommand{\large}{\jsc@setfontsize\large\@xiipt{17}}
          984 \fi
          985 %<!kiyou>\newcommand{\Large}{\jsc@setfontsize\Large\@xivpt{21}}
          986 %<br/>kiyou>\newcommand{\Large}{\jsc@setfontsize\Large{12.222}{21}}
          987 \newcommand{\LARGE}{\jsc@setfontsize\LARGE\@xviipt{25}}
          988 \mbox{\newcommand{\huge}{\jsc@setfontsize\huge\@xxpt{28}}}
          989 \newcommand{\Huge}{\jsc@setfontsize\Huge\@xxvpt{33}}
          990 \newcommand{\HUGE}{\jsc@setfontsize\HUGE{30}{40}}
             別行立て数式の中では \narrowbaselines にします。和文の行送りのままでは, 行列や
```

場合分けの行送り、連分数の高さなどが不釣合いに大きくなるためです。

本文中の数式の中では \narrowbaselines にしていません。本文中ではなるべく行送り が変わるような大きいものを使わず, 行列は amsmath の smallmatrix 環境を使うのがい いでしょう。

991 \everydisplay=\expandafter{\the\everydisplay \narrowbaselines}

しかし、このおかげで別行数式の上下のスペースが少し違ってしまいました。とりあえず

amsmath の equation 関係は okumacro のほうで逃げていますが、もっとうまい逃げ道が あればお教えください。

見出し用のフォントは \bfseries 固定ではなく, \headfont という命令で定めること にします。これは太ゴシックが使えるときは \sffamily \bfseries でいいと思いますが, 通常の中ゴシックでは単に \sffamily だけのほうがよさそうです。『plěTpX 2』美文書作 成入門』(1997年)では \sffamily \fontseries{sbc} として新ゴ M と合わせましたが, \fontseries{sbc} はちょっと幅が狭いように感じました。

- 992 % \newcommand{\headfont}{\bfseries}
- 993 \newcommand{\headfont}{\sffamily}
- 994 % \newcommand{\headfont}{\sffamily\fontseries{sbc}\selectfont}

# 5 レイアウト

#### ■二段組

\columnsep \columnsep は二段組のときの左右の段間の幅です。元は 10pt でしたが, 2zw にしました。 \columnseprule このスペースの中央に \columnseprule の幅の罫線が引かれます。

- 995 %<!kiyou>\setlength\columnsep{2\Cwd}
- 996 %<kiyou>\setlength\columnsep{28truebp}
- 997 \setlength\columnseprule{0\jsc@mpt}

#### ■段落

\lineskip 上下の行の文字が \lineskiplimit より接近したら, \lineskip より近づかないようにし \normallineskip ます。元は Opt でしたが 1pt に変更しました。normal... の付いた方は保存用です。

 $\verb|\lineskiplimit| 998 \verb|\setlength| lineskip{1 | jsc@mpt}|$ 

- \normallineskiplimit 999 \setlength\normallineskip{1\jsc@mpt}
  - 1000 \setlength\lineskiplimit{1\jsc@mpt}
  - $1001 \verb|\setlength| normallineskiplimit{1 | jsc@mpt}|$

\baselinestretch 実際の行送りが \baselineskip の何倍かを表すマクロです。たとえば

### \renewcommand{\baselinestretch}{2}

とすると、行送りが通常の2倍になります。ただし、これを設定すると、たとえ \baselineskip が伸縮するように設定しても、行送りの伸縮ができなくなります。行 送りの伸縮はしないのが一般的です。

1002 \renewcommand{\baselinestretch}{}

\parskip \parskip は段落間の追加スペースです。元は 0pt plus 1pt になっていましたが、ここでは \parindent ゼロにしました。\parindent は段落の先頭の字下げ幅です。

1003 \setlength\parskip{0\jsc@mpt}

1004 \if@slide

1005 \setlength\parindent{0\p0}

1006 \else

1007 \setlength\parindent{1\Cwd}
1008 \fi

\@lowpenalty \nopagebreak, \nolinebreak は引数に応じて次のペナルティ値のうちどれかを選ぶよう \@medpenalty になっています。ここはオリジナル通りです。

 $\ensuremath{\mbox{\sc Chighpenalty}}\ 1009 \ensuremath{\mbox{\sc Clowpenalty}}\ 51$ 

1010 \@medpenalty 151

1011 \@highpenalty 301

\interlinepenalty 段落中の改ページのペナルティです。デフォルトは 0 です。

1012 % \interlinepenalty 0

\brokenpenalty ページの最後の行がハイフンで終わる際のペナルティです。デフォルトは 100 です。

1013 % \brokenpenalty 100

# 5.1 ページレイアウト

BXJS ではページレイアウトの処理は geometry パッケージが担当している。

#### ■準備 湾

現状ではここで \mag を設定している。

\topskip も指定する。

1014 \ifjsc@mag

1015 \mag=\bxjs@param@mag

1016 \fi

1017 \setlength{\topskip}{10\p@?}

\bxjs@param@paper が長さ指定({W}{H})の場合、geometry の形式(papersize={W,H}) に変換する。

 $1018 \ensuremath{\mbox{\mbox{$\mbox{}\mbox{$\mbox$ 

1019 \def\bxjs@read@b{%

1020 \ifx\bxjs@tmpa\bgroup \expandafter\bxjs@read@c

1021 \else \expandafter\bxjs@read@d \fi}

 $1022 \end{cmultiple} 1022 \e$ 

1023 \def\bxjs@read@d#1\@nil{}

\bxjs@layout@paper geometry の用紙設定のオプション。

 $1025 \verb|\edef\bxjs@layout@paper{%}|$ 

1026 \ifjsc@mag truedimen,\fi

1027 \if@landscape landscape,\fi

1028 \bxjs@param@paper}

\bxjs@layout geometry のページレイアウトのオプション列。文書クラス毎に異なる。

```
1030 \def\bxjs@layout{%
                          headheight=\topskip,footskip=0.03367\paperheight,%
                          headsep=\footskip-\topskip,includeheadfoot,%
                     1032
                          hscale=0.76,hmarginratio=1:1,%
                     1033
                          vscale=0.83,vmarginratio=1:1,%
                     1034
                     1035 }
                     1036 %</article|report>
                     1037 %<*book>
                     1038 \ifbxjs@layout@buggyhmargin
                                                        %---
                     1039 % アレ
                     1040 \def\bxjs@layout{%
                         headheight=\topskip,headsep=6\jsc@mmm,nofoot,includeheadfoot,%
                     1042 hmargin=36\jsc@mmm,hmarginratio=1:1,%
                     1043
                          vscale=0.83, vmarginratio=1:1,%
                     1044 }
                                                        %---
                     1045 \else
                     1046 % 非アレ
                     1047 \def\bxjs@layout{%
                     1048 headheight=\topskip,headsep=6\jsc@mmm,nofoot,includeheadfoot,%
                     1049
                          hmargin=18\jsc@mmm,%
                          vscale=0.83,vmarginratio=1:1,%
                     1050
                     1051 }
                     1052 \fi
                                                        %---
                     1053 %</book>
                     1054 %<*slide>
                     1055 \def\bxjs@layout{%
                     noheadfoot,%
                     1057 hscale=0.9,hmarginratio=1:1,%
                          vscale=0.944,vmarginratio=1:1,%
                     1058
                     1059 }
                     1060 %</slide>
          \fullwidth 〔寸法レジスタ〕ヘッダ・フッタ領域の横幅。
                     1061 \newdimen\fullwidth
   \jsTextWidthLimit 〔実数値マクロ〕bxjsbook における、\textwidth の上限の全角単位での値。
                     1062 %<*book>
                     1063 \newcommand\jsTextWidthLimit{40}
                     1064 \ \texttt{ifx} \ \texttt{oundefined} \ \texttt{else}
                     1065
                          \let\c@bxjs@cnta\@tempcnta
                          \setcounter{bxjs@cnta}{\bxjs@textwidth@limit}
                     1067
                          \long\edef\jsTextWidthLimit{\the\@tempcnta}
                     1068 \fi
                     1069 %</book>
\bxjs@postproc@layout geometry の後処理。
                     1070 \def\bxjs@postproc@layout{%
                     1071 % ドライバ再設定
```

1029 %<\*article|report>

```
1073
                          \let\Gm@driver\bxjs@geometry@driver
                  1074
                  1075 % textwidth 調整
                        \ifbxjs@whole@zw@lines
                  1076
                          \@tempdimb=\textwidth
                  1077
                          \if@twocolumn \@tempdima=2\Cwd \else \@tempdima=1\Cwd \fi
                  1078
                  1079
                          \divide\textwidth\@tempdima \multiply\textwidth\@tempdima
                          \advance\@tempdimb-\textwidth
                  1080
                          \advance\oddsidemargin 0.5\@tempdimb
                  1081
                          \advance\evensidemargin 0.5\@tempdimb
                  1082
                  1083
                        \fi
                        \fullwidth=\textwidth
                  1085 %<*book>
                        \ifdim\textwidth>\jsTextWidthLimit\Cwd
                  1086
                  1087
                          \textwidth=\jsTextWidthLimit\Cwd
                          \addtolength\evensidemargin{\fullwidth-\textwidth}
                  1088
                        \fi
                  1089
                  1090 %</book>
                  1091 % textheight 調整
                  1092
                        \@tempdimb=\textheight
                        \advance\textheight-\topskip
                  1093
                        \divide\textheight\baselineskip \multiply\textheight\baselineskip
                  1094
                  1095
                        \advance\textheight\topskip
                        \advance\@tempdimb-\textheight
                  1096
                        \advance\topmargin0.5\@tempdimb
                  1098 % headheight 調整
                        \@tempdima=\topskip
                  1099
                        \advance\headheight\@tempdima
                        \advance\topmargin-\@tempdima
                  1101
                  1102 % marginpar 設定
                  1103
                        \setlength\marginparsep{\columnsep}
                        \setlength\marginparpush{\baselineskip}
                  1104
                  1105
                        \setlength\marginparwidth{\paperwidth-\oddsidemargin-1truein%
                            \verb|-\textwidth-10\jsc@mmm-\marginparsep||
                  1106
                        \ifbxjs@whole@zw@lines
                  1107
                          \divide\marginparwidth\Cwd \multiply\marginparwidth\Cwd
                  1108
                        \fi
                  1109
                  1110 % 連動する変数
                        \maxdepth=.5\topskip
                  1111
                  1112
                        \stockwidth=\paperwidth
                  1113
                        \stockheight=\paperheight
                  1114 }
\jsGeometryOptions geometry パッケージに渡すオプションのリスト。
                    ※ geometry=user 指定時にユーザが利用することを想定している。
                  1115 \edef\jsGeometryOptions{%
                       \bxjs@layout@paper,\bxjs@layout}
```

\ifx\bxjs@geometry@driver\relax\else

1072

## ■geometry パッケージ読込 彎

geoemtry オプションの値に応じて分岐する。

まずは geometry=class の場合。

1117 \ifx\bxjs@geometry\bxjs@geometry@class

geometry は \topskip が標準の行高(\ht\strutbox) より小さくならないようにする 自動調整を行うが、これをどうするかは未検討。今のところ、単純に回避(無効化)して いる。

- 1118 \@onlypreamble\bxjs@revert
- 1119 \let\bxjs@revert\@empty
- 1120 \edef\bxjs@tmpa{\the\ht\strutbox}
- 1121 \ht\strutbox=10\p@?
- 1122 \g@addto@macro\bxjs@revert{\ht\strutbox=\bxjs@tmpa\relax}

geometry のドライバオプション指定。nopapersize 指定時は、special 命令出力を抑止するためにドライバを none にする。そうでない場合は、クラスで指定したドライバオプションが引き継がれるので何もしなくてよいが、例外として、ドライバが dvipdfmx の時は、現状の geometry は dvipdfm を指定する必要がある。

- 1123 \ifbxjs@papersize
- 1124 \ifx\bxjs@driver@given\bxjs@driver@@dvipdfmx
- 1125 \PassOptionsToPackage{dvipdfm}{geometry}
- 1126 \else\ifx\bxjs@driver@given\bxjs@driver@@dvimode
- 1127 \PassOptionsToPackage{dvipdfm}{geometry}
- 1128 \fi\fi
- 1129 \let\bxPapersizeSpecialDone=t
- 1130 **\els**e
- 1131 \PassOptionsToPackage{driver=none}{geometry}
- 1132 \fi

ここで geometry を読み込む。

- ※ geometry の begin-document フックにおいて、LuaT<sub>F</sub>X の旧版互換を有効にする。
- 1133 \edef\bxjs@nxt{%
- 1134 \noexpand\RequirePackage[\bxjs@layout@paper,\bxjs@layout]{geometry}}
- 1135 \AtBeginDocument{\bxjs@pre@geometry@hook}
- 1136 \AtBeginDocument{\ImposeOldLuaTeXBehavior}
- 1137 \bxjs@nxt \bxjs@revert
- 1138 \AtBeginDocument{\RevokeOldLuaTeXBehavior}

\bxjs@geometry@driver geometry が用いるドライバの名前。

※この値は一度決めた後は変わってほしくないので、\bxjs@postproc@layout において書き戻す処理を入れている。

- 1139 \let\bxjs@geometry@driver\Gm@driver
- $1140 \verb|\bxjs@postproc@layout|$

\bxjs@pre@geometry@hook 1.2 版より、geometry の 4.x 版の使用は非推奨とする。

```
※将来サポートを廃止する予定。
```

```
1141 \@onlypreamble\bxjs@pre@geometry@hook
1142 \def\bxjs@pre@geometry@hook{%
1143
      \@ifpackageloaded{geometry}{%
        \@ifpackagelater{geometry}{2010/02/12}{}{%else
1144
          \PackageWarningNoLine\bxjs@clsname
1145
           {The 'geometry' package installed\MessageBreak
1146
1147
            is too old (< v5.0)}%
          \if x\jsEngine \ifnum\mag=\@m\else
1148
1149
            \def\bxjs@Gm@driver{pdftex}
1150
            \ifx\pdfhorigin\@undefined \newdimen\pdfhorigin \fi
            \ifx\pdfvorigin\@undefined \newdimen\pdfvorigin \fi
1151
1152
          \fi\fi
        }%
1153
1154
        \ifjsWithpTeXng
          \ifx\Gm@driver\@empty
            \def\Gm@driver{pdftex}%
1156
1157
          \fi
        \fi
1158
      }{}}
1159
```

\setpagelayout ページレイアウト設定のためのユーザ命令。

- \setpagelayout{\langle text\rangle}: 現在の geometry の設定の一部を修正する。
- \setpagelayout\*{\langle text\rangle}: 用紙以外の設定をリセットして、改めて設定を行う。

どちらも設定の後で後処理 \bxjs@postproc@layout を実行する。

```
1160 \def\setpagelayout{\@ifstar
     {\bxjs@reset@layout}{\bxjs@modify@layout}}
1162 \def\bxjs@modify@layout#1{%
     \edef\bxjs@nxt{\noexpand\geometry{#1,truedimen}}%
     \bxjs@nxt\bxjs@postproc@layout}
1164
1165 \def\bxjs@reset@layout#1{%
     \edef\bxjs@nxt{\noexpand\geometry{reset,\bxjs@layout@paper,#1,truedimen}}%
1167
     \bxjs@nxt\bxjs@postproc@layout}
   geometry=classの場合の処理はここで終わり。
   次に、geometry=user の場合の処理。
```

1168 \else\ifx\bxjs@geometry\bxjs@geometry@user

この場合はユーザが何らかの方法(例えば geometry を読み込む)でページレイアウトを 設定する必要がある。もし、本体開始時に \textwidth がカーネル設定の値(.5\maxdimen) のままになっている場合はエラーを出す。

※\jsUseMinimalPageLayout は動作テスト用。

- 1169 \AtBeginDocument{\bxjs@check@page@layout}
- 1170 \Conlypreamble\bxjs@check@page@layout
- 1171 \def\bxjs@check@page@layout{%
- 1172 \ifdim\textwidth=.5\maxdimen

- 1173 \ClassError\bxjs@clsname 1174 {Page layout is not properly set}%  ${\ensuremath{\en$ 1175 \fi}
- 1176
- 1177 \def\jsUseMinimalPageLayout{%
- \setlength{\textwidth}{6.5in}%
- \setlength{\textheight}{8in}}

\setpagelayout はとりあえず無効にしておく。

- 1180 \let\bxjs@geometry@driver\relax
- 1181 \def\setpagelayout{\@ifstar
- {\bxjs@pagelayout@a}{\bxjs@pagelayout@a}}
- 1183 \def\bxjs@pagelayout@a#1{%
- \ClassError\bxjs@clsname
- {Command '\string\setpagelayout' is not supported,\MessageBreak 1185
- because 'geometry' value is not 'class'}\@eha}

geometry=user の場合の処理はここで終わり。

#### 1187 \fi\fi

ここからのコードは以下の点を除いて JS クラスのものを踏襲する。

- zw の代わりに \jsZw を用いる。
- article/report/book/slide の切り分けの処理が異なる。

※ diff が崩壊するのを避けるためオリジナルのコードを無効化した状態で挿入しておく。

<\*jsclasses>

#### ■縦方向のスペース

\headheight \topskip は本文領域上端と本文1行目のベースラインとの距離です。あまりぎりぎりの値 \topskip にすると、本文中に ∫ のような高い文字が入ったときに 1 行目のベースラインが他のペー ジより下がってしまいます。ここでは本文の公称フォントサイズ(10pt)にします。

> [2003-06-26] \headheight はヘッダの高さで、元は12pt でしたが、新ドキュメントクラ スでは \topskip と等しくしていました。ところが、fancyhdr パッケージで \headheight が小さいとおかしいことになるようですので,2倍に増やしました。代わりに,版面の上下 揃えの計算では \headheight ではなく \topskip を使うことにしました。

> [2016-08-17] 圏点やルビが一行目に来た場合に下がるのを防ぐため、\topskip を 10pt から 1.38zw に増やしました。\headheight は従来と同じ 20pt のままとします。

- 1188 \setlength\topskip $\{1.38zw\}\%$  from 10\jsc@mpt (2016-08-17)
- $1189 \footnote{off}$
- 1190 \setlength\headheight{0\jsc@mpt}
- \setlength\headheight{20\jsc@mpt}\% from 2\topskip (2016-08-17); from \topskip (2003-06-26)

#### 1193 \fi

\footskip \footskip は本文領域下端とフッタ下端との距離です。標準クラスファイルでは,book で 0.35in(約8.89mm),book 以外で30pt(約10.54mm)となっていましたが,ここではA4 判のときちょうど1cm となるように,\paperheight の0.03367倍(最小 \baselineskip)としました。書籍については,フッタは使わないことにして,ゼロにしました。

```
1194 %<*article|kiyou>
1195 \if@slide
1196 \setlength\footskip{0pt}
1197 \else
      \setlength\footskip{0.03367\paperheight}
      \ifdim\footskip<\baselineskip
1199
1200
        \setlength\footskip{\baselineskip}
1201
     \fi
1202 \fi
1203 %</article|kiyou>
1204 %<jspf>\setlength\footskip{9\jsc@mmm}
1205 %<*book>
1206 \if@report
     \setlength\footskip{0.03367\paperheight}
1207
      \ifdim\footskip<\baselineskip
        \setlength\footskip{\baselineskip}
1209
1210
1211 \else
      \setlength\footskip{0pt}
1212
1213 \fi
1214 %</book>
1215 %<*report>
1216 \setlength\footskip{0.03367\paperheight}
1217 \leftarrow \text{footskip} \rightarrow \text{baselineskip}
1218 \setlength\footskip{\baselineskip}
1219 \fi
1220 %</report>
```

\headsep \headsep はヘッダ下端と本文領域上端との距離です。元は book で 18pt (約 6.33mm), それ以外で 25pt (約 8.79mm) になっていました。ここでは article は \footskip - \topskip としました。

[2016-10-08] article の slide のとき、および book の非 report と kiyou のときに \headsep を減らしそこねていたのを修正しました(2016-08-17 での修正漏れ)。

```
1221 %<*article>
1222 \if@slide
1223 \setlength\headsep{0\jsc@mpt}
1224 \addtolength\headsep{-\topskip}%% added (2016-10-08)
1225 \addtolength\headsep{10\jsc@mpt}%% added (2016-10-08)
1226 \else
1227 \setlength\headsep{\footskip}
1228 \addtolength\headsep{-\topskip}
```

```
1229 \fi
1230 %</article>
1231 %<*book>
1232 \if@report
     \setlength\headsep{\footskip}
1233
      \addtolength\headsep{-\topskip}
1234
1235 \else
1236
     \setlength\headsep{6\jsc@mmm}
      \addtolength\headsep{-\topskip}\% added (2016-10-08)
      \addtolength\headsep{10\jsc@mpt}\% added (2016-10-08)
1239 \fi
1240 %</book>
1241 %<*report>
1242 \setlength\headsep{\footskip}
1243 \addtolength\headsep{-\topskip}
1244 %</report>
1245 %<*jspf>
1246 \setlength\headsep{9\jsc@mmm}
1247 \addtolength\headsep{-\topskip}
1248 %</jspf>
1249 %<*kiyou>
1250 \setlength\headheight{0\jsc@mpt}
1251 \setlength\headsep{0\jsc@mpt}
1252 \addtolength\headsep{-\topskip}\% added (2016-10-08)
1253 \addtolength\headsep{10\jsc@mpt}\%\ added (2016-10-08)
1254 %</kiyou>
```

\maxdepth \maxdepth は本文最下行の最大の深さで、plain T<sub>E</sub>X や I\( \text{PT}\_E \text{X} \) 2.09 では 4pt に固定でした。 I\( \text{PT}\_E \text{X} \) 2e では \maxdepth + \topskip を本文フォントサイズの 1.5 倍にしたいのですが、\topskip は本文フォントサイズ(ここでは 10pt)に等しいので、結局 \maxdepth は\topskip の半分の値(具体的には 5pt) にします。

1255 \setlength\maxdepth{.5\topskip}

#### ■本文の幅と高さ

\fullwidth 本文の幅が全角 40 文字を超えると読みにくくなります。そこで、書籍の場合に限って、紙の幅が広いときは外側のマージンを余分にとって全角 40 文字に押え、ヘッダやフッタは本文領域より広く取ることにします。このときヘッダやフッタの幅を表す \fullwidth という長さを定義します。

## $1256 \verb|\newdimen\fullwidth|$

この \fullwidth は article では紙幅 \paperwidth の 0.76 倍を超えない全角幅の整数倍 (二段組では全角幅の偶数倍) にします。 0.76 倍という数値は A4 縦置きの場合に紙幅から 約 2 インチを引いた値になるように選びました。 book では紙幅から 36 ミリを引いた値にしました。

\textwidth 書籍以外では本文領域の幅 \textwidth は \fullwidth と等しくします。article では

```
とします。
1257 %<*article>
1258 \footnote{off}
1259
      \setlength\fullwidth{0.9\paperwidth}
1260 \else
      \setlength\fullwidth{0.76\paperwidth}
1261
1263 \if@twocolumn \@tempdima=2zw \else \@tempdima=1zw \fi
1264 \divide\fullwidth\@tempdima \multiply\fullwidth\@tempdima
1265 \stlength\textwidth{\fullwidth}
1266 %</article>
1267 %<*book>
1268 \if@report
1269 \setlength\fullwidth{0.76\paperwidth}
1270 \else
      \setlength\fullwidth{\paperwidth}
      \addtolength\fullwidth{-36\jsc@mmm}
1272
1273 \fi
1274 \if@twocolumn \@tempdima=2zw \else \@tempdima=1zw \fi
1275 \divide\fullwidth\@tempdima \multiply\fullwidth\@tempdima
1276 \setlength\textwidth{\fullwidth}
1277 \if@report \else
     \if@twocolumn \else
        \ifdim \fullwidth>40zw
1279
1280
          \setlength\textwidth{40zw}
1281
        \fi
1282
     \fi
1283 \fi
1284 %</book>
1285 %<*report>
1286 \setlength\fullwidth{0.76\paperwidth}
1287 \if@twocolumn \@tempdima=2zw \else \@tempdima=1zw \fi
1288 \divide\fullwidth\@tempdima \multiply\fullwidth\@tempdima
1289 \setlength\textwidth{\fullwidth}
1290 %</report>
1291 %<*jspf>
1292 \setlength\fullwidth{50zw}
1293 \addtolength\fullwidth{8\jsc@mmm}
1294 \setlength\textwidth{\fullwidth}
1295 %</jspf>
1296 %<*kiyou>
1297 \stlength\fullwidth{48zw}
1298 \addtolength\fullwidth{\columnsep}
1299 \setlength\textwidth{\fullwidth}
1300 %</kiyou>
```

A4 縦置きで 49 文字となります。某学会誌スタイルでは 50zw (25 文字  $\times 2$  段) +段間 8mm

\textheight 紙の高さ \paperheight は、1 インチと \topmargin と \headheight と \headsep と

\textheight と \footskip とページ下部の余白を加えたものです。

本文部分の高さ \textheight は、紙の高さ \paperheight の 0.83 倍から、ヘッダの高さ、ヘッダと本文の距離、本文とフッタ下端の距離、\topskip を引き、それを \baselineskip の倍数に切り捨て、最後に \topskip を加えます。念のため 0.1 ポイント余分に加えておきます。0.83 倍という数値は、A4 縦置きの場合に紙の高さから上下マージン各約 1 インチを引いた値になるように選びました。

某学会誌スタイルでは44行にします。

[2003-06-26] \headheight を \topskip に直しました。以前はこの二つは値が同じであったので、変化はないはずです。

[2016-08-26] \topskip を 10pt から 1.38zw に増やしましたので,その分 \textheight を増やします(2016-08-17 での修正漏れ)。

[2016-10-08] article の slide のときに \headheight はゼロなので、さらに修正しました  $(2016-08-17\$ での修正漏れ)。

- 1301 %<\*article|book|report>
- 1302 \if@slide
- 1303 \setlength{\textheight}{0.95\paperheight}
- 1304 \else
- 1305 \setlength{\textheight}{0.83\paperheight}
- 1306 \fi
- 1307 \addtolength{\textheight}{-10\jsc@mpt}\% from -\topskip (2016-10-08); from -\headheight (2003-06-26)
- $1308 \verb|\addtolength{\textheight}{-\headsep}|$
- $1309 \verb|\addtolength{\textheight}{-\footskip}|$
- $1310 \addtolength{\text{textheight}}{-\text{topskip}}$
- $1311 \verb|\divide|\textheight|\baselineskip|$
- 1312 \multiply\textheight\baselineskip
- 1313 %</article|book|report>
- 1314 %<jspf>\setlength{\textheight}{51\baselineskip}
- 1315 %<kiyou>\setlength{\textheight}{47}\baselineskip}
- $1316 \addtolength{\text{textheight}}{\topskip}$
- 1317 \addtolength{\textheight}{0.1\jsc@mpt}
- 1318 %<jspf>\setlength{\mathindent}{10\jsc@mmm}

\flushbottom [2016-07-18] \textheight に念のため 0.1 ポイント余裕を持たせているのと同様に、 \flushbottom にも余裕を持たせます。元の  $\text{LMT}_{E}\!X\,2_{\varepsilon}$  での完全な \flushbottom の定義は

\def\flushbottom{%

\let\@textbottom\relax \let\@texttop\relax}

ですが, 次のようにします。

- 1319  $\left\{ \int def \right\}$
- $1320 $$ \end{\text{\cong}} \z@ \end{\text{\cong}} \$
- 1321 \let\@texttop\relax}

\marginparsep \marginparsep は欄外の書き込みと本文との間隔です。\marginparpush は欄外の書き込 \marginparpush みどうしの最小の間隔です。

1322 \setlength\marginparsep{\columnsep}

1323 \setlength\marginparpush{\baselineskip}

\oddsidemargin それぞれ奇数ページ,偶数ページの左マージンから 1 インチ引いた値です。片面印刷では \evensidemargin が使われます。 $T_EX$  は上・左マージンに 1truein を挿入しますが,トンボ関係のオプションが指定されると  $pIMT_EX$   $2_{\varepsilon}$  (plcore.ltx) はトンボの内側に 1in のスペース(1truein ではなく)を挿入するので,場合分けしています。

1324 \setlength{\oddsidemargin}{\paperwidth}

1325 \addtolength{\oddsidemargin}{-\fullwidth}

1326 \setlength{\oddsidemargin}{.5\oddsidemargin}

1327 \iftombow

1328  $\addtolength{\oddsidemargin}{-1in}$ 

1329 \else

1330 \addtolength{\oddsidemargin}{-\inv@mag in}

1331 \fi

1332 \setlength{\evensidemargin}{\oddsidemargin}

1333 \if@mparswitch

1334 \addtolength{\evensidemargin}{\fullwidth}

1335 \addtolength{\evensidemargin}{-\textwidth}

1336 \fi

\marginparwidth \marginparwidth は欄外の書き込みの横幅です。外側マージンの幅(\evensidemargin + 1 インチ)から 1 センチを引き、さらに \marginparsep(欄外の書き込みと本文のアキ)を引いた値にしました。最後に 1 zw の整数倍に切り捨てます。

1337 \setlength\marginparwidth{\paperwidth}

1338 \addtolength\marginparwidth{-\oddsidemargin}

1339 \addtolength\marginparwidth{-\inv@mag in}

 $1340 \addtolength\marginparwidth{-\textwidth}$ 

 $1341 \addtolength\marginparwidth{-10\jsc@mmm}$ 

 $1342 \add to length \mbox{margin parwidth $\{-\mbox{margin parsep}\}$}$ 

 $1343 \ensuremath{\mbox{\mbox{\tt 0}tempdima=1zw}}$ 

 $1344 \verb|\divide\marginparwidth\@tempdima|$ 

 $1345 \verb|\multiply\marginparwidth\@tempdima|$ 

\topmargin 上マージン(紙の上端とヘッダ上端の距離)から1インチ引いた値です。

[2003-06-26] \headheight を \topskip に直しました。以前はこの二つは値が同じであったので、変化はないはずです。

[2016-08-17] \topskip を 10pt から 1.38zw に直しましたが,\topmargin は従来の値から変わらないように調節しました。…のつもりでしたが,\textheight を増やし忘れていたので変わってしまっていました(2016-08-26 修正済み)。

 $1346 \verb|\setlength\topmargin{\paperheight}|$ 

1347 \addtolength\topmargin{-\textheight}

1348 \if@slide

1349 \addtolength\topmargin{-\headheight}

1350 **\else** 

- 1352 \fi
- $1353 \addtolength \topmargin {-\headsep}$
- $1354 \addtolength topmargin{-\footskip}$
- 1355 \setlength\topmargin{0.5\topmargin}
- 1356 %<kiyou>\setlength\topmargin{81truebp}
- 1357 \iftombow
- 1358 \addtolength\topmargin{-1in}
- 1359 **\else**
- 1360 \addtolength\topmargin{-\inv@mag in}
- 1361 \fi

</jsclasses>

#### ■脚注

ここは元々は

{\footnotesize\global\setlength\footnotesep{\baselineskip}}

としていたが、そもそも \global\setlength~ は calc 使用時には有意義な動作をしない。 \global\footnotesep だと所望の値が得られるが、同時に \footnotesize のフォントを 固定させてしまうという副作用をもつ。なので、実際の設定値を直接使うことにする。

1362  $footnotesep=11\p@? footnotesep=0.7\footnotesep$ 

\footins \skip\footins は本文の最終行と最初の脚注との間の距離です。標準の 10 ポイントクラス では 9 plus 4 minus 2 ポイントになっていますが,和文の行送りを考えてもうちょっと大きくします。

1363 \setlength{\skip\footins}{16\p0? \@plus 5\p0? \@minus 2\p0?}

■フロート関連 フロート(図,表)関連のパラメータは  $IAT_EX 2_\varepsilon$  本体で定義されていますが,ここで設定変更します。本文ページ(本文とフロートが共存するページ)とフロートだけのページで設定が異なります。ちなみに,カウンタは内部では \c@ を名前に冠したマクロになっています。

\c@topnumber topnumber カウンタは本文ページ上部のフロートの最大数です。

[2003-08-23] ちょっと増やしました。

1364 \setcounter{topnumber}{9}

\topfraction 本文ページ上部のフロートが占有できる最大の割合です。フロートが入りやすいように、元 の値 0.7 を 0.8 [2003-08-23: 0.85] に変えてあります。

1365 \renewcommand{\topfraction}{.85}

\c@bottomnumber bottomnumber カウンタは本文ページ下部のフロートの最大数です。 [2003-08-23] ちょっと増やしました。

1366 \setcounter{bottomnumber}{9}

\bottomfraction 本文ページ下部のフロートが占有できる最大の割合です。元は 0.3 でした。

1367 \renewcommand{\bottomfraction}{.8}

\c@totalnumber totalnumber カウンタは本文ページに入りうるフロートの最大数です。  $[2003\text{-}08\text{-}23] \ \,$ ちょっと増やしました。

1368 \setcounter{totalnumber}{20}

\textfraction 本文ページに最低限入らなければならない本文の割合です。フロートが入りやすいように元の 0.2~e~0.1 に変えました。

1369 \renewcommand{\textfraction}{.1}

\floatpagefraction フロートだけのページでのフロートの最小割合です。これも 0.5 を 0.8 に変えてあります。  $1370 \renewcommand{floatpagefraction}{.8}$ 

\c@dbltopnumber 二段組のとき本文ページ上部に出力できる段抜きフロートの最大数です。 [2003-08-23] ちょっと増やしました。

1371 \setcounter{dbltopnumber}{9}

\dbltopfraction 二段組のとき本文ページ上部に出力できる段抜きフロートが占めうる最大の割合です。0.7 を 0.8 に変えてあります。

1372 \renewcommand{\dbltopfraction}{.8}

\dblfloatpagefraction 二段組のときフロートだけのページに入るべき段抜きフロートの最小割合です。0.5 を 0.8 に変えてあります。

1373 \renewcommand{\dblfloatpagefraction} $\{.8\}$ 

\floatsep \floatsep はページ上部・下部のフロート間の距離です。\textfloatsep はページ上部・\textfloatsep 下部のフロートと本文との距離です。\intextsep は本文の途中に出力されるフロートと本\intextsep 文との距離です。

1374 \setlength\floatsep {12\p0? \@plus 2\p0? \@minus 2\p0?} 1375 \setlength\textfloatsep{20\p0? \@plus 2\p0? \@minus 4\p0?} 1376 \setlength\intextsep {12\p0? \@plus 2\p0? \@minus 2\p0?}

\dblfloatsep 二段組のときの段抜きのフロートについての値です。

 $\label{thm:continuous} $$ \dbltextfloatsep 1377 \ellength dblfloatsep {20p0? \ellength dbltextfloatsep{20p0? \ellength 2p0? \ellength 4p0?} } $$$ 

\@fptop フロートだけのページに入るグルーです。 \@fptop はページ上部, \@fpbot はページ下部, \@fpsep \@fpsep はフロート間に入ります。

 $\label{lem:condition} $$ \end{array} \end{array} $$ \end{array} $$\end{array} $$ \end{array} $$\end{array} $$\end{array} $$\$ 

 $1380 \end{fpsep} \end{figure} $$1380 \end{figure} $$1380 \end{figure} $$2fil}$ 

1381 \setlength\@fpbot{0\p@? \@plus 1fil}

```
\@dblfptop 段抜きフロートについての値です。
\@dblfpsep 1382 \setlength\@dblfptop{0\p@? \@plus 1fil}
\@dblfpbot 1383 \setlength\@dblfpsep{8\p@? \@plus 2fil}
1384 \setlength\@dblfpbot{0\p@? \@plus 1fil}
```

# 6 改ページ(日本語 TFX 開発コミュニティ版のみ)

\pltx@cleartorightpage
\pltx@cleartoleftpage
\pltx@cleartooddpage
\pltx@cleartoevenpage

[2017-02-24] コミュニティ版 pIFTEX の標準クラス 2017/02/15 に合わせて,同じ命令を追加しました。

- 1. \pltx@cleartorightpage: 右ページになるまでページを繰る命令
- 2. \pltx@cleartoleftpage: 左ページになるまでページを繰る命令
- 3. \pltx@cleartooddpage: 奇数ページになるまでページを繰る命令
- 4. \pltx@cleartoevenpage: 偶数ページになるまでページを繰る命令

#### となっています。

```
1385\ \%\ def\ pltx@clear to right page {\ clear page if @two side}
1386 % \ifodd\c@page
1387 %
         \iftdir
1388 %
           \hbox{}\thispagestyle{empty}\newpage
1389 %
           \if@twocolumn\hbox{}\newpage\fi
         \fi
1390 %
1391 % \else
1392 %
         \ifydir
1393 %
           \hbox{}\thispagestyle{empty}\newpage
1394 %
           \if@twocolumn\hbox{}\newpage\fi
1395 %
1396 % \fi\fi}
1397 %\def\pltx@cleartoleftpage{\clearpage\if@twoside
1398 % \ifodd\c@page
1399 %
         \ifydir
1400 %
           \hbox{}\thispagestyle{empty}\newpage
           \if@twocolumn\hbox{}\newpage\fi
1401 %
1402 %
         \fi
1403 % \else
1404 %
           \hbox{}\thispagestyle{empty}\newpage
1405 %
1406 %
           \if@twocolumn\hbox{}\newpage\fi
1407 %
1408 % \fi\fi}
1409 \def\pltx@cleartooddpage{\clearpage\if@twoside
     \ifodd\c@page\else
1411
        \hbox{}\thispagestyle{empty}\newpage
        \if@twocolumn\hbox{}\newpage\fi
1412
      \fi\fi}
1414 \def\pltx@cleartoevenpage{\clearpage\if@twoside
      \ifodd\c@page
```

1416 \hbox{}\thispagestyle{empty}\newpage

1417 \if@twocolumn\hbox{}\newpage\fi

1418 \fi\fi}

BXJS クラスでは \iftdir 等が使えないので、横組を仮定した定義を用いる。

1419 \let\pltx@cleartorightpage\pltx@cleartooddpage

1420 \let\pltx@cleartoleftpage\pltx@cleartoevenpage

\cleardoublepage [2017-02-24] コミュニティ版 pIATEX の標準クラス 2017/02/15 に合わせて, report と book クラスの場合に\cleardoublepage を再定義します。

1421 %<\*book|report>

1422 \if@openleft

1423 \let\cleardoublepage\pltx@cleartoleftpage

1424 \else\if@openright

1426 \fi\fi

1427 %</book|report>

# 7 ページスタイル

ページスタイルとして, $ext{LMTEX}\ 2_{\varepsilon}$ (欧文版)の標準クラスでは empty,plain,headings,myheadings があります。このうち empty,plain スタイルは  $ext{LMTEX}\ 2_{\varepsilon}$  本体で定義されています。

アスキーのクラスファイルでは headnombre, footnombre, bothstyle, jpl@in が追加 されていますが, ここでは欧文標準のものだけにしました。

ページスタイルは \ps@... の形のマクロで定義されています。

| Cevenhead | Coddhead, | Coddfoot, | Cevenhead, | Cevenfoot は偶数・奇数ページの柱(ヘッダ,

\@oddhead フッタ)を出力する命令です。これらは \fullwidth 幅の \hbox の中で呼び出されます。

\@evenfoot \ps@... の中で定義しておきます。

| Coddfoot | 柱の内容は、 \chapter が呼び出す \chaptermark{何々}、 \section が呼び出す \sectionmark{何々} で設定します。柱を扱う命令には次のものがあります。

\markboth{左}{右} 両方の柱を設定します。

\markright{右}右の柱を設定します。\leftmark左の柱を出力します。

\rightmark 右の柱を出力します。

柱を設定する命令は、右の柱が左の柱の下位にある場合は十分まともに動作します。たとえば左マークを \chapter、右マークを \section で変更する場合がこれにあたります。しかし、同一ページに複数の \markboth があると、おかしな結果になることがあります。

\tableofcontents のような命令で使われる \@mkboth は, \ps@... コマンド中で \markboth か \@gobbletwo (何もしない) に \let されます。

\ps@empty empty ページスタイルの定義です。 $\LaTeX$  本体で定義されているものをコメントアウトした形で載せておきます。

- $1428 \% \left( \frac{1}{2} \right)$
- 1429 % \let\@mkboth\@gobbletwo
- 1430 % \let\@oddhead\@empty
- 1431 % \let\@oddfoot\@empty
- 1432 % \let\@evenhead\@empty
- 1433 % \let\@evenfoot\@empty}

\ps@plainhead plainhead はシンプルなヘッダだけのページスタイルです。

\ps@plainfoot plainfoot はシンプルなフッタだけのページスタイルです。

\ps@plain plain は book では plainhead, それ以外では plainfoot になります。

- 1434 \def\ps@plainfoot{%
- 1435 \let\@mkboth\@gobbletwo
- 1436 \let\@oddhead\@empty
- 1437 \def\@oddfoot{\normalfont\hfil\thepage\hfil}%
- 1438 \let\@evenhead\@empty
- 1439 \let\@evenfoot\@oddfoot}
- $1440 \ensuremath{\mbox{def\ps@plainhead}}\%$
- 1441 \let\@mkboth\@gobbletwo
- 1442 \let\@oddfoot\@empty
- 1443 \let\@evenfoot\@empty
- 1444 \def\@evenhead{%
- 1445 \if@mparswitch \hss \fi
- 1446 \hbox to \fullwidth{\textbf{\thepage}\hfil}%
- 1447 \if@mparswitch\else \hss \fi}%
- 1448 \def\@oddhead{%
- 1449 \hbox to \fullwidth{\hfil\textbf{\thepage}}\hss}}
- $1450 \ \cdots \cdots$
- 1451 %<!book>\let\ps@plain\ps@plainfoot

\ps@headings headings スタイルはヘッダに見出しとページ番号を出力します。ここではヘッダにアン ダーラインを引くようにしてみました。

まず article の場合です。

- 1452 %<\*article|slide>
- $1453 \setminus if@twoside$
- 1454 \def\ps@headings{%
- 1455 \let\@oddfoot\@empty
- 1456 \let\@evenfoot\@empty
- 1457 \def\@evenhead{\if@mparswitch \hss \fi
- $\label{lem:line} $$1458 \qquad \end{constraines} $$ underline{\hbox to \fullwidth{\texttextbf{\tilde}{\tilde}}} $$$
- 1459 \if@mparswitch\else \hss \fi}%
- 1460 \def\@oddhead{%
- 1461 \underline{%
- 1462 \hbox to \fullwidth{{\rightmark}\hfil\textbf{\thepage}}}\hss}%

```
1463
                                   \let\@mkboth\markboth
1464
                                   \def\sectionmark##1{\markboth{%
1465
                                                \ \colored{line} \c
                                                ##1}{}}%
1466
1467
                                   \def\subsectionmark##1{\markright{%
                                                \ifnum \c@secnumdepth >\@ne \thesubsection \hskip1\jsZw\fi
1468
                                                ##1}}%
1469
1470
                          }
1471 \else % if not twoside
                          \def\ps@headings{%
1473
                                   \let\@oddfoot\@empty
                                   \def\@oddhead{%
1474
                                            \underline{%
                                                     \hbox to \fullwidth{{\rightmark}\hfil\textbf{\thepage}}}\hss}%
1476
                                   \let\@mkboth\markboth
1477
1478
                                   \def\sectionmark##1{\markright{%
                                                     1479
                                                     ##1}}}
1480
1481 \fi
1482 %</article|slide>
```

次は book および report の場合です。[2011-05-10] しっぽ愛好家さん [qa:6370] のパッチを取り込ませていただきました(北見さん [qa:55896] のご指摘ありがとうございます)。

\autoxspacing は未定義の可能性があるため、「\autoxspacing が定義済なら実行する」マクロ \bxjs@maybe@autoxspacing を代わりに用いる。

```
1483 %<*book|report>
1484 \def\bxjs@maybe@autoxspacing{%
      \ifx\autoxspacing\@undefined\else \autoxspacing \fi}
1486 \newif\if@omit@number
1487 \def\ps@headings{%
      \let\@oddfoot\@empty
1488
      \let\@evenfoot\@empty
      \def\@evenhead{%
1490
1491
        \if@mparswitch \hss \fi
        \underline{\hbox to \fullwidth{\bxjs@maybe@autoxspacing
1492
            \textbf{\thepage}\hfil\leftmark}}%
1493
        \if@mparswitch\else \hss \fi}%
1494
      \def\@oddhead{\underline{\hbox to \fullwidth{\bxjs@maybe@autoxspacing}
1495
1496
            {\if@twoside\rightmark\else\leftmark\fi}\hfil\textbf{\thepage}}}\hss}%
1497
      \let\@mkboth\markboth
      \def\chaptermark##1{\markboth{%
1498
        \ifnum \c@secnumdepth >\m@ne
1500
          \if@mainmatter
            \if@omit@number\else
1501
1502
              \@chapapp\thechapter\@chappos\hskip1\jsZw
            \fi
1503
```

```
\fi
1504
1505
                                              \fi
1506
                                             ##1}{}}%
                                  \def\sectionmark##1{\markright{%
1507
                                             \ \colored{line} \c
                                             ##1}}}%
1509
1510 %</book|report>
                     最後は学会誌の場合です。
1511 %<*jspf>
1512 \def\ps@headings{%
                            \def\@oddfoot{\normalfont\hfil\thepage\hfil}
                                 \def\@evenfoot{\normalfont\hfil\thepage\hfil}
1514
                                 \def\@oddhead{\normalfont\hfil \@title \hfil}
1516 \def\@evenhead{\normalfont\hfil プラズマ・核融合学会誌\hfil}}
1517 %</jspf>
```

\ps@myheadings myheadings ページスタイルではユーザが \markboth や \markright で柱を設定するため, ここでの定義は非常に簡単です。

[2004-01-17] 渡辺徹さんのパッチを適用しました。

```
1518 \def\ps@myheadings{%
     \let\@oddfoot\@empty\let\@evenfoot\@empty
1520
     \def\@evenhead{%
1521
        \if@mparswitch \hss \fi%
        \hbox to \fullwidth{\thepage\hfil\leftmark}%
1522
        \if@mparswitch\else \hss \fi}%
1523
     \def\@oddhead{%
1524
        \hbox to \fullwidth{\rightmark\hfil\thepage}\hss}%
1525
     \let\@mkboth\@gobbletwo
1527 % <book | report > \let\chaptermark \@gobble
     \let\sectionmark\@gobble
1529 %<!book&!report> \let\subsectionmark\@gobble
1530 }
```

# 8 文書のマークアップ

# 8.1 表題

\title これらは  $\LaTeX$  本体で次のように定義されています。ここではコメントアウトした形で示し\author ます。

```
\label{title} $$1531 \% \ext{$1532 \% \ext{$1532 \% \ext{$1533 \% \ext{$1533 \% \ext{$1533 \% \ext{$1534 \% \ext{$1544 \% \ext{$
```

\subtitle 副題を設定する。

\jsSubtitle

※プレアンブルにおいて \newcommand\*{\subtitle}{...} が行われることへの対策として、\subtitle の定義を \title の実行まで遅延させることにする。もしどうしても主題より前に副題を設定したい場合は、\jsSubtitle 命令を直接用いればよい。

本体を \jsSubtitle として定義する。

```
1535 \newcommand*{\jsSubtitle}[1]{\gdef\bxjs@subtitle{#1}}
```

1536 %\let\bxjs@subtitle\@undefined

\title にフックを入れる。

```
1537 \ensuremath{\title}[1] {\bxjs@decl@subtitle\gdef\@title{#1}} \\
```

1538 \AtBeginDocument{\bxjs@decl@subtitle}

1539 \def\bxjs@decl@subtitle{%

1540 \global\let\bxjs@decl@subtitle\relax

1541 \ifx\subtitle\@undefined

1542 \global\let\subtitle\jsSubtitle

1543 \fi}

\bxjs@annihilate@subtitle \subtitle 命令を無効化する。

※独自の \subtitle が使われている場合は無効化しない。

1544 \def\bxjs@annihilate@subtitle{%

1545 \ifx\subtitle\jsSubtitle \global\let\subtitle\relax \fi

1546 \global\let\jsSubtitle\relax}

\etitle 某学会誌スタイルで使う英語のタイトル,英語の著者名,キーワード,メールアドレスです。

```
\eauthor 1547 %<*jspf>
```

1551 \newcommand\*{\email}[1]{\gdef\authors@mail{#1}}

1552 \newcommand\*{\AuthorsEmail}[1]{\gdef\authors@mail{author's e-mail:\ #1}}

1553 %</jspf>

\plainifnotempty 従来の標準クラスでは、文書全体のページスタイルを empty にしても表題のあるページだけ plain になってしまうことがありました。これは \maketitle の定義中に \thispagestyle {plain} が入っているためです。この問題を解決するために、「全体のページスタイルが empty でないならこのページのスタイルを plain にする」という次の命令を作ることにします。

```
1554 \def\plainifnotempty{%
```

```
1555 \ifx \@oddhead \@empty
```

1556 \ifx \@oddfoot \@empty

1557 **\else** 

1558 \thispagestyle{plainfoot}%

1559 \fi

1560 \else

1561 \thispagestyle{plainhead}%

1562 \fi}

\maketitle 表題を出力します。著者名を出力する部分は、欧文の標準クラスファイルでは \large、和文のものでは \Large になっていましたが、ここでは \large にしました。

[2016-11-16] 新設された nomag および nomag\* オプションの場合をデフォルト (usemag 相当) に合わせるため、\smallskip を\jsc@smallskip に置き換えました。\smallskip のままでは nomag(\*) の場合にスケールしなくなり、レイアウトが変わってしまいます。

```
1563 %<*article|book|report|slide>
1564 \if@titlepage
1565
                   \newcommand{\maketitle}{%
                          \begin{titlepage}%
1567
                                \let\footnotesize\small
1568
                                \let\footnoterule\relax
                                1569
                                \null\vfil
1570
                                \if@slide
1571
                                        {\footnotesize \@date}%
1572
1573
                                        \begin{center}
1574
                                             \mbox{} \ \[1\jsZw]
                                             \large
1575
1576
                                             {\maybeblue\hrule height0\p@? depth2\p@?\relax}\par
                                             \jsc@smallskip
1577
1578
                                             \@title
1579
                                             \ifx\bxjs@subtitle\@undefined\else
                                                    \par\vskip\z@
1580
                                                    {\small \bxjs@subtitle\par}
1581
                                             \fi
 1582
                                             \jsc@smallskip
1583
1584
                                             {\maybeblue\hrule height0\p@? depth2\p@?\relax}\par
                                             \vfill
1585
                                              {\small \@author}%
1586
1587
                                       \end{center}
                                \else
1588
1589
                                \vskip 60\p0?
                                \begin{center}%
1590
                                       {\LARGE \@title \par}%
1591
1592
                                       \ifx\bxjs@subtitle\@undefined\else
                                             \space{1.5cm} 
1593
                                             {\normalsize \bxjs@subtitle\par}
1594
                                       \fi
1595
1596
                                       \vskip 3em%
1597
                                        {\large
                                             \lineskip .75em
1598
                                             \begin{tabular}[t]{c}%
1599
1600
                                                    \@author
                                             \end{tabular}\par}%
1601
                                        \vskip 1.5em
1602
                                        {\large \@date \par}%
1603
                                \end{center}%
1604
```

```
\fi
1605
1606
          \par
1607
          \ \
        \end{titlepage}%
1608
        \setcounter{footnote}{0}%
1609
        \global\let\thanks\relax
1610
        \global\let\maketitle\relax
1611
1612
        \global\let\@thanks\@empty
        \global\let\@author\@empty
1613
        \global\let\@date\@empty
1614
        \global\let\@title\@empty
1615
        \global\let\title\relax
1616
1617
        \global\let\author\relax
        \global\let\date\relax
1618
1619
        \global\let\and\relax
1620
        \bxjs@annihilate@subtitle
      }%
1621
1622 \else
1623
      \newcommand{\maketitle}{\par
        \begingroup
1624
1625
          \renewcommand\thefootnote{\@fnsymbol\c@footnote}%
          \def\@makefnmark{\rlap{\@textsuperscript{\normalfont\@thefnmark}}}%
1626
          \long\def\@makefntext##1{\advance\leftskip 3\jsZw
1627
            \parindent 1\jsZw\noindent
1628
            \llap{\@textsuperscript{\normalfont\@thefnmark}\hskip0.3\jsZw}##1}%
1629
          \if@twocolumn
1630
            \ifnum \col@number=\@ne
1631
1632
              \@maketitle
1633
            \else
              \twocolumn[\@maketitle]%
1634
            \fi
1635
1636
          \else
1637
1638
            \global\@topnum\z@ % Prevents figures from going at top of page.
            \@maketitle
1639
1640
          \plainifnotempty
1641
          \@thanks
1642
1643
        \endgroup
        \setcounter{footnote}{0}%
1644
1645
        \global\let\thanks\relax
1646
        \global\let\maketitle\relax
1647
        \global\let\@thanks\@empty
        \global\let\@author\@empty
1648
1649
        \global\let\@date\@empty
        \global\let\@title\@empty
1650
        \global\let\title\relax
        \global\let\author\relax
1652
1653
        \global\let\date\relax
```

```
\global\let\and\relax
                            1654
                            1655
                                                 \bxjs@annihilate@subtitle
                             1656
                                           }
\@maketitle 独立した表題ページを作らない場合の表題の出力形式です。
                                           \def\@maketitle{%
                            1657
                                                \newpage\null
                            1658
                            1659
                                                 \vskip 2em
                                                \begin{center}%
                            1660
                                                      \let\footnote\thanks
                            1661
                                                      {\LARGE \ditle \par}%
                            1662
                            1663
                                                      \ifx\bxjs@subtitle\@undefined\else
                                                           \space{2.5cm} 
                            1664
                                                           {\normalsize \bxjs@subtitle\par}
                            1665
                            1666
                            1667
                                                      \vskip 1.5em
                                                      {\large
                            1668
                                                           \lineskip .5em
                            1669
                            1670
                                                           \begin{tabular}[t]{c}%
                                                                \@author
                            1671
                            1672
                                                           \end{tabular}\par}%
                                                      \vskip 1em
                            1673
                                                      {\large \@date}%
                            1674
                                                 \end{center}%
                            1675
                                                \par\vskip 1.5em
                            1676
                            1677 %<article|slide>
                                                                                         \ifvoid\@abstractbox\else\centerline{\box\@abstractbox}\vskip1.5em\fi
                            1678
                            1679 \fi
                            1680 %</article|book|report|slide>
                            1681 %<*jspf>
                            1683
                                           \begingroup
                                                 \renewcommand\thefootnote{\@fnsymbol\c@footnote}%
                            1684
                                                 \def\@makefnmark{\rlap{\@textsuperscript{\normalfont\@thefnmark}}}%
                                                \long\def\@makefntext##1{\advance\leftskip 3\jsZw
                            1686
                            1687
                                                      \parindent 1\jsZw\noindent
                                                      \label{lap(Qtextsuperscript{\normalfont\Qthefnmark}\hskip0.3\jsZw} $$\#1}% $$
                            1688
                                                      \twocolumn[\@maketitle]%
                            1689
                                                 \plainifnotempty
                            1690
                                                \ \
                            1691
                            1692
                                            \endgroup
                            1693
                                            \setcounter{footnote}{0}%
                                            \global\let\thanks\relax
                            1694
                                            \global\let\maketitle\relax
                            1695
                                           \global\let\@thanks\@empty
                            1696
                                            \global\let\@author\@empty
                            1697
                                            \global\let\@date\@empty
                            1699 % \global\let\@title\@empty % \@title は柱に使う
                                            \global\let\title\relax
```

```
1701
                             \global\let\author\relax
1702
                             \global\let\date\relax
1703
                            \global\let\and\relax
                            \ifx\authors@mail\@undefined\else{%
1704
                                      \label{leftskip 3\jsZw \parindent -3\jsZw}% % $$ \end{substitute} % $$ \columnwidth $$ \colu
1705
                                      \footnotetext[0]{\itshape\authors@mail}%
1706
                            }\fi
1707
1708
                              \global\let\authors@mail\@undefined}
1709 \def\@maketitle{%
                            \newpage\null
1710
                            \vskip 6em % used to be 2em
1711
1712
                            \begin{center}
1713
                                      \let\footnote\thanks
                                      \label{large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-lar
1714
1715
                                      \lineskip .5em
1716
                                      \ifx\@author\@undefined\else
                                                 \vskip 1em
1717
                                                 \begin{tabular}[t]{c}%
1718
1719
                                                           \@author
                                                 \end{tabular}\par
1720
                                      \ifx\@etitle\@undefined\else
1722
1723
                                                 \vskip 1em
                                                 {\large \@etitle \par}%
1724
                                      \fi
1725
1726
                                      \ifx\@eauthor\@undefined\else
                                                 \vskip 1em
1727
                                                 \begin{tabular}[t]{c}%
1728
1729
                                                           \@eauthor
                                                 \end{tabular}\par
1730
1731
1732
                                      \vskip 1em
                                      \@date
1733
1734
                             \end{center}
                             \vskip 1.5em
1735
                            \centerline{\box\@abstractbox}
1736
                             \ifx\@keywords\@undefined\else
1737
                                      \vskip 1.5em
1738
1739
                                      \centerline{\parbox{157\jsc@mm}{\textsf{Keywords:}\\\ \small\@keywords}}
                            \fi
1740
                            \vskip 1.5em}
1741
1742 %</jspf>
```

#### 8.2 章・節

■構成要素 \@startsection マクロは 6 個の必須引数と、オプションとして \* と 1 個のオプション引数と 1 個の必須引数をとります。

# \@startsection{名}{レベル}{字下げ}{前アキ}{後アキ}{スタイル} \* [別見出し] {見出し}

それぞれの引数の意味は次の通りです。

名 ユーザレベルコマンドの名前です(例: section)。

レベル 見出しの深さを示す数値です (chapter=1, section=2, ...)。この数値が secnumdepth 以下のとき見出し番号を出力します。

字下げ 見出しの字下げ量です。

**前アキ** この値の絶対値が見出し上側の空きです。負の場合は、見出し直後の段落をインデントしません。

**後アキ** 正の場合は、見出しの下の空きです。負の場合は、絶対値が見出しの右の空きです (見出しと同じ行から本文を始めます)。

スタイル 見出しの文字スタイルの設定です。

\* この \* 印がないと、見出し番号を付け、見出し番号のカウンタに1を加算します。

別見出し 目次や柱に出力する見出しです。

見出し 見出しです。

見出しの命令は通常 \@startsection とその最初の 6 個の引数として定義されます。

次は **\**@startsection の定義です。情報処理学会論文誌スタイルファイル (ipsjcommon.sty) を参考にさせていただきましたが、完全に行送りが **\**baselineskip の整数倍にならなくてもいいから前の行と重ならないようにしました。

- $1743 \ensuremath{\mbox{\mbox{$1$}}\mbox{$4$}} 1743 \ensuremath{\mbox{\mbox{$4$}}\mbox{$4$}} 1743 \ensuremath{\mbox{\mbox{$4$}}\mbox{$4$}} 1743 \ensuremath{\mbox{$4$}}\mbox{$4$} 1743 \ensuremath{\mbox{$4$}}\mbox{$4$}\mbox{$4$} 1743 \ensuremath{\mbox{$4$}}\mbox{$4$}\mbox$
- 1744 \if@noskipsec \leavevmode \fi
- 1745 \par
- 1746% 見出し上の空きを \@tempskipa にセットする
- 1747 \@tempskipa #4\relax
- 1748 % \Cafterindent は見出し直後の段落を字下げするかどうかを表すスイッチ
- 1749 \if@english \@afterindentfalse \else \@afterindenttrue \fi
- 1750% 見出し上の空きが負なら見出し直後の段落を字下げしない
- 1751 \ifdim \@tempskipa <\z@
- 1752 \@tempskipa -\@tempskipa \@afterindentfalse
- 1753 \fi
- 1754 \if@nobreak
- 1755 % \everypar{\everyparhook}% これは間違い
- 1756 \everypar{}%
- 1757 \else
- 1758 \addpenalty\@secpenalty
- 1759% 次の行は削除
- 1760 % \addvspace\@tempskipa
- 1761%次の \noindent まで追加
- 1762 \ifdim \@tempskipa >\z@
- 1763 \if@slide\else
- 1764 \null
- 1765 \vspace\*{-\baselineskip}%

```
1766
                                                          \fi
                                1767
                                                          \vskip\@tempskipa
                                1768
                                                     \fi
                                               \fi
                                1769
                                               \noindent
                                1770
                                1771 % 追加終わり
                                               \@ifstar
                                1772
                                1773
                                                     {\@ssect{#3}{#4}{#5}{#6}}%
                                                     1774
                                          \@sect と \@xsect は, 前のアキがちょうどゼロの場合にもうまくいくように, 多少変え
                                     てあります。\everyparhook も挿入しています。
                                          \everyparhook の挿入は everyparhook=compat の時のみ行う。
\bxjs@if@ceph everyparhook=compat である場合にのみ直後のトークンを実行する。
                                1775 \ifnum\bxjs@everyparhook=\bxjs@everyparhook@compat
                                1776 \let\bxjs@if@ceph\@firstofone
                                1777 \else \let\bxjs@if@ceph\@gobble
                                1778 \fi
                                1779 \def\@sect#1#2#3#4#5#6[#7]#8{%
                                               \ifnum #2>\c@secnumdepth
                                1780
                                                     \let\@svsec\@empty
                                1781
                                               \else
                                1782
                                                     \refstepcounter{#1}%
                                1783
                                                     \protected@edef\@svsec{\@seccntformat{#1}\relax}%
                                1784
                                1785
                                1786% 見出し後の空きを \@tempskipa にセット
                                                \@tempskipa #5\relax
                                1788% 条件判断の順序を入れ換えました
                                               \ifdim \@tempskipa<\z@
                                1789
                                1790
                                                     \def\@svsechd{%
                                                          #6{\hskip #3\relax
                                1791
                                                          \@svsec #8}%
                                1792
                                1793
                                                          \csname #1mark\endcsname{#7}%
                                                          \addcontentsline{toc}{#1}{%
                                1794
                                                               \ifnum #2>\c@secnumdepth \else
                                1795
                                                                    \protect\numberline{\csname the #1\ends name} % \protect\numberline{\csname 
                                1796
                                1797
                                                               #7}}% 目次にフルネームを載せるなら #8
                                1798
                                                \else
                                1799
                                1800
                                                     \begingroup
                                 1801
                                                          \interlinepenalty \@M % 下から移動
                                                          #6{%
                                1802
                                                               \@hangfrom{\hskip #3\relax\@svsec}%
                                 1803
                                                               \interlinepenalty \@M % 上に移動
                                1804 %
```

#8\@@par}%

1805

```
1806
       \endgroup
1807
       \csname #1mark\endcsname{#7}%
1808
       \addcontentsline{toc}{#1}{%}
         \ifnum #2>\c@secnumdepth \else
1809
           \protect\numberline{\csname the#1\endcsname}%
1810
         \fi
1811
         #7}% 目次にフルネームを載せるならここは #8
1812
1813
     \fi
     \0xsect{#5}}
1814
   二つ挿入した \everyparhook のうち後者が \paragraph 類の後で2回実行され,それ
 以降は前者が実行されます。
   [2016-07-28] slide オプションと twocolumn オプションを同時に指定した場合の罫線の
 位置を微調整しました。
1815 \def\@xsect#1{%
1816% 見出しの後ろの空きを \@tempskipa にセット
     \@tempskipa #1\relax
1818 % 条件判断の順序を変えました
     \ifdim \@tempskipa<\z@
1819
       \@nobreakfalse
1820
1821
       \global\@noskipsectrue
       \everypar{%
1822
1823
         \if@noskipsec
           \global\@noskipsecfalse
1824
1825
          {\setbox\z@\lastbox}%
1826
           \clubpenalty\@M
           \begingroup \@svsechd \endgroup
1827
           \unskip
1828
1829
           \@tempskipa #1\relax
           \hskip -\@tempskipa
1830
1831
         \else
1832
           \clubpenalty \@clubpenalty
           \everypar\expandafter{\bxjs@if@ceph\everyparhook}%
1833
         \fi\bxjs@if@ceph\everyparhook}%
1834
     \else
1835
       \par \nobreak
1836
       \vskip \@tempskipa
1837
       \@afterheading
1838
1839
     \if@slide
1840
       {\vskip\if@twocolumn-5\jsc@mpt\else-6\jsc@mpt\fi
1841
        \maybeblue\hrule height0\jsc@mpt depth1\jsc@mpt
1842
        \vskip\if@twocolumn 4\jsc@mpt\else 7\jsc@mpt\fi\relax}%
1843
1844
     \fi
      \par % 2000-12-18
1845
1846
     \ignorespaces}
1847 \def\@ssect#1#2#3#4#5{%
     \@tempskipa #3\relax
1848
```

```
1849
                      \ifdim \@tempskipa<\z@
                        \def\@svsechd{#4{\hskip #1\relax #5}}%
                 1850
                 1851
                        \begingroup
                 1852
                          #4{%
                 1853
                            \@hangfrom{\hskip #1}%
                 1854
                              \interlinepenalty \@M #5\@@par}%
                 1855
                 1856
                        \endgroup
                 1857
                      \0xsect{#3}}
                 1858
                  ■柱関係の命令
     \chaptermark \...mark の形の命令を初期化します(第7節参照)。 \chaptermark 以外は LATFX 本体で
     \sectionmark 定義済みです。
  \verb|\subsectionmark| 1859 \verb|\newcommand*\chaptermark[1]{}|
\verb|\subparagraphmark| 1863 \% \verb|\newcommand*{\paragraphmark}[1]{} |
                 1864 % \newcommand*{\subparagraphmark}[1]{}
                  ■カウンタの定義
   \c@secnumdepth secnumdepth は第何レベルの見出しまで番号を付けるかを決めるカウンタです。
                 1865 %<!book&!report>\setcounter{secnumdepth}{3}
                 1866 % <book | report > \setcounter { secnumdepth } {2}
       \c@chapter 見出し番号のカウンタです。\newcounter の第1引数が新たに作るカウンタです。これは
       \cosection 第2引数が増加するたびに0に戻されます。第2引数は定義済みのカウンタです。
    \c@subsection 1867 \newcounter{part}
  \c@subsubsection 1868 % \left\ \report \newcounter \cent{chapter} \\ 1869 % \left\ \report \newcounter \section \cent{chapter}
     \verb|\c@paragraph|_{1870} % < !book&!report> \\ newcounter\{section\}
  \verb|\c@subparagraph| 1871 \verb|\newcounter{subsection}| [section]|
                 1872 \newcounter{subsubsection} [subsection]
                 1873 \newcounter{paragraph}[subsubsection]
                 1874 \newcounter{subparagraph} [paragraph]
         \thepart カウンタの値を出力する命令 \the 何々 を定義します。
                    カウンタを出力するコマンドには次のものがあります。
      \thechapter
      \thesection
                                            1, 2, 3, ...
                        \arabic{COUNTER}
   \thesubsection
                                            i, ii, iii, ...
                        \roman{COUNTER}
 \thesubsubsection
                                            I, II, III, ...
                        \Roman{COUNTER}
    \theparagraph
                                            a, b, c, ...
                        \alph{COUNTER}
  \thesubparagraph
                        \Alph{COUNTER}
                                            A, B, C, ...
                                           一, 二, 三, ...
                        \kansuji{COUNTER}
```

以下ではスペース節約のため @ の付いた内部表現を多用しています。

```
1875 \renewcommand{\thepart}{\@Roman\c@part}

1876 %<!book&!report>% \renewcommand{\thesection}{\@arabic\c@section}

1877 %<!book&!report>\renewcommand{\thesection}{\@arabic\c@section.\@arabic\c@section}

1878 %<!book&!report>\renewcommand{\thesubsection}{\@arabic\c@section.\@arabic\c@subsection}

1879 %<*book|report>

1880 \renewcommand{\thechapter}{\@arabic\c@chapter}

1881 \renewcommand{\thesection}{\thechapter.\@arabic\c@section}

1882 \renewcommand{\thesubsection}{\thesection.\@arabic\c@subsection}

1883 %</book|report>

1884 \renewcommand{\thesubsubsection}{%

1885 \thesubsection.\@arabic\c@subsubsection}

1886 \renewcommand{\theparagraph}{%

1887 \thesubsubsection.\@arabic\c@paragraph}

1888 \renewcommand{\thesubparagraph}{%
```

\Ochapapp \Ochapapp の初期値は \prechaptername (第) です。

\@chappos \@chappos の初期値は \postchaptername (章) です。

\theparagraph.\@arabic\c@subparagraph}

\appendix は \@chapapp を \appendixname に, \@chappos を空に再定義します。 [2003-03-02] \@secapp は外しました。

 $1890 \ \% \ | \ report> \ newcommand \{\ \ \ \ \ \} \ \{\ prechaptername\}$ 

■前付,本文,後付 本のうち章番号があるのが「本文」,それ以外が「前付」「後付」です。

\frontmatter ページ番号をローマ数字にし、章番号を付けないようにします。

[2017-03-05] \frontmatter と \mainmatter の 2 つの命令は、改丁または改ページした後で \pagenumbering{...} でノンブルを 1 にリセットします。長い間 \frontmatter は openany のときに単なる改ページとしていましたが、これではノンブルをリセットする際に偶奇逆転が起こる場合がありました。openany かどうかに依らず奇数ページまで繰るように修正することで、問題を解消しました。実は、 $\text{IMT}_{\text{EX}}$  の標準クラスでは 1998 年に修正されていた問題です(コミュニティ版  $\text{pI}_{\text{EX}}$  の標準クラス 2017/03/05 も参照)。

```
1892 %<*book|report>
```

1893 \newcommand\frontmatter{%

 $1894 \quad \verb|\pltx@cleartooddpage| \\$ 

1895 \@mainmatterfalse

1896 \pagenumbering{roman}}

\mainmatter ページ番号を算用数字にし、章番号を付けるようにします。

1897 \newcommand\mainmatter{%

1898 \pltx@cleartooddpage

1899 \@mainmattertrue

1900 \pagenumbering{arabic}}

\backmatter 章番号を付けないようにします。ページ番号の付け方は変わりません。

```
1901 \newcommand\backmatter{%
          \if@openleft
    1902
    1903
           \cleardoublepage
    1904
          \else\if@openright
           \cleardoublepage
    1905
          \else
    1906
           \clearpage
    1907
    1908
          \fi\fi
          \@mainmatterfalse}
    1910 %</book|report>
      ■部
\part 新しい部を始めます。
        \secdef を使って見出しを定義しています。このマクロは二つの引数をとります。
           \secdef{星なし}{星あり}
      星なし * のない形の定義です。
      星あり * のある形の定義です。
        \secdef は次のようにして使います。
         \def\chapter { ... \secdef \CMDA \CMDB }
                     [#1]#2{....} % \chapter[...]{...} の定義
         \def\CMDA
         \def\CMDB
                    #1{....}
                                % \chapter*{...} の定義
        まず book と report のクラス以外です。
    1911 %<*!book&!report>
    1912 \newcommand\part{%
    1913
          \if@noskipsec \leavevmode \fi
    1914
          \par
    1915
          \addvspace{4ex}%
          \if@english \@afterindentfalse \else \@afterindenttrue \fi
          \secdef\@part\@spart}
    1918 %</!book&!report>
        book および report クラスの場合は、少し複雑です。
    1919 %<*book|report>
    1920 \newcommand\part{%
          \if@openleft
    1921
    1922
            \cleardoublepage
          \else\if@openright
    1923
    1924
            \cleardoublepage
          \else
    1925
    1926
           \clearpage
          \fi\fi
    1927
          \thispagestyle{empty}% 欧文用標準スタイルでは plain
          \if@twocolumn
    1929
```

\onecolumn

1930

```
1931
              \@restonecoltrue
      1932
      1933
              \@restonecolfalse
            \fi
      1934
            \null\vfil
      1935
            \secdef\@part\@spart}
      1936
      1937 %</book|report>
\@part 部の見出しを出力します。\bfseries を \headfont に変えました。
          book および report クラス以外では secnumdepth が -1 より大きいとき部番号を付け
        ます。
      1938 %<*!book&!report>
      1939 \def\@part[#1]#2{%
      1940
            \ifnum \c@secnumdepth >\m@ne
      1941
              \refstepcounter{part}%
              \addcontentsline{toc}{part}{%
      1942
                \prepartname\thepart\postpartname\thepart\psize{1\jsZw}\#1\}\%
      1943
      1944
            \else
              \addcontentsline{toc}{part}{#1}%
      1945
      1946
            \markboth{}{}%
      1947
            {\operatorname{\mathtt{parindent}}} 20
      1948
      1949
              \raggedright
              \interlinepenalty \@M
      1950
      1951
              \normalfont
              \ifnum \c@secnumdepth >\m@ne
      1952
                \verb|\Large\headfont\prepartname\thepart\postpartname| \\
      1953
      1954
                \par\nobreak
      1955
              \huge \headfont #2%
      1956
      1957
              \markboth{}{}\par}%
      1958
            \nobreak
            \vskip 3ex
      1959
            \@afterheading}
      1961 %</!book&!report>
          book および report クラスでは secnumdepth が -2 より大きいとき部番号を付けます。
      1962 %<*book|report>
      1963 \def\@part[#1]#2{%
            \ifnum \c@secnumdepth >-2\relax
      1964
      1965
              \refstepcounter{part}%
              \addcontentsline{toc}{part}{%
      1966
                \prepartname\thepart\postpartname\thepart\psize{1\jsZw}\#1\}\%
      1967
      1968
            \else
      1969
              \addcontentsline{toc}{part}{#1}%
      1970
            \fi
            \markboth{}{}%
            {\centering
      1972
              \interlinepenalty \@M
      1973
```

```
1974
               \normalfont
       1975
                \ifnum \c@secnumdepth >-2\relax
       1976
                  \huge\headfont \prepartname\thepart\postpartname
       1977
                  \par\vskip20\p@?
       1978
               \Huge \headfont #2\par}%
       1979
             \@endpart}
       1980
       1981 %</book|report>
\@spart 番号を付けない部です。
       1982 %<*!book&!report>
       1983 \def\@spart#1{{%
               \parindent \z@ \raggedright
               \interlinepenalty \@M
       1985
       1986
               \normalfont
       1987
               \huge \headfont #1\par}%
             \nobreak
       1988
             \vskip 3ex
       1989
             \@afterheading}
       1991 %</!book&!report>
       1992 %<*book|report>
       1993 \def\@spart#1{{%
       1994
                \centering
                \interlinepenalty \@M
       1995
               \normalfont
       1996
               \Huge \headfont #1\par}%
             \@endpart}
       1998
       1999 %</book|report>
```

\@endpart \@part と \@spart の最後で実行されるマクロです。両面印刷のときは白ページを追加します。二段組のときには、二段組に戻します。

[2016-12-13] openany のときには白ページが追加されるのは変なので、その場合は追加しないようにしました。このバグは  $\LaTeX$  では classes.dtx v1.4b (2000/05/19) で修正されています。

```
2000 %<*book|report>
2001 \end{art} \vfil\newpage
2002
     \if@twoside
       \if@openleft %% added (2017/02/24)
2003
2004
        \null\thispagestyle{empty}\newpage
       \else\if@openright %% added (2016/12/13)
2005
        \null\thispagestyle{empty}\newpage
2006
       \fi\fi \% added (2016/12/13, 2017/02/24)
2007
2008
      \if@restonecol
2009
2010
        \twocolumn
     \fi}
2011
2012 %</book|report>
```

### ■章

2051

```
章の最初のページスタイルは、全体が empty でなければ plain にします。また、\@topnum
        \chapter
                  を 0 にして、章見出しの上に図や表が来ないようにします。
                2013 %<*book|report>
                2014 \newcommand{\chapter}{%
                      \if@openleft\cleardoublepage\else
                      \if@openright\cleardoublepage\else\clearpage\fi\fi
                2016
                2017
                      \plainifnotempty % 元: \thispagestyle{plain}
                      \global\@topnum\z@
                      \if@english \@afterindentfalse \else \@afterindenttrue \fi
                2019
                2020
                      \secdef
                2021
                        {\@omit@numberfalse\@chapter}%
                        {\@omit@numbertrue\@schapter}}
                2022
       \@chapter 章見出しを出力します。secnumdepth が 0 以上かつ \@mainmatter が真のとき章番号を出
                  力します。
                2023 \def\@chapter[#1]#2{%
                      \ifnum \c@secnumdepth >\m@ne
                2025
                        \if@mainmatter
                          \refstepcounter{chapter}%
                2026
                2027
                          \typeout{\@chapapp\thechapter\@chappos}%
                2028
                          \addcontentsline{toc}{chapter}%
                            {\protect\numberline
                2029
                            {\tilde \varphi}_{if0english\theta} = \end{array} \
                2030 %
                            {\@chapapp\thechapter\@chappos}%
                2031
                2032
                            #1}%
                        \else\addcontentsline{toc}{chapter}{#1}\fi
                2033
                2034
                      \else
                        \addcontentsline{toc}{chapter}{#1}%
                2035
                2036
                      \fi
                      \chaptermark{#1}%
                2037
                2038
                      \addtocontents{lof}{\protect\addvspace{10\jsc@mpt}}%
                      \verb|\addtocontents{lot}{\protect\\addvspace{10\jsc@mpt}}|%
                2039
                      \if@twocolumn
                2040
                2041
                        \@topnewpage[\@makechapterhead{#2}]%
                2042
                2043
                        \@makechapterhead{#2}%
                        \@afterheading
                2044
                2045
\@makechapterhead 実際に章見出しを組み立てます。\bfseries を \headfont に変えました。
                2046 \def\@makechapterhead#1{%
                2047
                      \vspace*{2\Cvs}% 欧文は50pt
                      {\parindent \z@ \raggedright \normalfont
                2048
                        \ifnum \c@secnumdepth >\m@ne
                2049
                          \if@mainmatter
                2050
```

\huge\headfont \@chapapp\thechapter\@chappos

```
\par\nobreak
                  2052
                              \vskip \Cvs % 欧文は 20pt
                  2053
                  2054
                            \fi
                          \fi
                  2055
                          \interlinepenalty\@M
                  2056
                          \Huge \headfont #1\par\nobreak
                  2057
                          \vskip 3\Cvs}} % 欧文は 40pt
                  2058
       \@schapter \chapter*{...} コマンドの本体です。\chaptermark を補いました。
                  2059 \def\@schapter#1{%}
                        \chaptermark{#1}%
                  2060
                  2061
                        \if@twocolumn
                          \@topnewpage[\@makeschapterhead{#1}]%
                  2062
                  2063
                  2064
                          \@makeschapterhead{#1}\@afterheading
                  2065
                        \fi}
\@makeschapterhead 番号なしの章見出しです。
                  2066 \def\@makeschapterhead#1{%
                        \vspace*{2\Cvs}% 欧文は50pt
                  2068
                        {\parindent \z@ \raggedright
                          \normalfont
                  2069
                  2070
                          \interlinepenalty\@M
                          \Huge \headfont #1\par\nobreak
                  2071
                          \vskip 3\Cvs}} % 欧文は 40pt
                  2072
                  2073 %</book|report>
```

# ■下位レベルの見出し

\section 欧文版では \@startsection の第4引数を負にして最初の段落の字下げを禁止していますが、和文版では正にして字下げするようにしています。

段組のときはなるべく左右の段が狂わないように工夫しています。

```
2074 \if@twocolumn
2075 \newcommand{\section}{%
2076 %<jspf>\ifx\maketitle\relax\else\maketitle\fi
        \@startsection{section}{1}{\z@}%
2078 %<!kiyou>
                  {0.6\Cvs}{0.4\Cvs}%
2079 %<kiyou>
                 {\Cvs}{0.5\Cvs}%
2080 %
        {\normalfont\large\headfont\@secapp}}
        {\normalfont\large\headfont\raggedright}}
2081
2082 \ensuremath{\setminus} else
      \newcommand{\section}{%
2083
        \if@slide\clearpage\fi
2084
2085
        \@startsection{section}{1}{\z@}%
        {\Cvs \@plus.5\Cdp \@minus.2\Cdp}% 前アキ
2086
2087
        {.5\Cvs \@plus.3\Cdp}% 後アキ
        {\normalfont\Large\headfont\@secapp}}
2088 %
        {\normalfont\Large\headfont\raggedright}}
2089
```

#### 2090 \fi

### \subsection 同上です。

- 2091 \if@twocolumn
- 2092 \newcommand{\subsection}{\Qstartsection{subsection}{2}{\zQ}}
- 2093  ${\z0}{\if0slide .4\Cvs \else \z0 \fi}%$
- 2094 {\normalfont\normalsize\headfont}}
- 2095 \else
- 2096 \newcommand{\subsection}{\Qstartsection{subsection}{2}{\zQ}\%
- 2097 {\Cvs \@plus.5\Cdp \@minus.2\Cdp}% 前アキ
- 2098 {.5\Cvs \@plus.3\Cdp}% 後アキ
- $2099 \qquad \{\texttt{\normalfont\large\headfont}\}$
- 2100 \fi

\subsubsection [2016-07-22] slide オプション指定時に \subsubsection の文字列と罫線が重なる問題に 対処しました (forum:1982)。

- 2101 \if@twocolumn
- $2102 \qquad \verb|\newcommand{\subsubsection}{\subsu$
- 2103  ${\z0}{\if@slide .4\Cvs \else \z0 \fi}%$
- 2104 {\normalfont\normalsize\headfont}}
- 2105 \else
- ${\tt 2106} \quad \verb|\newcommand{\subsubsection}{\su$
- 2107 {\Cvs \@plus.5\Cdp \@minus.2\Cdp}%
- 2108 {\if@slide .5\Cvs \@plus.3\Cdp \else \z@ \fi}%
- 2109 {\normalfont\normalsize\headfont}}
- 2110 \fi

\paragraph 見出しの後ろで改行されません。

[2016-11-16] 従来は \paragraph の最初に出るマークを「■」に固定していましたが、このマークを変更可能にするため \jsParagraphMark というマクロに切り出しました。これで、たとえば

\renewcommand{\jsParagraphMark}{★}

とすれば「★」に変更できますし、マークを空にすることも容易です。なお、某学会クラスでは従来どおりマークは付きません。

※ BXJS クラスでは、1.1 版 [2016-02-14] から \jsParagraphMark をサポートしている。 段落のマーク ( $\blacksquare$ ) が必ず和文フォントで出力されるようにする。

\jsJaChar は standard 和文ドライバが読み込まれた場合は \jachar と同義になるが、 それ以外は何もしない。

- 2111 \newcommand\jsParagraphMark{\relax\jsJaChar{■}}
- ${\tt 2112 \ let\ bxjs@org@paragraph@mark\ jsParagraphMark}$
- 2114 \let\jsParagraphMark\@empty

```
\long\edef\jsParagraphMark{\noexpand\jsJaChar{\bxjs@paragraph@mark}}
            2117 \fi\fi
            2118 \let\jsJaChar\@empty
            2119 \if@twocolumn
                 \newcommand{\paragraph}{\@startsection{paragraph}{4}{\z@}%
                   {\z0}{\if@slide .4\Cvs \else -1\jsZw\fi}% 改行せず 1\jsZw のアキ
            2121
                         {\normalfont\normalsize\headfont}}
            2122 %<jspf>
            2123 %<!jspf>
                          {\normalfont\normalsize\headfont\jsParagraphMark}}
            2124 \else
                \newcommand{\paragraph}{\@startsection{paragraph}{4}{\z@}%
            2125
                   {0.5\Cvs \qplus.5\Cdp \qminus.2\Cdp}%
            2126
                   {\if@slide .5\Cvs \@plus.3\Cdp \else -1\jsZw\fi}% 改行せず 1\jsZw のアキ
                         {\normalfont\normalsize\headfont}}
            2128 %<jspf>
            2129 %<!jspf>
                          {\normalfont\normalsize\headfont\jsParagraphMark}}
            2130 \fi
\subparagraph 見出しの後ろで改行されません。
            2131 \if@twocolumn
            2132
                 {\z0}{\ide .4\cvs \oplus.3\cdp \else -1\jsZw\fi}%
            2133
                   {\normalfont\normalsize\headfont}}
            2135 \else
                 \newcommand{\subparagraph}{\@startsection{subparagraph}{5}{\z@}%
                   {\z0}{\ide .5\cvs \quare -1\jsZw\fi}%
                   {\normalfont\normalsize\headfont}}
            2138
            2139 \fi
             8.3 リスト環境
               第 k レベルのリストの初期化をするのが \@listk です (k = i, ii, iii, iv)。 \@listk
              は \leftmargin を \leftmargink に設定します。
 \leftmargini 二段組であるかないかに応じてそれぞれ 2em, 2.5em でしたが, ここでは全角幅の 2 倍にし
              ました。
               [2002-05-11] 3zw に変更しました。
               [2005-03-19] 二段組は 2zw に戻しました。
            2140 \if@slide
            2141 \setlength\leftmargini{1\jsZw}
            2142 \else
            2143 \if@twocolumn
                  \setlength\leftmargini{2\jsZw}
            2144
            2145 \else
                   \setlength\leftmargini{3\jsZw}
            2147 \fi
            2148 \fi
\leftmarginii ii, iii, iv は \labelsep とそれぞれ '(m)', 'vii.', 'M.' の幅との和より大きくすること
\leftmarginiii
\leftmarginiv
                                                 77
```

\leftmarginv \leftmarginvi になっています。ここでは全角幅の整数倍に丸めました。

```
2149 \if@slide
              2150 \setlength\leftmarginii {1\jsZw}
                   \setlength\leftmarginiii{1\jsZw}
              2151
              2152 \setlength\leftmarginiv {1\jsZw}
              2153 \setlength\leftmarginv {1\jsZw}
                   \setlength\leftmarginvi {1\jsZw}
              2154
              2156 \setlength\leftmarginii {2\jsZw}
              2157
                   \setlength\leftmarginiii{2\jsZw}
              2158 \setlength\leftmarginiv {2\jsZw}
              2159 \setlength\leftmarginv \{1\jsZw\}
              2160 \setlength\leftmarginvi {1\jsZw}
              2161 \fi
      \labelsep \labelsep はラベルと本文の間の距離です。\labelwidth はラベルの幅です。これは二分
     \labelwidth に変えました。
              2162 \setlength \labelsep {0.5\jsZw} % .5em
              2163 \setlength \labelwidth{\leftmargini}
              2164 \addtolength \labelwidth \{-\labelsep}
      \partopsep リスト環境の前に空行がある場合, \parskip と \topsep に \partopsep を加えた値だけ
                縦方向の空白ができます。0 に改変しました。
              2165 \setlength\partopsep{\z0} % {2\p0 \@plus 1\p0 \@minus 1\p0}
\@beginparpenalty リストや段落環境の前後,リスト項目間に挿入されるペナルティです。
 \@endparpenalty 2166 \@beginparpenalty -\@lowpenalty
   2168 \@itempenalty
                                 -\@lowpenalty
```

\@listi \@listi は \leftmargin, \parsep, \topsep, \itemsep などのトップレベルの定義を \@listI します。この定義は、フォントサイズコマンドによって変更されます(たとえば\smallの 中では小さい値に設定されます)。このため、\normalsize がすべてのパラメータを戻せる ように、\@listIで\@listiのコピーを保存します。元の値はかなり複雑ですが、ここで は簡素化してしまいました。特に最初と最後に行送りの半分の空きが入るようにしてありま す。アスキーの標準スタイルではトップレベルの itemize, enumerate 環境でだけ最初と 最後に行送りの半分の空きが入るようになっていました。

[2004-09-27] \topsep のグルー  $^{+0.2}_{-0.1}$  \baselineskip を思い切って外しました。

 ${\tt 2169 \setminus def \setminus @listi{ \setminus leftmargin \setminus leftmargini}}$ 

2170 \parsep \z@

\topsep 0.5\baselineskip

2172 \itemsep \z@ \relax}

2173 \let\@listI\@listi

念のためパラメータを初期化します (実際には不要のようです)。

2174 \@listi

```
\colone{1} \Colone{1} 第 2~6 レベルのリスト環境のパラメータの設定です。
\@listiii 2175 \def\@listii{\leftmargin\leftmarginii
 \verb|\@listiv|^{2176}
                \labelwidth\leftmarginii \advance\labelwidth-\labelsep
         2177
                \topsep \z@
  \verb|\@listv|_{2178}
                \parsep \z@
 \@listvi2179
                \itemsep\parsep}
         2180 \def\@listiii{\leftmargin\leftmarginiii
                \labelwidth\leftmarginiii \advance\labelwidth-\labelsep
                \topsep \z@
         2182
               \parsep \z@
         2183
                \itemsep\parsep}
         2185 \def\@listiv {\leftmargin}\leftmarginiv
         2186
                            \labelwidth\leftmarginiv
                            \advance\labelwidth-\labelsep}
         2187
         2188 \def\@listv {\leftmargin\leftmarginv
                            \labelwidth\leftmarginv
         2189
         2190
                            \advance\labelwidth-\labelsep}
         2191 \def\@listvi {\leftmargin\leftmarginvi
         2192
                            \labelwidth\leftmarginvi
                            \advance\labelwidth-\labelsep}
         2193
```

 $\blacksquare$ enumerate 環境 enumerate 環境はカウンタ enumi, enumii, enumii, enumiv を使います。n レベルの番号です。

\theenumi 出力する番号の書式を設定します。これらは IATEX 本体(ltlists.dtx 参照)で定義済み \theenumii ですが、ここでは表し方を変えています。\@arabic、\@alph、\@roman、\@Alph はそれぞ \theenumiii 和算用数字、小文字アルファベット、小文字ローマ数字、大文字アルファベットで番号を出 \theenumiv 力する命令です。

2194 \renewcommand{\theenumi}{\Carabic\cCenumi} 2195 \renewcommand{\theenumii}{\Calph\cCenumii} 2196 \renewcommand{\theenumiii}{\Croman\cCenumiii} 2197 \renewcommand{\theenumiv}{\CAlph\cCenumiv}

\labelenumi enumerate 環境の番号を出力する命令です。第2レベル以外は最後に欧文のピリオドが付 \labelenumii きますが、これは好みに応じて取り払ってください。第2レベルの番号のかっこは和文用に \labelenumiii 換え、その両側に入る余分なグルーを \inhibitglue で取り除いています。

\labelenumiv

和文の括弧で囲むための補助命令 \jsInJaParen を定義して \labelenumii でそれを用いている。

※現状の zxjatype の \inhibitglue の実装には「前後のグルーを消してしまう」という不備があって、そのため enumii の出力が異常になるという不具合があった。zxjatype を修正するまでの回避策として、サイズがゼロの罫(\bxjs@dust)でガードしておく。

<sup>2198 \</sup>def\bxjs@dust{\vrule\@width\z@\@height\z@\@depth\z@} 2199 \newcommand\*{\jsInJaParen} [1] {%

```
2200 \bxjs@dust\jsInhibitGlue (\theenumii) \jsInhibitGlue\bxjs@dust}
2201 \newcommand{\labelenumi}{\theenumi.}
2202 \newcommand{\labelenumii}{\jsInJaParen{ (\theenumii) }}
2203 \newcommand{\labelenumiii}{\theenumiii.}
2204 \newcommand{\labelenumiv}{\theenumiv.}

\p@enumii \p@enumn は \ref コマンドで enumerate 環境の第 n レベルの項目が参照されるときの書
\p@enumiii 式です。これも第 2 レベルは和文用かっこにしました。
\p@enumiv \frac{2205}{renewcommand{\p@enumii}{\theenumi}}
2206 \renewcommand{\p@enumii}{\theenumi\jsInhibitGlue (\theenumii)}
2207 \renewcommand{\p@enumiv}{\p@enumiii\theenumiii}
```

```
\labelitemi itemize 環境の第 n レベルのラベルを作るコマンドです。 \labelitemii ^{2208} \newcommand\labelitemii{\textbullet} \labelitemiii ^{2209} \newcommand\labelitemiii{\normalfont\bfseries \textendash} \labelitemiv ^{2210} \newcommand\labelitemiii{\textasteriskcentered} \labelitemiv ^{2211} \newcommand\labelitemiv{\textperiodcentered}
```

### ■description 環境

description 本来の description 環境では、項目名が短いと、説明部分の頭がそれに引きずられて左に 出てしまいます。これを解決した新しい description の実装です。

2212 \newenvironment{description}{%

2213 \list{}{%

2215 \labelsep=1\jsZw

\descriptionlabel description 環境のラベルを出力するコマンドです。好みに応じて #1 の前に適当な空き (たとえば \hspace{1\jsZw}) を入れるのもいいと思います。

 $2218 \mbox{ } \mbox$ 

#### ■概要

abstract 概要(要旨, 梗概)を出力する環境です。book クラスでは各章の初めにちょっとしたことを 書くのに使います。titlepage オプション付きの article クラスでは, 独立したページに 出力されます。abstract 環境は元は quotation 環境で作られていましたが, quotation 環境の右マージンをゼロにしたので, list 環境で作り直しました。

JSPF スタイルでは実際の出力は \maketitle で行われます。

bxjsreport クラスの abstract 環境は:

• layout=v1 の場合は jsbook + report の動作を継承する。つまり jsbook と同じに なる。

• layout=v2 の場合は新設の jsreport の動作を継承する。つまり jsarticle (+titlapage) と同じになる。

```
chapterabstract jsbook の abstract 環境 (「各章の初めにちょっとしたことを書く」ためのもの)を chap-
               terabstract と呼ぶことにする。
              2219 %<*book|report>
              2220 \newenvironment{chapterabstract}{%
                   \begin{list}{}{%
              2221
              2222
                     \listparindent=1\jsZw
                     \itemindent=\listparindent
              2223
                      \rightmargin=\z@
                     \leftmargin=5\jsZw}\item[]}{\end{list}\vspace{\baselineskip}}
              2225
              2226 %</book|report>
                  "普通の" abstract 環境の定義。
              2227 %<*article|report|slide>
              2228 \newbox\@abstractbox
              2229 \if@titlepage
                   \newenvironment{abstract}{%
              2230
                     \titlepage
              2231
              2232
                      \left\langle \right\rangle 
                     \@beginparpenalty\@lowpenalty
              2233
              2234
                     \begin{center}%
                       \headfont \abstractname
              2235
              2236
                       \@endparpenalty\@M
              2237
                     \end{center}%
               BXJSクラスでは、概要の最初の段落に段落下げが入るようにする。
              2239
                   {\par\vfil\null\endtitlepage}
              2240 \else
              2241
                   \newenvironment{abstract}{%
                     \if@twocolumn
              2242
              2243
                       \ifx\maketitle\relax
                         \section*{\abstractname}%
              2244
              2245
              2246
                          \global\setbox\@abstractbox\hbox\bgroup
                         \begin{minipage}[b]{\textwidth}
              2247
                           \small\parindent1\jsZw
              2248
                           \begin{center}%
              2249
              2250
                             2251
                           \end{center}%
```

2252

2253 2254

2255

2256

2257 2258

 $\left\{ \right\}$ 

\item\relax

\fi

\else

\listparindent\parindent

\itemindent \listparindent

\rightmargin \leftmargin}%

```
\small
2259
2260
         \begin{center}%
2261
           2262
         \end{center}%
         \left\{ \right\} 
2263
           \listparindent\parindent
2264
           \itemindent \listparindent
2265
2266
           \rightmargin \leftmargin}%
         \item\relax
2267
       \fi}{\if@twocolumn
2268
         \ifx\maketitle\relax
2269
         \else
2270
           \endlist\end{minipage}\egroup
2271
         \fi
2272
2273
       \else
2274
         \endlist
2275
       \fi}
2276 \fi
2277 %</article|report|slide>
2278 %<*jspf>
2279 \newbox\@abstractbox
2280 \newenvironment{abstract}{\%
2281
     \global\setbox\@abstractbox\hbox\bgroup
     2282
2283
       \small
2284
       \if@english \parindent6\jsc@mmm \else \parindent1\jsZw \fi}%
     {\end{minipage}\egroup}
2285
2286 %</jspf>
   bxjs@force@chapterabstract が真の場合は、abstract 環境を chapterabstract 環境と
 等価にする。
2287 %<*book|report>
2288 \ifbxjs@force@chapterabstract
     \let\abstract\chapterabstract
2290
     \let\endabstract\endchapterabstract
2291 \fi
2292 %</book|report>
```

# ■キーワード

2298 %

```
keywords キーワードを準備する環境です。実際の出力は \maketitle で行われます。
2293 %<*jspf>
2294 %\newbox\@keywordsbox
2295 %\newenvironment{keywords}{%
2296 % \global\setbox\@keywordsbox\hbox\bgroup
2297 % \begin{minipage}[b]{1570\jsc@mmm}{\sffamily Keywords:}\par
```

\small\parindent0\jsZw}%

```
2299 % {\end{minipage}\egroup} 2300 %</jspf>
```

#### ■verse 環境

verse 詩のための verse 環境です。

- 2301 \newenvironment{verse}{%
- 2302 \let \\=\@centercr
- 2303 \list{}{%
- 2304 \itemsep \z@
- 2305 \itemindent -2\jsZw % 元: -1.5em
- 2306 \listparindent\itemindent
- 2307 \rightmargin \z@
- 2308 \advance\leftmargin 2\jsZw}% 元: 1.5em
- 2309 \item\relax}{\endlist}

### ■quotation 環境

quotation 段落の頭の字下げ量を  $1.5 \mathrm{em}$  から \parindent に変えました。また、右マージンを 0 にしました。

- 2310 \newenvironment{quotation}{%
- 2311 \list{}{%
- 2312 \listparindent\parindent
- 2313 \itemindent\listparindent
- 2314 \rightmargin \z0}%
- 2315 \item\relax}{\endlist}

#### ■quote 環境

quote quote 環境は、段落がインデントされないことを除き、quotation 環境と同じです。

```
2316 \newenvironment{quote}%
```

2317  ${\left( \sum_{x\in \mathbb{Z}_{\infty}} \right) \in \mathbb{Z}_{\infty}}$ 

■定理など ltthm.dtx 参照。たとえば次のように定義します。

\newtheorem{definition}{定義} \newtheorem{axiom}{公理}

\newtheorem{theorem}{定理}

[2001-04-26] 定理の中はイタリック体になりましたが、これでは和文がゴシック体になってしまうので、 $\$ itshape を削除しました。

[2009-08-23] \bfseries を \headfont に直し、 \labelsep を 1zw にし、括弧を全角にしました。

- $2318 \ensuremath{\tt def\@begintheorem\#1\#2\{\trivlist\labelsep=1\jsZwaresetation{\tt def\@begintheorem\#1\#2\{\trivlist\labelsep=1\jsZwaresetation{\tt def\@begintheorem\#1\#2\{\trivlist\labelsep=1\jsZwaresetation{\tt def\@begintheorem\#1\#2\{\trivlist\aresetation{\tt def\@begintheorem\#1\#2}\}} \labelsep=1$
- 2319 \item[\hskip \labelsep{\headfont #1\ #2}]}
- 2320 \def\@opargbegintheorem#1#2#3{\trivlist\labelsep=1\jsZw
- 2321 \item[\hskip \labelsep{\headfont #1\ #2 (#3) }]}

titlepage タイトルを独立のページに出力するのに使われます。

[2017-02-24] コミュニティ版 pIATeX の標準クラス 2017/02/15 に合わせて,book クラス でタイトルを必ず奇数ページに送るようにしました。といっても,横組クラスしかありませんでしたので,従来の挙動は何も変わっていません。また,book 以外の場合のページ番号の リセットもコミュニティ版 pIATeX の標準クラス 2017/02/15 に合わせましたが,こちらも 片面印刷あるいは独立のタイトルページを作らないクラスばかりでしたので,従来の挙動は 何も変わらずに済みました。

```
2322 \newenvironment{titlepage}{%
2323 %<book>
               \pltx@cleartooddpage %% 2017-02-24
2324
        \if@twocolumn
2325
          \@restonecoltrue\onecolumn
2326
2327
          \@restonecolfalse\newpage
        \thispagestyle{empty}%
2329
        \ifodd\c@page\setcounter{page}\@ne\else\setcounter{page}\z@\fi %% 2017-02-
2330
    24
      }%
2331
      {\if@restonecol\twocolumn \else \newpage \fi
2332
2333
        \if@twoside\else
          \setcounter{page}\@ne
2334
2335
```

### ■付録

\appendix 本文と付録を分離するコマンドです。

```
2336 %<*!book&!report>
2337 \mbox{ \newcommand{\appendix}{\par}}
     \setcounter{section}{0}%
2339
      \setcounter{subsection}{0}%
      \gdef\presectionname{\appendixname}%
2340
      \gdef\postsectionname{}%
2342 % \gdef\thesection{\@Alph\c@section}% [2003-03-02]
      \gdef\thesection{\presectionname\@Alph\c@section\postsectionname}%
      \gdef\thesubsection{\@Alph\c@section.\@arabic\c@subsection}}
2345 %</!book&!report>
2346 %<*book|report>
2347 \newcommand{\appendix}{\par}
2348
      \setcounter{chapter}{0}%
2349
     \setcounter{section}{0}%
      \gdef\@chapapp{\appendixname}%
2350
      \gdef\@chappos{}%
      \gdef\thechapter{\@Alph\c@chapter}}
2353 %</book|report>
```

# 8.4 パラメータの設定

### ■array と tabular 環境

\arraycolsep array 環境の列間には \arraycolsep の 2 倍の幅の空きが入ります。 2354 \setlength\arraycolsep{5\p@?}

\tabcolsep tabular 環境の列間には \tabcolsep の 2 倍の幅の空きが入ります。 2355 \setlength\tabcolsep{6\p0?}

\arrayrulewidth array, tabular 環境内の罫線の幅です。

2356 \setlength\arrayrulewidth{.4\p0}

\doublerulesep array, tabular 環境での二重罫線間のアキです。 2357 \setlength\doublerulesep{2\p0}

### ■tabbing 環境

\tabbingsep \' コマンドで入るアキです。

2358 length labelsep

### ■minipage 環境

**Compfootins minipage** 環境の脚注の **\skip\Compfootins** は通常のページの **\skip\footins** と同じ働きをします。

2359 \skip\@mpfootins = \skip\footins

## ■framebox 環境

\fboxsep \fbox, \framebox で内側のテキストと枠との間の空きです。

\fboxrule \fbox, \framebox の罫線の幅です。

2360 \setlength\fboxsep{3\p0?} 2361 \setlength\fboxrule{.4\p0}

## ■equation と eqnarray 環境

\theequation 数式番号を出力するコマンドです。

2363 %<\*book|report>

2364 \@addtoreset{equation}{chapter}

2365 \renewcommand\theequation

2366 {\ifnum \c@chapter>\z@ \thechapter.\fi \@arabic\c@equation}

2367 %</book|report>

\jot eqnarray の行間に余分に入るアキです。デフォルトの値をコメントアウトして示しておきます。

2368 % \setlength\jot{3pt}

\@eqnnum 数式番号の形式です。デフォルトの値をコメントアウトして示しておきます。

\jsInhibitGlue (\theequation) \jsInhibitGlue のように和文かっこを使うことも 可能です。

2369 % \def\@eqnnum{(\theequation)}

amsmath パッケージを使う場合は \tagform@ を次のように修正します。

2370 % \def\tagform@#1{\maketag@@@{ (\ignorespaces#1\unskip\@@italiccorr) }}

## 8.5 フロート

タイプ TYPE のフロートオブジェクトを扱うには、次のマクロを定義します。

\fps@TYPE フロートを置く位置 (float placement specifier) です。

\ftype@TYPE フロートの番号です。2の累乗(1, 2, 4, ...)でなければなりません。

\ext@TYPE フロートの目次を出力するファイルの拡張子です。

\fnum@TYPE キャプション用の番号を生成するマクロです。

 $\mbox{\constraint}$  \Comakecaption $\mbox{\constraint}$   $\mbox{\const$ の生成する番号、〈text〉はキャプションのテキストです。テキストは適当な幅の \parbox に入ります。

### ■figure 環境

\c@figure 図番号のカウンタです。

\thefigure 図番号を出力するコマンドです。

2371 %<\*!book&!report>

2372 \newcounter{figure}

2373 \renewcommand \thefigure {\@arabic\c@figure}

2374 %</!book&!report>

2375 %<\*book|report>

2376 \newcounter{figure}[chapter]

2377 \renewcommand \thefigure

{\ifnum \c@chapter>\z@ \thechapter.\fi \@arabic\c@figure}

2379 %</book|report>

\fps@figure figure のパラメータです。\figurename の直後に ~ が入っていましたが,ここでは外し \ftype@figure ました。

\ext@figure 2380 \def\fps@figure{tbp}

 $\label{lem:condition} $$ \int_{2381 \left( \frac{1}{1} \right)^2} 2381 \left( \frac{2381 \left( \frac{1}{1} \right)^2}{2382 \left( \frac{1}{1} \right)^2} \right) def \left( \frac{1}{1} \right)^2} def \left( \frac{1}{1} \right)^2 def \left( \frac{1}{1} \right$ 

2383 \def\fnum@figure{\figurename\nobreak\thefigure}

figure \*形式は段抜きのフロートです。

figure \* 2384 \newenvironment{figure}%

{\@float{figure}}% 2385

{\end@float} 2386

```
2387 \newenvironment{figure*}%
           2388
                              {\@dblfloat{figure}}%
                              {\end@dblfloat}
           2389
             ■table 環境
    \c@table 表番号カウンタと表番号を出力するコマンドです。アスキー版では \thechapter. が
  \t \thetable \thechapter{} · になっていますが、ここではオリジナルのままにしています。
           2390 %<*!book&!report>
           2391 \newcounter{table}
           2392 \renewcommand\thetable{\@arabic\c@table}
           2393 %</!book&!report>
           2394 %<*book|report>
           2395 \newcounter{table}[chapter]
           2396 \mbox{ \lower} \text{renewcommand \thetable}
                    {\ifnum \c@chapter>\z@ \thechapter.\fi \@arabic\c@table}
           2398 %</book|report>
  \fps@table table のパラメータです。\tablename の直後に ~ が入っていましたが,ここでは外しま
\ftype@table した。
  \ext@table 2399 \def\fps@table{tbp}
\label{eq:condition} $$ \frac{2400 \ef\ftype@table{2}} $$ \end{table} $$
           2401 \def\ext@table{lot}
           2402 \ensuremath{$\ $$}\ensuremath{$}
```

table \* は段抜きのフロートです。

table \* 2403 \newenvironment{table}%

2407 {\@dblfloat{table}}% 2408 {\end@dblfloat}

## 8.6 キャプション

**\@makecaption** \caption コマンドにより呼び出され,実際にキャプションを出力するコマンドです。第 1 引数はフロートの番号,第 2 引数はテキストです。

\abovecaptionskip それぞれキャプションの前後に挿入されるスペースです。\belowcaptionskip が 0 になっ\belowcaptionskip ていましたので、キャプションを表の上につけた場合にキャプションと表がくっついてしまうのを直しました。

2409 \newlength\abovecaptionskip 2410 \newlength\belowcaptionskip

2411 \setlength\abovecaptionskip{5\p0?} %  $\vec{\pi}$ : 10\p0 2412 \setlength\belowcaptionskip{5\p0?} %  $\vec{\pi}$ : 0\p0

実際のキャプションを出力します。オリジナルと異なり、文字サイズを \small にし、キャプションの幅を 2 cm 狭くしました。

[2003-11-05] ロジックを少し変えてみました。

```
2413 %<*!jspf>
2414 % \long\def\@makecaption#1#2{{\small}
2415 %
                     \advance\leftskip 10\jsc@mmm
2416 %
                     \advance\rightskip 10\jsc@mmm
2417 %
                     \vskip\abovecaptionskip
                     \begin{tabular}{l} $$ \begin{tabular}{l} \begin{tabular}{l} $$ \begin{tabular}{l} \begin{tabular}{l}
2418 %
2419 %
                     \ifdim \wd\@tempboxa >\hsize
2420 %
                           #1\hskip1\jsZw\relax #2\par
2421 %
                     \else
2422 %
                           \global \@minipagefalse
2423 %
                           2424 %
                     \fi
2425 %
                     \vskip\belowcaptionskip}}
2426 \label{longdef} $$2426 \leq \label{longdef} $$2426 \end{small} $$
2427
                \advance\leftskip .0628\linewidth
2428
                \advance\rightskip .0628\linewidth
               \vskip\abovecaptionskip
2429
               \sbox\@tempboxa{#1\zwspace#2}%
                \ifdim \wd\@tempboxa <\hsize \centering \fi
2431
               #1\zwspace#2\par
2432
               \vskip\belowcaptionskip}}
2434 %</!jspf>
2435 %<*jspf>
2436 \long\def\@makecaption#1#2{%
                \vskip\abovecaptionskip
2438
                \sbox\@tempboxa{\small\sffamily #1\quad #2}%
               \ifdim \wd\@tempboxa >\hsize
2439
2440
                     {\small\sffamily
2441
                           \list{#1}{%
                                 \renewcommand{\makelabel}[1]{##1\hfil}
2442
2443
                                 \itemsep
                                                                 \z0
                                 \itemindent \z@
2444
2445
                                 \labelsep
                                                              \z@
2446
                                 \labelwidth 11\jsc@mmm
2447
                                 \listparindent\z@
                                 \leftmargin 11\jsc@mmm}\item\relax #2\endlist}
2448
2449
               \else
2450
                     \global \@minipagefalse
                     \hb@xt@\hsize{\hfil\box\@tempboxa\hfil}%
2452
               \vskip\belowcaptionskip}
2453
2454 %</jspf>
```

# 9 フォントコマンド

ここでは IATrX 2.09 で使われていたコマンドを定義します。これらはテキストモードと数 式モードのどちらでも動作します。これらは互換性のためのもので、できるだけ \text... と \math... を使ってください。

[2016-07-15] KOMA-Script 中の \scr@DeclareOldFontCommand に倣い、これらの命令 を使うときには警告を発することにしました。

[2016-07-16] 警告を最初の一回だけ発することにしました。また、例外的に警告を出さな いようにするスイッチも付けます。

\if@jsc@warnoldfontcmd

 ${\tt f@jsc@warnoldfontcmdexception}$ 

\if@jsc@warnoldfontcmd はBXJS クラスでは不使用。

\if@jsc@warnoldfontcmdexception は \allow/disallowoldfontcommands の状態 を表す。

```
2455 \newif\if@jsc@warnoldfontcmd
```

2456 \@jsc@warnoldfontcmdtrue

 $2457 \neq 150$ 

 $2458 \ensuremath{ \mbox{\sc 0}}$  \Ojsc \Owngress warnold font cmd exception false

#### \jsc@DeclareOldFontCommand

```
\g@addto@macro\bxjs@oldfontcmd@list{\do#1}%
      \DeclareOldFontCommand{#1}{%
2461
2462
        \bxjs@oldfontcmd{#1}#2%
     }{%
2463
2464
        \bxjs@oldfontcmd{#1}#3%
2465
```

2459 \newcommand\*{\jsc@DeclareOldFontCommand}[3]{%

}%

2466 }

2467 \DeclareRobustCommand\*{\jsc@warnoldfontcmd}[1]{%

\ClassInfo\bxjs@clsname

{Old font command '\string#1' is used!!\MessageBreak 2469

2470 The first occurrence is}%

2471 }

"二文字フォント命令"の使用を許可する(警告しない)。 \allowoldfontcommands

\disallowoldfontcommands

"二文字フォント命令"の使用に対して警告を出す。

2472 \newcommand\*{\allowoldfontcommands}{%

2473 \@jsc@warnoldfontcmdexceptiontrue}

2474 \newcommand\*{\disallowoldfontcommands}{%

\@jsc@warnoldfontcmdexceptionfalse}

※ 1.x 版では Warning ではなく Info に留めておく。

```
2476 \ \text{let}\ goldfontcmd@list\@empty
2477 \def\bxjs@oldfontcmd#1{%
     \expandafter\bxjs@oldfontcmd@a\csname bxjs@ofc/\string#1\endcsname#1}
2479 \def\bxjs@oldfontcmd@a#1#2{%
2480
     \if@jsc@warnoldfontcmdexception\else
       \global\@jsc@warnoldfontcmdfalse
2481
       \int x#1\relax
2482
2483
         \global\let#1=t%
         \jsc@warnoldfontcmd{#2}%
2484
2485
     fi
2487 \def\bxjs@warnoldfontcmd@final{%
      \global\let\bxjs@warnoldfontcmd@final\@empty
2489
2490
     \let\@tempa\@empty
2491
     \def\do##1{%
       \expandafter\ifx\csname bxjs@ofc/\string##1\endcsname\relax\else
2492
         \edef\@tempa{\@tempa \space\string##1}\fi}
2493
2494
     \bxjs@oldfontcmd@list
     \ifx\@tempa\@empty\else
2495
2496
       \ClassWarningNoLine\bxjs@clsname
         {Some old font commands were used in text\MessageBreak
2497
2498
          (see the log file for detail)}%
2499
       \ClassInfo\bxjs@clsname
        {Some old font commands were used in text:\MessageBreak
2500
         \space\@tempa\MessageBreak
2501
         You should note, that since 1994 LaTeX2e provides a\MessageBreak
2502
2503
         new font selection scheme called NFSS2 with several\MessageBreak
2504
         new, combinable font commands. The
2505
         class provides\MessageBreak
2506
         the old font commands
2507
         only for compatibility%
2508
         \@gobble}%
2509
     \fi}
 単純に \AtEndDocument のフックの中で \bxjs@warnoldfontcmd@final を実行した場
 合、最終ページのヘッダ・フッタの中にある二文字フォント命令はそれより後に実行される
 ため捕捉できない。これに対処するため、\end{document} 中に実行される \clearpage の
 処理の直後に \bxjs....final が呼ばれるようにする。
2510 \def\bxjs@warnoldfontcmd@kick@final{%
     \g@addto@macro\clearpage{\bxjs@warnoldfontcmd@final}}
2512 \AtEndDocument{\bxjs@warnoldfontcmd@kick@final}
```

\mc フォントファミリを変更します。

\tt

90

 $2516 \jsc@DeclareOldFontCommand \sf}{\normalfont\sffamily}{\mathsf} \\ 2517 \jsc@DeclareOldFontCommand \tt}{\normalfont\ttfamily}{\mathtt} \\$ 

\bf ボールドシリーズにします。通常のミーディアムシリーズに戻すコマンドは \mdseries です。

\it フォントシェイプを変えるコマンドです。斜体とスモールキャップスは数式中では何もしま \sl せん (警告メッセージを出力します)。通常のアップライト体に戻すコマンドは \upshape \sc です。

 $2519 \sc@DeclareOldFontCommand{\it}{\normalfont\itshape}{\mathit} $$2520 \jsc@DeclareOldFontCommand{\sl}{\normalfont\slshape}{\math\sl} $$2521 \jsc@DeclareOldFontCommand{\sc}{\normalfont\scshape}{\math\sc} $$$ 

\cal 数式モード以外では何もしません(警告を出します)。

# 10 相互参照

# 10.1 目次の類

\section コマンドは .toc ファイルに次のような行を出力します。

\contentsline{section}{タイトル}{ページ}

たとえば\section に見出し番号が付く場合,上の「タイトル」は

\numberline{番号}{見出し}

となります。この「番号」は \thesection コマンドで生成された見出し番号です。 figure 環境の \caption コマンドは .lof ファイルに次のような行を出力します。

\contentsline{figure}{\numberline{番号}{キャプション}{ページ}

この「番号」は \thefigure コマンドで生成された図番号です。 table 環境も同様です。

\contentsline{...} は \lo... というコマンドを実行するので, あらかじめ \lochapter, \location, \location などを定義しておかなければなりません。これらの多くは \cdottedtocline コマンドを使って定義します。これは

**\@dottedtocline{レベル}{インデント}{幅}{タイトル}{ページ}** 

という書式です。

レベル この値が tocdepth 以下のときだけ出力されます。\chapter はレベル 0, \section はレベル 1, 等々です。

インデント 左側の字下げ量です。

幅 「タイトル」に \numberline コマンドが含まれる場合, 節番号が入る箱の幅です。

\@pnumwidth ページ番号の入る箱の幅です。

\@tocrmarg 右マージンです。\@tocrmarg ≥ \@pnumwidth とします。

\@dotsep 点の間隔です (単位 mu)。

\c@tocdepth 目次ページに出力する見出しレベルです。元は article で 3, その他で 2 でしたが,ここでは一つずつ減らしています。

- 2524 \newcommand\@pnumwidth{1.55em}
- 2525 \newcommand\@tocrmarg{2.55em}
- $2526 \mbox{ newcommand} \mbox{@dotsep}{4.5}$
- 2527 %<!book&!report>\setcounter{tocdepth}{2}
- 2528 % <book | report > \setcounter { tocdepth } { 1 }

#### ■目次

\tableofcontents 目次を生成します。

\jsc@tocl@width [2013-12-30] \prechaptername などから見積もった目次のラベルの長さです。(by ts)

- 2529 \newdimen\jsc@tocl@width
- 2530 \newcommand{ $\hat{\}$
- 2531 %<\*book|report>
- $2533 \qquad \texttt{\settowidth\@tempdima{\headfont\appendixname}\%}$
- $\tt 2534 \verb| \fim\jsc@tocl@width<\@tempdima \setlength\jsc@tocl@width{\cmpdima}\fime of the context of the conte$
- 2536 \if@twocolumn
- 2537 \@restonecoltrue\onecolumn
- 2538 \else
- 2539 \@restonecolfalse
- 2540 \fi
- 2541 \chapter\*{\contentsname}%
- 2542  $\mathbb{\mbox{Qmkboth{\contentsname}}}$
- 2543 %</book|report>
- 2544 %<\*!book&!report>
- $2545 \qquad \texttt{\settowidth\jsc@tocl@width{\headfont\presectionname\postsectionname}} \%$
- 2546 \settowidth\@tempdima{\headfont\appendixname}%
- 2547 \ifdim\jsc@tocl@width<\@tempdima\relax\setlength\jsc@tocl@width{\@tempdima}\fi
- 2548 \ifdim\jsc@tocl@width<2\jsZw \divide\jsc@tocl@width by 2 \advance\jsc@tocl@width 1\jsZw\fi
- 2549 \section\*{\contentsname}%
- 2550 \@mkboth{\contentsname}{\contentsname}%
- 2551 %</!book&!report>
- 2552 \@starttoc{toc}%

2554 }

```
\1@part 部の目次です。
         2555 \newcommand*{\l@part}[2]{%
              \ifnum \c@tocdepth >-2\relax
                                \addpenalty\@secpenalty
         2557 %<!book&!report>
         2558 % < book | report >
                              \addpenalty{-\@highpenalty}%
                 \addvspace{2.25em \@plus\p@?}%
         2559
                 \begingroup
         2560
         2561
                   \parindent \z@
                   \@pnumwidth should be \@tocrmarg
         2562 %
         2563 %
                   \rightskip \@pnumwidth
         2564
                   \rightskip \@tocrmarg
         2565
                   \parfillskip -\rightskip
         2566
                   {\leavevmode
                     \large \headfont
         2567
         2568
                     \setlength\@lnumwidth{4\jsZw}%
         2569
                     #1\hfil \hb@xt@\@pnumwidth{\hss #2}}\par
                   \nobreak
         2570
         2571 %<book|report>
                              \global\@nobreaktrue
         2572 %<book|report>
                              \everypar{\global\@nobreakfalse\everypar{}}%
         2573
                 \endgroup
               fi
         2574
\lochapter 章の目次です。\@lnumwidth を 4.683zw に増やしました。
             [2013-12-30] \@lnumwidth を \jsc@tocl@width から決めるようにしてみました。(by
           ts)
         2575 %<*book|report>
         2576 \newcommand*{\l@chapter}[2]{%
               \ifnum \c@tocdepth >\m@ne
         2577
         2578
                 \addpenalty{-\@highpenalty}%
                 \addvspace{1.0em \@plus\p@?}
         2579
         2580 %
                 \vskip 1.0em \@plus\p@ % book.cls では↑がこうなっている
         2581
                 \begingroup
         2582
                   \parindent\z@
                   \rightskip\@pnumwidth
         2583 %
         2584
                   \rightskip\@tocrmarg
         2585
                   \parfillskip-\rightskip
         2586
                   \leavevmode\headfont
         2587 %
                   \% \in \mathbb{1}_{0.5}
                   \setlength\@lnumwidth{\jsc@tocl@width}\advance\@lnumwidth 2.683\jsZw
         2588
         2589
                   \advance\leftskip\@lnumwidth \hskip-\leftskip
         2590
                   1\ to 0\ to 0\ pnumwidth {\hss#2}\par
                   \penalty\@highpenalty
         2591
                 \endgroup
         2592
         2593
               \fi}
         2594 %</book|report>
\l0section 節の目次です。
         2595 %<*!book&!report>
```

```
2596 \newcommand*{\l@section}[2]{%
                2597
                      \ifnum \c@tocdepth >\z@
                        \addpenalty{\@secpenalty}%
                2598
                        \addvspace{1.0em \@plus\p@?}%
                2599
                2600
                        \begingroup
                2601
                          \parindent\z@
                          \rightskip\@pnumwidth
                2602 %
                2603
                          \rightskip\@tocrmarg
                          \parfillskip-\rightskip
                2604
                2605
                          \leavevmode\headfont
                          % \setlength\@lnumwidth{4\jsZw}% 元 1.5em [2003-03-02]
                2606 %
                2607
                          \setlength\@lnumwidth{\jsc@tocl@width}\advance\@lnumwidth 2\jsZw
                          \advance\leftskip\@lnumwidth \hskip-\leftskip
                2608
                          #1\nobreak\hfil\nobreak\hbox to\@pnumwidth{\hss#2}\par
                2609
                2610
                        \endgroup
                2611
                      \fi}
                2612 %</!book&!report>
                    インデントと幅はそれぞれ 1.5 \text{em}, 2.3 \text{em} でしたが、1 \text{zw}, 3.683 \text{zw} に変えました。
                2613 \% \verb|chook|| report> \% \texttt{\lambda} \{ \texttt{\lambda} \{ \texttt{\lambda} \} \{ \texttt{\lambda} \} \}
                    [2013-12-30] 上のインデントは \jsc@tocl@width から決めるようにしました。(by ts)
                 さらに下位レベルの目次項目の体裁です。あまり使ったことがありませんので、要修正かも
   \l@subsection
                  しれません。
\1@subsubsection
                    [2013-12-30] ここも \jsc@tocl@width から決めるようにしてみました。(by ts)
    \1@paragraph
\verb|\location| 2614 \%<*!book&!report>|
                2615 % \newcommand*{\l@subsection}
                                                    {\dotedtocline{2}{1.5em}{2.3em}}
                2616 % \newcommand*{\l@subsubsection}{\@dottedtocline{3}{3.8em}{3.2em}}
                2617 % \newcommand*{\l@paragraph}
                                                    {\cline{4}{7.0em}{4.1em}}
                2618 % \newcommand*{\l0subparagraph} {\0dottedtocline{5}{10em}{5em}}
                2619 %
                2620 % \newcommand*{\l@subsection}
                                                    {\@dottedtocline{2}{1zw}{3zw}}
                2621 % \newcommand*{\l@subsubsection}{\@dottedtocline{3}{2\jsZw}{3\jsZw}}
                2622 % \newcommand*{\l@paragraph}
                                                    {\@dottedtocline{4}{3\jsZw}{3\jsZw}}
                2623 % \newcommand*{\l@subparagraph} {\@dottedtocline{5}{4\jsZw}{3\jsZw}}
                2624 %
                2625 \newcommand*{\l@subsection}{%
                2626
                              \@tempdima\jsc@tocl@width \advance\@tempdima -1\jsZw
                              \@dottedtocline{2}{\@tempdima}{3\jsZw}}
                2628 \newcommand*{\l@subsubsection}{%
                              \@tempdima\jsc@tocl@width \advance\@tempdima 0\jsZw
                2629
                              \cline{3}{\cline{3}{\cline{4\jsZw}}}
                2630
                2631 \newcommand*{\l@paragraph}{%
                2632
                              \@tempdima\jsc@tocl@width \advance\@tempdima 1\jsZw
                              \cline{4}{\cline{5\jsZw}}
                2633
                2634 \newcommand*{\l@subparagraph}{%
                              \@tempdima\jsc@tocl@width \advance\@tempdima 2\jsZw
                2635
                              \@dottedtocline{5}{\@tempdima}{6\jsZw}}
                2636
```

```
2637 %</!book&!report>
                                           2638 %<*book|report>
                                           2639 % \newcommand*{\l@subsection}
                                                                                                                                                    {\cline{2}{3.8em}{3.2em}}
                                           2640 \% \mbox{\localine{3}{7.0em}{4.1em}}
                                           2641 % \newcommand*{\l@paragraph}
                                                                                                                                                    {\@dottedtocline{4}{10em}{5em}}
                                           2642 % \newcommand*{\l0subparagraph} {\0dottedtocline{5}{12em}{6em}}
                                           2643 \newcommand*{\l@section}{%
                                           2644
                                                                                    \@tempdima\jsc@tocl@width \advance\@tempdima -1\jsZw
                                                                                   \@dottedtocline{1}{\@tempdima}{3.683\jsZw}}
                                           2645
                                           2646 \newcommand*{\l@subsection}{%
                                                                                    \@tempdima\jsc@tocl@width \advance\@tempdima 2.683\jsZw
                                           2647
                                                                                    \cline{2}{\cline{3.5\jsZw}}
                                           2648
                                           2649 \newcommand*{\l@subsubsection}{%
                                                                                    \@tempdima\jsc@tocl@width \advance\@tempdima 6.183\jsZw
                                           2650
                                           2651
                                                                                    \cline{3}{\cline{3}}{\cline{3}}{\cline{3}}
                                           2652 \newcommand*{\l@paragraph}{%
                                                                                    2653
                                                                                    \verb|\dottedtocline{4}{\dottedtocline{4}}| $$ \dottedtocline{4} $$ \dotte
                                           2654
                                           2655 \newcommand*{\l@subparagraph}{%
                                                                                   \@tempdima\jsc@tocl@width \advance\@tempdima 16.183\jsZw
                                           2656
                                                                                    2658 %</book|report>
           \numberline 欧文版 LATFX では \numberline{...} は幅 \@tempdima の箱に左詰めで出力する命令で
           \@lnumwidth すが,アスキー版では \@tempdima の代わりに \@lnumwidth という変数で幅を決めるよう
                                                に再定義しています。後続文字が全角か半角かでスペースが変わらないように \hspace を
                                                 入れておきました。
                                           2659 \newdimen\@lnumwidth
                                           2660 \end{area} $$2660 \end{
\@dottedtocline IATFX 本体(ltsect.dtx 参照)での定義と同じですが, \@tempdima を \@lnumwidth に
                                                変えています。
                                           2661 \def\@dottedtocline#1#2#3#4#5{\ifnum #1>\c@tocdepth \else
                                                            \vskip \z@ \@plus.2\p@?
                                           2662
                                                             {\leftskip #2\relax \rightskip \@tocrmarg \parfillskip -\rightskip
                                           2663
                                           2664
                                                                  \parindent #2\relax\@afterindenttrue
                                           2665
                                                               \interlinepenalty\@M
                                                               \leavevmode
                                           2666
                                                                \@lnumwidth #3\relax
                                           2667
                                                                \advance\leftskip \@lnumwidth \null\nobreak\hskip -\leftskip
                                           2668
                                                                  {#4}\nobreak
                                           2669
                                                                  \label{leadershbox{m@th \mkern \@dotsep mu\hbox{.}\mkern \@dotsep} \\
                                           2670
                                                                           mu$}\hfill \nobreak\hb@xt@\@pnumwidth{%
                                           2671
                                                                                 \hfil\normalfont \normalcolor #5}\par}\fi}
                                           2672
```

## ■図目次と表目次

\listoffigures 図目次を出力します。

```
2673 \newcommand{\listoffigures}{%
                                     2674 %<*book|report>
                                     2676 \else\@restonecolfalse\fi
                                                     \chapter*{\listfigurename}%
                                     2678 \@mkboth{\listfigurename}{}%
                                     2679 %</book|report>
                                     2680 %<*!book&!report>
                                     2681 \section*{\listfigurename}%
                                     2682 \@mkboth{\listfigurename}{\listfigurename}%
                                     2683 %</!book&!report>
                                     2684 \@starttoc{lof}%
                                     2685 % <book | report > \if@restonecol\twocolumn\fi
                                     2686 }
          \logique 図目次の項目を出力します。
                                     2687 \end{4mu} \label{logicum} $$2687 \end{4mu} \end{4mu} \label{logicum} $$2687 \end{4mu} $$1\sZw} \end{4mu} \label{logicum} $$2687 \end{4mu} $$2687 \end{4m
\listoftables 表目次を出力します。
                                     2688 \newcommand{\listoftables}{%
                                     2689 %<*book|report>
                                     2690 \if@twocolumn\@restonecoltrue\onecolumn
                                     2691 \else\@restonecolfalse\fi
                                                     \chapter*{\listtablename}%
                                     2692
                                                   \@mkboth{\listtablename}{}%
                                     2693
                                     2694 %</book|report>
                                     2695 %<*!book&!report>
                                     2696 \section*{\listtablename}%
                                     2698 %</!book&!report>
                                     2699 \@starttoc{lot}%
                                     2700 % <book | report > \if@restonecol\twocolumn\fi
                                     2701 }
              \lotable 表目次は図目次と同じです。
                                     2702 \let\l@table\l@figure
```

## 10.2 参考文献

\bibindent オープンスタイルの参考文献で使うインデント幅です。元は 1.5em でした。

 $2703 \verb|\newdimen\bibindent|$ 

 $2704 \stlength\bibindent{2\jsZw}$ 

thebibliography 参考文献リストを出力します。

[2016-07-16] L $\Delta$ TeX 2.09 で使われていたフォントコマンドの警告を,文献スタイル(.bst)ではよく \bf がいまだに用いられることが多いため,thebibliography 環境内では例外的に出さないようにしました。

```
2711
                 \vspace{1.5\baselineskip}
                 \subsubsection*{\refname}\@mkboth{\refname}\%
                 \vspace{0.5\baselineskip}
            2714 %</kiyou>
            2715 % <book | report > \chapter * {\bibname} \@mkboth {\bibname} {} %
            2716 % <book | report > \addcontentsline {toc} {chapter} {\bibname} %
                  \list{\@biblabel{\@arabic\c@enumiv}}%
                      {\settowidth\labelwidth{\@biblabel{#1}}%
            2718
            2719
                       \leftmargin\labelwidth
            2720
                       \advance\leftmargin\labelsep
                       \@openbib@code
            2721
                       \usecounter{enumiv}%
            2723
                       \let\p@enumiv\@empty
                       \renewcommand\theenumiv{\@arabic\c@enumiv}}%
            2724
            2725 %<kiyou>
                         \small
            2726
                 \sloppy
            2727
                  \clubpenalty4000
            2728
                  \@clubpenalty\clubpenalty
            2729
                  \widowpenalty4000%
                 \sfcode`\.\@m}
            2730
                {\def\@noitemerr
            2731
            2732
                  {\@latex@warning{Empty `thebibliography' environment}}%
            2733
    \newblock \newblock はデフォルトでは小さなスペースを生成します。
            2734 \newcommand{\newblock}{\hskip .11em\@plus.33em\@minus.07em}
\@openbib@code \@openbib@code はデフォルトでは何もしません。この定義は openbib オプションによっ
             て変更されます。
            2735 \let\@openbib@code\@empty
   \@biblabel \bibitem[...] のラベルを作ります。ltbibl.dtx の定義の半角 [] を全角 [] に変え、余
             分なスペースが入らないように \jsInhibitGlue ではさみました。とりあえずコメントア
             ウトしておきますので,必要に応じて生かしてください。
            2736 % \def\@biblabel#1{\jsInhibitGlue [#1] \jsInhibitGlue}
       \cite 文献の番号を出力する部分は ltbibl.dtx で定義されていますが, コンマとかっこを和文
      \@cite フォントにするには次のようにします。とりあえずコメントアウトしておきましたので、必
      \@citex 要に応じて生かしてください。かっこの前後に入るグルーを \jsInhibitGlue で取ってい
             ますので、オリジナル同様、Knuth~\cite{knu}」のように半角空白で囲んでください。
            2737 % \def\@citex[#1]#2{\leavevmode
            2738 %
                 \let\@citea\@empty
```

2709 %<article|slide> \section\*{\refname}\@mkboth{\refname}{\refname}%

2705 \newenvironment{thebibliography}[1]{%

\@jsc@warnoldfontcmdexceptiontrue

\global\let\presectionname\relax
\global\let\postsectionname\relax

2706

2707

2710 %<\*kiyou>

```
2739 %
       \@cite{\@for\@citeb:=#2\do
2740 %
         {\@citea\def\@citea{, \inhibitglue\penalty\@m\ }%
2741 %
          \edef\@citeb{\expandafter\@firstofone\@citeb\@empty}%
2742 %
          \if@filesw\immediate\write\@auxout{\string\citation{\@citeb}}\fi
2743 %
          \@ifundefined{b@\@citeb}{\mbox{\normalfont\bfseries ?}%
2744 %
            \G@refundefinedtrue
2745 %
            \@latex@warning
2746 %
              {Citation `\@citeb' on page \thepage \space undefined}}%
2747 %
            {\@cite@ofmt{\csname b@\@citeb\endcsname}}}}{#1}}
2748 % \def\@cite#1#2{\jsInhibitGlue [{#1\if@tempswa , #2\fi}] \jsInhibitGlue}
   引用番号を上ツキの 1) のようなスタイルにするには次のようにします。\cite の先頭に
 \unskip を付けて先行のスペース(~も)を帳消しにしています。
2749 % \DeclareRobustCommand\cite{\unskip
       \@ifnextchar [{\@tempswatrue\@citex}{\@tempswafalse\@citex[]}}
2751 % \def\@cite#1#2{^{\hbox{\scriptsize}}#1\if@tempswa
2752 %
       , \jsInhibitGlue\ #2\fi}) }
```

### 10.3 索引

theindex  $2\sim3$  段組の索引を作成します。最後が偶数ページのときにマージンがずれる現象を直しました (Thanks: 藤村さん)。

```
2753 \newenvironment{theindex}{% 索引を3段組で出力する環境
        \if@twocolumn
2754
2755
          \onecolumn\@restonecolfalse
        \else
2756
          \clearpage\@restonecoltrue
2757
2758
        \fi
2759
        \columnseprule.4pt \columnsep 2\jsZw
        \ifx\multicols\@undefined
2761 %<book|report>
                         \twocolumn[\@makeschapterhead{\indexname}%
2762 % < book | report >
                         \addcontentsline{toc}{chapter}{\indexname}]%
2763 %<!book&!report>
                           \def\presectionname{}\def\postsectionname{}%
2764 %<!book&!report>
                           \twocolumn[\section*{\indexname}]%
2765
        \else
2766
          \ifdim\textwidth<\fullwidth
2767
            \setlength{\evensidemargin}{\oddsidemargin}
            \setlength{\textwidth}{\fullwidth}
2768
            \setlength{\linewidth}{\fullwidth}
2769
2770 %<book|report>
                           \begin{multicols}{3}[\chapter*{\indexname}%
2771 % < book | report >
                           \addcontentsline{toc}{chapter}{\indexname}]%
2772 %<!book&!report>
                             \def\presectionname{}\def\postsectionname{}%
                             \begin{multicols}{3}[\section*{\indexname}]%
2773 %<!book&!report>
2774
          \else
2775 %<book|report>
                           \begin{multicols}{2}[\chapter*{\indexname}%
2776 %<book|report>
                           \addcontentsline{toc}{chapter}{\indexname}]%
2777 %<!book&!report>
                             \def\presectionname{}\def\postsectionname{}%
2778 %<!book&!report>
                             \begin{multicols}{2}[\section*{\indexname}]%
```

```
\fi
                              2779
                              2780
                                                    \fi
                              2781 %<book|report>
                                                                                         \@mkboth{\indexname}{}%
                              2782 %<!book&!report>
                                                                                               \@mkboth{\indexname}{\indexname}%
                              2783
                                                    \plainifnotempty % \thispagestyle{plain}
                              2784
                                                   \parindent\z@
                                                    \parskip\z@ \@plus .3\p@?\relax
                              2785
                              2786
                                                    \let\item\@idxitem
                                                   \raggedright
                              2787
                                                   \footnotesize\narrowbaselines
                              2788
                              2789
                                                   \ifx\multicols\@undefined
                              2790
                                                         \if@restonecol\onecolumn\fi
                              2791
                                                   \else
                              2792
                              2793
                                                         \end{multicols}
                              2794
                                                   \fi
                              2795
                                                    \clearpage
                                             }
                              2796
     \@idxitem 索引項目の字下げ幅です。\@idxitem は \item の項目の字下げ幅です。
        \subitem 2797 \newcommand{\@idxitem}{\par\hangindent 4\jsZw} % 元 40pt
\subsubitem ^{2798} \rightarrow ^{2798} \rightarrow ^{2798} \rightarrow ^{2798} \rightarrow ^{2798} \%
                              2799 \newcommand{\subsubitem}{\@idxitem \hspace*{3\jsZw}} % 元 30pt
\indexspace 索引で先頭文字ごとのブロックの間に入るスペースです。
                              2800 \end{\command{\command{\command{\command{\command{\command{\command{\command{\command{\command{\command{\command{\command{\command{\command{\command{\command{\command{\command{\command{\command{\command{\command{\command{\command{\command{\command{\command{\command{\command{\command{\command{\command{\command{\command{\command{\command{\command{\command{\command{\command{\command{\command{\command{\command{\command{\command{\command{\command{\command{\command{\command{\command{\command{\command{\command{\command{\command{\command{\command{\command{\command{\command{\command{\command{\command{\command{\command{\command{\command{\command{\command{\command{\command{\command{\command{\command{\command{\command{\command{\command{\command{\command{\command{\command{\command{\command{\command{\command{\command{\command{\command{\command{\command{\command{\command{\command{\command{\command{\command{\command{\command{\command{\command{\command{\command{\command{\command{\command{\command{\command{\command{\command{\command{\command{\command{\command{\command{\command{\command{\command{\command{\command{\command{\command{\command{\command{\command{\command{\command{\command{\command{\command{\command{\command{\command{\command{\command{\command{\command{\command{\command{\command{\command{\command{\command{\command{\command{\command{\command{\command{\command{\command{\command{\command{\command{\command{\command{\command{\command{\command{\command{\command{\command{\command{\command{\command{\command{\command{\command{\command{\command{\command{\command{\command{\command{\command{\command{\command{\command{\command{\command{\command{\command{\command{\command{\command{\command{\command{\command{\command{\command{\command{\command{\command{\command{\command{\command{\command{\command{\command{\command{\command{\command{\command{\command{\command{\command{\command{\command{\command{\command{\command{\command{\command{\command{\command{\command{\command{\command{\command{\command{\command{\command{\command{\command{
        \seename 索引の \see, \seealso コマンドで出力されるものです。 デフォルトはそれぞれ see, see also
                                という英語ですが、ここではとりあえず両方とも「→」に変えました。⇒ ($\Rightarrow$)
     \alsoname
                                   などでもいいでしょう。
                              2801 \newcommand\seename{\if@english see\else \rightarrow\fi}
                              2802 \newcommand\alsoname{\if@english see also\else \rightarrow\fi}
```

# 10.4 脚注

\footnote 和文の句読点・閉じかっこ類の直後で用いた際に余分なアキが入るのを防ぐため, \footnotemark \inhibitglue を入れることにします。pLATFX の日付が 2016/09/03 より新しい場合は, このパッチが不要なのであてません。

> パッチの必要性は「\pltx@foot@penalty が未定義か」で行う。\inhibitglue の代わ りに \jsInhibitGlue を使う。

```
2803 \ifx\pltx@foot@penalty\@undefined
     \let\footnotes@ve=\footnote
2804
     \def\footnote{\jsInhibitGlue\footnotes@ve}
2805
     \let\footnotemarks@ve=\footnotemark
2806
```

2807 \def\footnotemark{\jsInhibitGlue\footnotemarks@ve} 2808 \fi

\@makefnmark 脚注番号を付ける命令です。ここでは脚注番号の前に記号 \* を付けています。「注 1」の形式に するには \textasteriskcentered を 注\kern0.1em にしてください。\@xfootnotenext と合わせて、もし脚注番号が空なら記号も出力しないようにしてあります。

[2002-04-09] インプリメントの仕方を変えたため消しました。

[2013-04-23] 新しい  $pT_{EX}$  では脚注番号のまわりにスペースが入りすぎることを防ぐため、北川さんのパッチ [qa:57090] を取り込みました。

[2013-05-14] plcore.ltx に倣った形に書き直しました (Thanks: 北川さん)。

[2016-07-11] コミュニティ版 pIATEX の変更に追随しました (Thanks: 角藤さん)。pIATEX の日付が 2016/04/17 より新しい場合は,このパッチが不要なのであてません。

pT<sub>F</sub>X 依存のコードなので、minimal 和文ドライバ実装に移動。

\thefootnote 脚注番号に\*印が付くようにしました。ただし、番号がゼロのときは\*印も脚注番号も付きません。

[2003-08-15] \textasteriskcentered ではフォントによって下がりすぎるので変更しました。

[2016-10-08] TODO: 脚注番号が newtxtext や newpxtext の使用時におかしくなってしまいます。これらのパッケージは内部で \thefootnote を再定義していますので、気になる場合はパッケージを読み込むときに defaultsups オプションを付けてください (qa:57284, qa:57287)。

2809 \def\thefootnote{\ifnum\c@footnote>\z@\leavevmode\lower.5ex\hbox{\*}\@arabic\c@footnote\fi} 「注 1」の形式にするには次のようにしてください。

2810 % \def\thefootnote{\ifnum\c@footnote>\z@ $\dot{a}$ \kern0.1\jsZw\@arabic\c@footnote\fi}

\footnoterule 本文と脚注の間の罫線です。

2811 \renewcommand{\footnoterule}{%

2812 \kern-2.6\p@? \kern-.4\p@

2813 \hrule width .4\columnwidth

2814 \kern 2.6\p@?}

\c@footnote 脚注番号は章ごとにリセットされます。

2815 %<book|report>\@addtoreset{footnote}{chapter}

**\@footnotetext** 脚注で **\verb** が使えるように改変してあります。Jeremy Gibbons, *T<sub>E</sub>X and TUG NEWS*, Vol. 2, No. 4 (1993), p. 9)

[2016-08-25] コミュニティ版 pI $\!\!$ ATEX の「閉じ括弧類の直後に\footnotetext が続く場合に改行が起きることがある問題に対処」と同等のコードを追加しました。

[2016-09-08] コミュニティ版 pIATeX のバグ修正に追随しました。

[2016-11-29] 古い pIATFX で使用された場合を考慮してコードを改良。

```
2816 \long\def\@footnotetext{%
             2817
                  \insert\footins\bgroup
             2818
                    \normalfont\footnotesize
                    \interlinepenalty\interfootnotelinepenalty
             2819
             2820
                    \splittopskip\footnotesep
                    \splitmaxdepth \dp\strutbox \floatingpenalty \@MM
             2821
                    \hsize\columnwidth \@parboxrestore
             2822
             2823
                    \protected@edef\@currentlabel{%
                      \csname p@footnote\endcsname\@thefnmark
             2824
             2825
                   }%
             2826
                    \color@begingroup
                     \@makefntext{%
             2827
                       \rule\z@\footnotesep\ignorespaces}%
             2828
                     \futurelet\next\fo@t}
             2829
             2830 \end{fo@t{\ifcat\bgroup\noexpand\next \let\next\f@@t}}
                                            \else \let\next\f@t\fi \next}
             2833 \left( \frac{41}{41}\right)
             2834 \end{color@endgroup} egroup
                  \ifx\pltx@foot@penalty\@undefined\else
             2835
             2836
                    \ifhmode\null\fi
                    2837
             2838
                     \penalty\pltx@foot@penalty
                     \pltx@foot@penalty\z@
             2839
                    \fi
             2840
                  \fi}
             2841
  \@makefntext 実際に脚注を出力する命令です。\@makefnmark は脚注の番号を出力する命令です。ここで
              は脚注が左端から一定距離に来るようにしてあります。
             2842 \newcommand\@makefntext[1]{%
                  \advance\leftskip 3\jsZw
             2843
             2844
                  \parindent 1\jsZw
                  \noindent
             2845
                  \llap{\@makefnmark\hskip0.3\jsZw}#1}
\@xfootnotenext 最初の \footnotetext{...} は番号が付きません。著者の所属などを脚注の欄に書くとき
              に便利です。
                すでに \footnote を使った後なら \footnotetext[0]{...} とすれば番号を付けない
              脚注になります。ただし、この場合は脚注番号がリセットされてしまうので、工夫が必要
              です。
                [2002-04-09] インプリメントの仕方を変えたため消しました。
             2847 % \def\@xfootnotenext[#1]{%
             2848 %
                   \begingroup
             2849 %
                      \lim 1>\z0
             2850 %
                        \csname c@\@mpfn\endcsname #1\relax
             2851 %
                        \unrestored@protected@xdef\@thefnmark{\thempfn}%
             2852 %
             2853 %
                        \unrestored@protected@xdef\@thefnmark{}%
```

2854 % \fi

2855 % \endgroup

2856 % \@footnotetext}

ここまでのコードは JS クラスを踏襲する。

# 11 段落の頭へのグルー挿入禁止

段落頭のかぎかっこなどを見かけ1字半下げから全角1字下げに直します。

\jsInhibitGlueAtParTop 「段落頭の括弧の空き補正」の処理を \jsInhibitGlueAtParTop という命令にして、これ を再定義可能にした。

2857 \let\jsInhibitGlueAtParTop\@empty

\everyparhook 全ての段落の冒頭で実行されるフック。これの初期値を先述の \jsInhibitGlueAtParTop とする。

 $2858 \verb|\def|| everyparhook{\jsInhibitGlueAtParTop}|$ 

2859 \ifnum\bxjs@everyparhook=\bxjs@everyparhook@compat

2860 \AtBeginDocument{\everypar{\everyparhook}}

 $2861\,\backslash\mathrm{fi}$ 

[2016-07-18] \inhibitglue の発行対象を \inhibitxspcode が 2 に設定されているものすべてに拡大しました。

[2016-12-01] すぐ上の変更で  $\ensuremath{^{\circ}}$  ( $\ensuremath{^{\circ}}$  でいたのがよくなかったので、プレフィックスを付けて  $\ensuremath{^{\circ}}$  ) jsc@tempa にしました (forum:2085)。

[2017-02-13] \jsc@tempa は実はテンポラリではなく「この処理専用のユニーク制御綴」である必要があります。間違って別の箇所で使う危険性が高いので、専用の命令 \jsc@ig@temp に置き換えました (Issue #54)。

次の \@inhibitglue は JS クラスでの \jsInhibitGlueAtParTop の実装である。エンジンが (u)platex の場合はこれを採用する。

 $2862 \ifx j\jsEngine$ 

2863 \def\@inhibitglue{%

 ${\tt 2864 } \verb| futurelet@let@token@@inhibitglue}|$ 

 $2865 \setminus begingroup$ 

 $2866 \left| \text{GDEF=} \right|$ 

 $2867 \verb|\label{CATCODE=\catcode|} \\$ 

2868 \let\ENDGROUP=\endgroup

2869 \CATCODE`k=12

2870 \CATCODE`a=12

```
2871 \CATCODE`n=12
2872 \CATCODE \ j=12
2873 \CATCODE`i=12
2874 \CATCODE`c=12
2875 \CATCODE h=12
2876 \CATCODE`r=12
2877 \CATCODE`t=12
2878 \CATCODE`e=12
2879 \GDEF\KANJI@CHARACTER{kanji character }
2880 \ENDGROUP
2881 \def\@@inhibitglue{%
              \expandafter\expandafter\jsc@inhibitglue\expandafter\meaning\expandafter\@let@to
2883 \verb| expandafter | terpandafter| sc@inhibitglue | expandafter | terpandafter| ter
              \def\jsc@ig@temp{#1}%
2884
             \ifx\jsc@ig@temp\@empty
2885
                   \ifnum\the\inhibitxspcode`#2=2\relax
2886
                       \inhibitglue
2887
2888
             fi
2889
2890 \fi
         ここからしばらく「(本物の) \everypar に追加した \everyparhook を保持する」ため
    のパッチ処理が続く。これは、everyparhook=compat の場合にのみ実行する。
2891 \ifnum\bxjs@everyparhook=\bxjs@everyparhook@compat
         これだけではいけないようです。あちこちに \everypar を初期化するコマンドが隠され
    ていました。
         まず,環境の直後の段落です。
         [2016-11-19] ltlists.dtx 2015/05/10 v1.0t の変更に追随して \clubpenalty のリセット
    を追加しました。
2892 \def\@doendpe{%
             \@endpetrue
2893
2894
              \def \par{%
2895
                  \@restorepar\clubpenalty\@clubpenalty\everypar{\everyparhook}\par\@endpefalse}%
2896
             \everypar{{\setbox\z@\lastbox}\everypar{\everyparhook}\@endpefalse\everyparhook}}
         [2017-08-31] minipage 環境にも対策します。
2897 \def\@setminipage{%
2898
             \@minipagetrue
2899
              \everypar{\@minipagefalse\everypar{\everyparhook}}%
2900 }
         \item 命令の直後です。
2901 \def\@item[#1]{%
             \if@noparitem
```

\@donoparitem

\else

2903 2904

```
\if@inlabel
2905
          \indent \par
2906
2907
2908
        \ifhmode
          \unskip\unskip \par
2909
        \fi
2910
        \if@newlist
2911
          \if@nobreak
2912
            \@nbitem
2913
2914
            \addpenalty\@beginparpenalty
2915
            \addvspace\@topsep
2916
2917
            \addvspace{-\parskip}%
          \fi
2918
2919
        \else
          \addpenalty\@itempenalty
2920
2921
          \addvspace\itemsep
2922
        \global\@inlabeltrue
2923
      \fi
2924
      \everypar{%
2925
        \@minipagefalse
2926
        \global\@newlistfalse
2927
        \if@inlabel
2928
          \global\@inlabelfalse
2929
2930
          \ifvoid\z@
2931
2932
             \kern-\itemindent
2933
           fi}%
2934
          \box\@labels
2935
          \penalty\z@
2936
        \fi
        \if@nobreak
2937
2938
          \@nobreakfalse
          \clubpenalty \@M
2939
2940
          \clubpenalty \@clubpenalty
2941
2942
          \everypar{\everyparhook}%
2943
        \fi
        \everyparhook}%
2944
      \if@noitemarg
2945
        \@noitemargfalse
2946
        \if@nmbrlist
2947
2948
          \refstepcounter\@listctr
        \fi
2949
2950
      \fi
      \sbox\@tempboxa{\makelabel{#1}}%
2951
2952
      \global\setbox\@labels\hbox{%
        \unhbox\@labels
2953
```

```
\hskip \itemindent
2954
        \hskip -\labelwidth
2955
2956
        \hskip -\labelsep
        \ifdim \wd\@tempboxa >\labelwidth
2957
          \box\@tempboxa
2958
        \else
2959
          \hbox to\labelwidth {\unhbox\@tempboxa}%
2960
2961
        \hskip \labelsep}%
2962
      \ignorespaces}
2963
```

二つ挿入した \everyparhook のうち後者が \section 類の直後に 2 回,前者が 3 回目以降に実行されます。

```
2964 \ensuremath{\mbox{def}\mbox{@afterheading}{\%}}
       \@nobreaktrue
       \everypar{%
2966
         \if@nobreak
2967
           \@nobreakfalse
2968
           \clubpenalty \@M
2969
2970
           \if@afterindent \else
              {\setbox\z@\lastbox}%
2971
2972
2973
         \else
2974
           \clubpenalty \@clubpenalty
           \everypar{\everyparhook}%
2975
2976
         \fi\everyparhook}}
```

「\everyparhook 用のパッチ処理」はここまで。

### 2977 \fi

\@gnewline についてはちょっと複雑な心境です。もともとの pIATEX  $2_{\varepsilon}$  は段落の頭にグルーが入る方で統一されていました。しかし \\ の直後にはグルーが入らず,不統一でした。そこで \\ の直後にもグルーを入れるように直していただいた経緯があります。しかし,ここでは逆にグルーを入れない方で統一したいので,また元に戻してしまいました。

しかし単に戻すだけでも駄目みたいなので、ここでも最後にグルーを消しておきます。

※ luatexja を読みこんだ場合に lltjcore.sty によって上書きされるのを防ぐため遅延させる。

```
2978 \ifnum\bxjs@everyparhook=\bxjs@everyparhook@none\else
2979 \AtEndOfPackage{%
2980 \def\@gnewline #1{%
2981 \ifvmode
2982 \@nolnerr
2983 \else
```

```
2984 \unskip \reserved@e {\reserved@f#1}\nobreak \hfil \break \null
2985 \jsInhibitGlue \ignorespaces
2986 \fi}
2987 }
```

# 12 いろいろなロゴ

IATeX 関連のロゴを作り直します。

[2016-07-14] ロゴの定義は jslogo パッケージに移転しました。後方互換のため, jsclasses ではデフォルトでこれを読み込みます。nojslogo オプションが指定されている場合は読み込みません。

BXJS クラスでも jslogo オプション指定の場合に jslogo パッケージを読み込むように した。ただし JS クラスと異なり、既定では読み込まない。

※ \小、\上小の制御綴は定義しない。

```
2989 \if@jslogo
      \IfFileExists{jslogo.sty}{%
2990
2991
        \RequirePackage{jslogo}%
2992
        \ClassWarningNoLine\bxjs@clsname
2993
         {The package 'jslogo' is not installed.\MessageBreak
2994
          It is included in the recent release of \MessageBreak
2995
2996
          the 'jsclasses' bundle}
2997 }
2998 \fi
```

# 13 amsmath との衝突の回避

# \ltx@ifnextchar \ProvidesFile

amsmath パッケージでは行列中で \@ifnextchar を再定義していますが、これが LATEX の \ProvidesFile で悪さをする例が FTeX で報告されています。これを避けるための tDB さんのフィックスを挿入しておきます。副作用がありましたらお知らせください。

この現象については私の TeX 掲示板 4273~、16058~ で議論がありました。なお、AMS 関係のパッケージを読み込む際に psamsfonts オプションを与えても回避できます (Thanks: しっぽ愛好家さん)。

[2016-11-19] 本家の ltclass.dtx 2004/01/28 v1.1g で修正されているのでコメントアウトしました。

```
2999 %\let\ltx@ifnextchar\@ifnextchar
3000 %\def\ProvidesFile#1{%
3001 % \begingroup
3002 % \catcode`\ 10 %
3003 % \ifnum \endlinechar<256 %
```

```
3004 % \ifnum \endlinechar>\m@ne
3005 % \catcode\endlinechar 10 %
3006 % \fi
3007 % \fi
3008 % \@makeother\/%
3009 % \@makeother\&%
3010 % \ltx@ifnextchar[{\@providesfile{#1}}{\@providesfile{#1}[]}}
```

# 14 初期設定

### ■いろいろな語

```
\prepartname
   \postpartname 3011 \newcommand{\prepartname}{\if@english Part~\else 第\fi}
\prechaptername 3012 \newcommand{\postpartname}{\if@english\else 部\fi}
                3013 %% sook|report>\newcommand{\prechaptername}{\if@english Chapter~\else 第\fi}
\postchaptername _{3014} %<book|report>\newcommand{\postchaptername}{\if@english\else 章\fi}
\presectionname 3015 \newcommand{\presectionname}{}% 第
\postsectionname ^{3016} \newcommand{\postsectionname}{}% 節
   \contentsname
\label{listfigurename} 3017 \end{\contentsname} {\contentsname} Contents \else 目次 fi
 \listtablename ^{3018} \newcommand{\listfigurename}{\\ if@english List of Figures\\ else 図目次\\ fi}
                3019 \newcommand{\listtablename}{\if@english List of Tables\else 表目次\fi}
        \refname
        \bibname 3020 \newcommand{\refname}{\if@english References\else 参考文献\fi}
      \indexname 3021 \newcommand{\bibname}{\if@english Bibliography\else 参考文献\fi}
                3022 \mbox{ newcommand{\indexname}{\if@english Index\else 索引\fi}
     \figurename
      \tablename 3023 %<!jspf>\newcommand{\figurename}{\if@english Fig.~\else 図\fi}
                3024 %<jspf>\newcommand{\figurename}{Fig.~}
                3025 %<!jspf>\newcommand{\tablename}{\if@english Table~\else 表\fi}
                3026 %<jspf>\newcommand{\tablename}{Table~}
   \appendixname
   \abstractname 3027 % \newcommand{\appendixname}{\if@english Appendix~\else 付録\fi}
                3028 \newcommand{\appendixname}{\if@english \else 付録\fi}
                3029 \%!book>\newcommand{\abstractname}{\if@english Abstract\else 概要\fi}
```

■今日の日付 IATEX で処理した日付を出力します。jarticle などと違って、標準を西暦にし、余分な空白が入らないように改良しました。和暦にするには \和暦 と書いてください。

環境変数 SOURCE\_DATE\_EPOCH\_TEX\_PRIMITIVES が設定されている場合は"今日"が過去の日付になる可能性があるが、その場合、和暦表記は平成2年(1990年)以降でのみサポートする。

```
\today
      3030 \@tempswafalse
      3031 \if p\jsEngine \@tempswatrue \fi
      3032 \if n\jsEngine \@tempswatrue \fi
      3033 \if@tempswa \expandafter\@firstoftwo
      3034 \else
                       \expandafter\@secondoftwo
      3035 \fi
      3036 {%
      3037 % 欧文 8bitTeX の場合
      3038 \newif\ifjsSeireki \jsSeirekitrue
      3039 \def\bxjs@decl@Seireki@cmds{%
      3040
            \def\西暦{\jsSeirekitrue}%
             \def\和暦{\jsSeirekifalse}}
      3042 \def\Seireki{\jsSeirekitrue}
      3043 \verb|\def|\Wareki{\jsSeirekifalse}|
      3044 \ensuremath{\mbox{def}\mbox{bxjs@if@use@seireki}}\xspace \ensuremath{\mbox{\%}}\xspace
            \ifjsSeireki \expandafter\@firstoftwo
      3046
            \else \expandafter\@secondoftwo \fi}
      3047 }{%
      3048 \newif\if 西暦 \西暦 true
      3049 \def\bxjs@decl@Seireki@cmds{%
            \def\西暦{\西暦 true}%
      3050
            \def\和暦{\西暦 false}}
      3052 \def\Seireki{\西暦 true}
      3053 \def\Wareki{\西暦 false}
      3054 \def\bxjs@if@use@seireki{%}
             \if 西暦 \expandafter\@firstoftwo
             \else \expandafter\@secondoftwo \fi}
      3056
      3057 }
      3058 \bxjs@decl@Seireki@cmds
      3059 % \bxjs@unxp
      3060 \let\bxjs@unxp\@firstofone
      3061 \bxjs@test@engine\unexpanded{\let\bxjs@unxp\unexpanded}
      3062 % \bxjs@iai
      3063\ \ \ \ T \if p\jsEngine T\else\if n\jsEngine T\else F\fi\fi T
           \def\bxjs@iai{\noexpand~}
      3065 \else \def\bxjs@iai{}
      3066 \fi
      3067 % \heisei
      3068 \newcount\heisei \heisei\year \advance\heisei-1988\relax
      3069 % \today
      3070 \edef\bxjs@today{%
            \if@english
      3071
      3072
               \ifcase\month\or
                 January\or February\or March\or April\or May\or June\or
      3073
                 July\or August\or September\or October\or November\or December\fi
      3074
```

```
3075
          \space\number\day, \number\year
3076
      \else
3077
        \ifnum\heisei>\@ne
          \expandafter\noexpand\expandafter\bxjs@if@use@seireki
3078
        \else \expandafter\@firstoftwo
3079
        \fi {%
3080
          \number\year\bxjs@iai\bxjs@unxp{年}%
3081
3082
          \bxjs@iai\number\month\bxjs@iai\bxjs@unxp{月}%
          \bxjs@iai\number\day\bxjs@iai\bxjs@unxp{∃}%
3083
3084
          \bxjs@unxp{平成}\bxjs@iai\number\heisei\bxjs@iai\bxjs@unxp{年}%
3085
          \bxjs@iai\number\month\bxjs@iai\bxjs@unxp{月}%
3086
          \bxjs@iai\number\day\bxjs@iai\bxjs@unxp{∃}%
3087
        }%
3088
3089
      \fi}
3090 \let\today\bxjs@today
```

texjporg 版の日本語用 Babel 定義ファイル(japanese.ldf)が読み込まれた場合に影響を受けないようにする。

```
3091 \AtBeginDocument{%
3092 \ifx\bbl@jpn@Seirekitrue\@undefined\else
3093 \bxjs@decl@Seireki@cmds
3094 \g@addto@macro\datejapanese{%
3095 \let\today\bxjs@today}%
3096 \fi}
```

**■ハイフネーション例外**  $T_EX$  のハイフネーションルールの補足です(ペンディング: eng-lish)

3097 \hyphenation{ado-be post-script ghost-script phe-nom-e-no-log-i-cal man-u-script}

#### ■ページ設定 ページ設定の初期化です。

```
3098 %<slide>\pagestyle{empty}%
3099 %<article|report>\pagestyle{plain}%
3100 % <book > \pagestyle {headings}%
3101 \pagenumbering{arabic}
3102 \if@twocolumn
3103
      \twocolumn
3104
      \sloppy
3105
      \flushbottom
3106 \else
      \onecolumn
3107
3108
      \raggedbottom
3109 \fi
3110 %<*slide>
```

```
{\tt 3111} \quad \verb|\renewcommand| family default{\tt \sfdefault}|
```

3112 \raggedright

3113 %</slide>

## ■BXJS 独自の追加処理 ※

和文ドライバのファイルを読み込む。

3114 \catcode`\?=12

3115 \ifx\bxjs@jadriver\relax\else

3116 \input{bxjsja-\bxjs@jadriver.def}

3117 \fi

最後に日本語文字のカテゴリコードを元に戻す。

3118 \bxjs@restore@jltrcc

3119 %</cls>

以上です。

# 付録 A 和文ドライバの仕様 湾

次の命令が BXJS クラス本体と和文ドライバの連携のために用意されている。このうち、 ★印を付けたものは"書込"が許されるものである。

• \jsDocClass [文字トークンの let] 文書クラスの種類を示し、次のいずれかと一致 する (\if で判定可能)。

\jsArticle bxjsarticle クラス

\jsBook bxjsbook クラス

\jsReport bxjsreport クラス

\jsSlide bxjsslide クラス

- \jsEngine [文字トークンの let] 使用されているエンジンの種別。(\if で判定 可能)。
  - p pdfT<sub>F</sub>X (DVI モードも含む)
  - 1  $\text{LuaT}_{FX}(")$
  - x X<sub>7</sub>T<sub>F</sub>X
  - j pT<sub>F</sub>X または upT<sub>F</sub>X
  - n 以上の何れでもない
- \ifjsWithupTeX [スイッチ] 使用されているエンジンが upTpX であるか。
- \ifjsWitheTeX [スイッチ] 使用されているエンジンが  $\varepsilon$ -TeX 拡張であるか。
- \ifjsInPdfMode [スイッチ] 使用されているエンジンが (pdfT<sub>E</sub>X・LuaT<sub>E</sub>X の) PDF モードであるか。
- \jsUnusualPtSize [整数定数を表す文字列のマクロ] 基底フォントサイズが 10pt、 11pt、12pt のいずれでもない場合の \@ptsize の値。(\@ptsize 自体があまり有用でないと思われる。)
- \jsScale [実数を表す文字列のマクロ] 和文フォントサイズの要求サイズに対する スケール。クラスオプション scale で指定される。(既定値は 0.924715。)
- \jsJaFont [マクロ] 和文フォント設定を表す文字列。クラスオプション jafont で指定された値。
- \jsJaParam [マクロ] 和文モジュールに渡すパラメタを表す文字列。この値が何を表すかは決まってなくて、各々の和文モジュールが独自に解釈する。クラスオプション japaram で指定された値。
- \jsInhibitGlue [マクロ] \inhibitglue という命令が定義されていればそれを 実行し、そうでなければ何もしない。JS クラスで \inhibitglue を用いている箇所 は全て \jsInhibitGlue に置き換えられている。従って、\inhibitglue は未定義 でも動作するが、その実装がある場合は BXJS クラスはそれを活用する。
- \jsInhibitGlueAtParTop [マクロ]★ 段落先頭におけるカギ括弧の位置調整を行うマクロ。全ての段落先頭で呼び出される。
- \jsZw [内部寸法値] 「現在の全角幅」を表す変数。JS クラスで zw 単位で設定されている長さパラメタはこの変数を単位として設定されている。この変数の値は実際に

用いられる「和文フォント」のメトリックに基づくのではなく、機械的に \jsScale  $\times$  (フォントサイズ) であると定められている(フォントサイズ変更の度に再設定される)。従って、「和文コンポーネント」はこの設定と辻褄が合うように和文フォントサイズを調整する必要がある。ほとんどの場合、和文フォントを NFSS で規定する際に \jsScale の値をスケール値として与えれば上手くいく。

- \jsFontSizeChanged [マクロ] フォントサイズが変更された時に必ず呼び出されるマクロ。
- \jsResetDimen [マクロ]★ 上記 \jsFontSizeChanged の中で呼び出される、ユーザ (和文モジュール) 用のフック。フォントサイズに依存するパラメタをここで設定することができる。既定の定義は空。

以下で標準で用意されている和文ドライバの実装を示す。

3120 %<\*drv>

# 付録 B 和文ドライバ: minimal 🕾

jadriver の指定が無い場合に適用されるドライバ。また、standard ドライバはまずこのドライバファイルを読み込んでいる。

このドライバでは、各エンジンについての必要最低限の処理だけを行っている。日本語処理のためのパッケージ(xeCJK や  $LuaT_EX$ -ja 等)を自分で読み込んで適切な設定を行うという使用状況を想定している。

ただし、 $(u)pT_EX$  エンジンについては例外で、和文処理機構の選択の余地がないため、このドライバにおいて、「JS クラスと同等の指定」を完成させるためのコードを記述する。

## B.1 補助マクロ

3121 %<\*minimal>

3122 %% このファイルは日本語文字を含みます

\DeclareJaTextFontCommand 和文書体のための、「余計なこと」をしない \DeclareTextFontCommand。

3123 \def\DeclareJaTextFontCommand#1#2{%

3124 \DeclareRobustCommand#1[1]{%

3125 \relax

3126 \ifmmode \expandafter\nfss@text \fi

3127 {#2##1}}%

3128 }

\DeclareJaMathFontCommand 和文数式フォントが無効な場合に、それをエミュレートするもの。

 ${\tt 3130} \quad \texttt{\ \ } \texttt{DeclareRobustCommand\#1[1]\{\%}$ 

3131 \relax

3133 \nfss@text{\fontfamily\familydefault

3134 \fontseries{m}\fontshape{n}\selectfont\relax

3135 #2##1}%

```
3136 }%
                3137 }
\bxjs@if@sf@default \familydefault の定義が "\sfdefault" である場合に引数のコードを実行する。
                3138 \long\def\bxjs@@CSsfdefault{\sfdefault}%
                3139 \@onlypreamble\bxjs@if@sf@default
                3140 \def\bxjs@if@sf@default#1{%
                      \ifx\familydefault\bxjs@@CSsfdefault#1\fi
                     \AtBeginDocument{%
                3142
                        \ifx\familydefault\bxjs@@CSsfdefault#1\fi}%
                3143
                3144 }
   \jsInverseScale \jsScale の逆数。
                  ※\CS=\jsInverseScale\CS は \bxjs@invscale\CS\jsScale よりも精度が劣るが処理
                3145 \@tempdima\p@ \bxjs@invscale\@tempdima\jsScale
                3146 \edef\jsInverseScale{\strip@pt\@tempdima}
    \jsLetHeadChar \jsLetHeadChar\CS{(トークン列)}: トークン列の先頭の文字を抽出し、\CS をその文
                  字トークン (に展開されるマクロ) として定義する。
                  ※先頭にあるのが制御綴やグループである場合は \CS は \relax に等置される。
                  ※文字トークンは"\the-文字列"のカテゴリコードをもつ。
                  ※非 Unicode エンジンの場合は文字列が UTF-8 で符号化されていると見なし、先頭が高位
                  バイトの場合は1文字分のバイト列(のトークン列)を抽出する。この場合は元のカテゴリ
                  コードが保持される。
                3147 \def\jsLetHeadChar#1#2{%}
                     \begingroup
                3148
                3149
                        \escapechar=`\\ %
                        \let\bxjs@tmpa={% brace-match-hack
                3150
                        \bxjs@let@hchar@exp#2}%
                3152
                     \endgroup
                3153 \let#1\bxjs@g@tmpa}
                3154 \def\bxjs@let@hchar@exp{%
                      \futurelet\@let@token\bxjs@let@hchar@exp@a}
                3156 \def\bxjs@let@hchar@exp@a{%
                      \bxjs@cond\ifcat\noexpand\@let@token\bgroup\fi{% 波括弧
                3157
                        \bxjs@let@hchar@out\let\relax
                3158
                     }{\bxjs@cond\ifcat\noexpand\@let@token\@sptoken\fi{% 空白
                       \bxjs@let@hchar@out\let\space%
                3160
                     }{\bxjs@cond\if\noexpand\@let@token\@backslashchar\fi{% バックスラッシュ
                3161
                       \bxjs@let@hchar@out\let\@backslashchar
                3162
                      }{\bxjs@let@hchar@exp@b}}}}
                3163
                3164 \def\bxjs@let@hchar@exp@b#1{%
                      \expandafter\bxjs@let@hchar@exp@c\string#1?\@nil#1}
                3166 \def\bxjs@let@hchar@exp@c#1#2\@nil{%
                3167 %\message{<#1#2>}%
```

3168 \bxjs@cond\if#1\@backslashchar\fi{% 制御綴

```
3169
        \bxjs@cond\expandafter\ifx\noexpand\@let@token\@let@token\fi{%
3170
          \bxjs@let@hchar@out\let\relax
3171
        }{%else
          \expandafter\bxjs@let@hchar@exp
3172
3173
3174
     }{%else
        \bxjs@let@hchar@chr#1%
3175
3176
3177 \def\bxjs@let@hchar@chr#1{%
      \bxjs@let@hchar@out\def{{#1}}}
3179 \def\bxjs@let@hchar@out#1#2{%
      \global#1\bxjs@g@tmpa#2\relax
      \toks@\bgroup}% skip to right brace
 UTF-8 のバイト列を扱うコード。
3182 \chardef\bxjs@let@hchar@csta=128
3183 \chardef\bxjs@let@hchar@cstb=192
3184 \chardef\bxjs@let@hchar@cstc=224
3185 \chardef\bxjs@let@hchar@cstd=240
3186 \chardef\bxjs@let@hchar@cste=248
3188 \def\bxjs@let@hchar@chr@ue#1{%
     \@tempcnta=`#1\relax
3190 %\message{\the\@tempcnta}%
      \bxjs@cond\ifnum\@tempcnta<\bxjs@let@hchar@csta\fi{%
        \bxjs@let@hchar@chr@ue@a#1%
3192
3193
     }{\bxjs@cond\ifnum\@tempcnta<\bxjs@let@hchar@cstb\fi{%
3194
        \bxjs@let@hchar@out\let\relax
     }{\bxjs@cond\ifnum\@tempcnta<\bxjs@let@hchar@cstc\fi{%
3195
3196
        \bxjs@let@hchar@chr@ue@b
     }{\bxjs@cond\ifnum\@tempcnta<\bxjs@let@hchar@cstd\fi{%
3197
        \bxjs@let@hchar@chr@ue@c
3198
      }{\bxjs@cond\ifnum\@tempcnta<\bxjs@let@hchar@cste\fi{%
        \bxjs@let@hchar@chr@ue@d
3200
3201
     }{%else
        \bxjs@let@hchar@out\let\relax
3202
     }}}}}
3203
3204 \def\bxjs@let@hchar@chr@ue@a#1{%
      \bxjs@let@hchar@out\def{{#1}}}
3206 \def\bxjs@let@hchar@chr@ue@b#1#2{%
      \bxjs@let@hchar@out\def{{#1#2}}}
3208 \ensuremath{\mbox{def}\mbox{bxjs@let@hchar@chr@ue@c#1#2#3{%}}
      \bxjs@let@hchar@out\def{{#1#2#3}}}
3210 \def\bxjs@let@hchar@chr@ue@d#1#2#3#4{%}
      \bxjs@let@hchar@out\\def{{#1#2#3#4}}}
```

## B.2 (u)pTFX 用の設定

#### 3212 \ifx j\jsEngine

基本的に、JS クラスのコードの中で、「和文コンポーネントの管轄」として BXJS クラス で除外されている部分に相当するが、若干の変更が加えられている。

■補助マクロ \jsLetHeadChar を和文文字トークンに対応させる。

```
3213 \def\bxjs@let@hchar@chr@pp#1{%
3214 \expandafter\bxjs@let@hchar@chr@pp@a\meaning#1\relax#1}
3215 \def\bxjs@let@hchar@chr@pp@a#1#2\relax#3{%
3216 %\message{(#1)}%
3217 \bxjs@cond\if#1t\fi{%
3218 \bxjs@let@hchar@chr@ue#3%
3219 }{%else
3220 \bxjs@let@hchar@out\def{{#3}}%
3221 }}
3222 \let\bxjs@let@hchar@chr\bxjs@let@hchar@chr@pp
```

**■エンジン**依存の定義 最初にエンジン( $pT_EX$  か  $upT_EX$  か)に依存する定義を行う。 \ifjsWithupTeX は BXJS において定義されているスイッチで、エンジンが  $upT_EX$  であるかを表す。

\jsc@JYn および \jsc@JTn は標準の和文横書きおよび縦書き用エンコーディングを表す。

```
3223 \edef\jsc@JYn{\ifjsWithupTeX JY2\else JY1\fi} 3224 \edef\jsc@JTn{\ifjsWithupTeX JT2\else JT1\fi} 3225 \edef\jsc@pfx@{\ifjsWithupTeX u\fi}
```

\bxjs@declarefontshape は標準の和文フォント宣言である。後で \bxjs@scale を求めるため一旦マクロにしておく。\bxjs@sizereference は全角幅を測定する時に参照するフォント

まず  $\operatorname{upT}_{EX}$  の場合の定義を示す。 $\operatorname{JS}$  クラスの  $\operatorname{uplatex}$  オプション指定時の定義と同じである。

```
3226 \@onlypreamble\bxjs@declarefontshape
3227 \ifjsWithupTeX
3228 \def\bxjs@declarefontshape{%
3229 \DeclareFontShape{JY2}{mc}{m}{n}{<->s*[\bxjs@scale]upjpnrm-h}{}%
3230 \DeclareFontShape{JY2}{gt}{m}{n}{<->s*[\bxjs@scale]upjpngt-h}{}%
3231 \DeclareFontShape{JT2}{mc}{m}{n}{<->s*[\bxjs@scale]upjpnrm-v}{}%
3232 \DeclareFontShape{JT2}{gt}{m}{n}{<->s*[\bxjs@scale]upjpngt-v}{}%
3233 }
3234 \def\bxjs@sizereference{upjisr-h}

pTEX の場合の定義を示す。JS クラスのフォント種別オプション非指定時の定義と同じである。
3235 \else
3236 \def\bxjs@declarefontshape{%
3237 \DeclareFontShape{JY1}{mc}{m}{n}{<->s*[\bxjs@scale]jis}{}%
```

3238 \DeclareFontShape{JY1}{gt}{m}{n}{<->s\*[\bxjs@scale]jisg}{}% 3239 \DeclareFontShape{JT1}{mc}{m}{n}{<->s\*[\bxjs@scale]tmin10}{}%

```
3240 \DeclareFontShape{JT1}{gt}{m}{n}{<->s*[\bxjs@scale]tgoth10}{}%
3241 }
3242 \def\bxjs@sizereference{jis}
3243 \fi
   既に使用されている標準和文フォント定義がもしあれば取り消す。
3244 \ef\bxjs@tmpa#1/#2/#3/#4/#5\relax{%}
3245 \ \def\bxjs@y{#5}}
3246 \ifjsWithpTeXng \def\bxjs@y{10}%
3247 \ensuremath{\setminus} else
3248 \expandafter\expandafter\bxjs@tmpa
3249 \expandafter\string\the\jfont\relax
3250 \fi
3251 \Ofor\bxjsOx:={\jscOJYn/mc/m/n,\jscOJYn/gt/m/n,%
3252
                 \jsc@JTn/mc/m/n,\jsc@JTn/gt/m/n}\do
     3253
3254
      \expandafter\let\csname\bxjs@x/\bxjs@y\endcsname=\@undefined}
```

■和文フォントスケールの補正 実は、 $pT_EX$  の標準的な和文フォント(JFM のこと、例えば jis)では、指定された \jsScale(この値を s とする)をそのまま使って定義すると期待通りの大きさにならない。これらの JFM では 1 zw の大きさが指定されたサイズではなく既にスケール(この値を f とする;jis では 0.962216 倍)が掛けられた値になっているからである。そのため、ここでは s/f を求めてその値をマクロ \bxjs@scale に保存する。

```
3255 \begingroup
3256 % 参照用フォント (\bxjs@sizereference) の全角空白の幅を取得
     \font\bxjs@tmpa=\bxjs@sizereference\space at 10pt
     3259 % 幅が丁度 10pt なら補正は不要
3260
    \ifdim\wd\z@=10pt
3261
       \global\let\bxjs@scale\jsScale
     \else
3263 % (10*s)/(10*f) として計算、\bxjs@invscale は BXJS で定義
       \edef\bxjs@tmpa{\strip@pt\wd\z@}
3264
3265
       \@tempdima=10pt \@tempdima=\jsScale\@tempdima
       \bxjs@invscale\@tempdima\bxjs@tmpa
3266
       \xdef\bxjs@scale{\strip@pt\@tempdima}
3267
3268
     \fi
3269 \endgroup
3270 %\typeout{\string\bxjs@scale : \bxjs@scale}
```

■和文フォント関連定義 \bxjs@scale が決まったので先に保存した標準和文フォント宣言を実行する。

```
フォント代替の明示的定義。
3272 \DeclareFontShape{\jsc@JYn}{mc}{m}{it}{<->ssub*mc/m/n}{}
3273 \DeclareFontShape{\jsc@JYn}{mc}{m}{sl}{<->ssub*mc/m/n}{}
3274 \DeclareFontShape{\jsc@JYn}{mc}{m}{sc}{<->ssub*mc/m/n}{}
```

3271 \bxjs@declarefontshape

```
3275 \ensuremath{\mbox{\sc QJYn}{gt}{m}{it}{<->ssub*gt/m/n}{}}
3278 \ensuremath{\texttt{NoclareFontShape}} \ensuremath{\texttt{Shape}} \ens
3279 \DeclareFontShape{\jsc@JTn}{mc}{m}{it}{<->ssub*mc/m/n}{}
3280 \end{areFontShape} \gray \gra
3281 \end{areFontShape} \gray \gra
3282 \ensuremath{\mbox{\sc QJTn}{gt}{m}{it}{<->ssub*gt/m/n}{}}
3283 \ensuremath{\mbox{\sc}}{\mbox{\sc}}{\mbox{\sc}}{\mbox{\sc}}{\mbox{\sc}}{\mbox{\sc}}{\mbox{\sc}}{\mbox{\sc}}{\mbox{\sc}}{\mbox{\sc}}{\mbox{\sc}}{\mbox{\sc}}{\mbox{\sc}}{\mbox{\sc}}{\mbox{\sc}}{\mbox{\sc}}{\mbox{\sc}}{\mbox{\sc}}{\mbox{\sc}}{\mbox{\sc}}{\mbox{\sc}}{\mbox{\sc}}{\mbox{\sc}}{\mbox{\sc}}{\mbox{\sc}}{\mbox{\sc}}{\mbox{\sc}}{\mbox{\sc}}{\mbox{\sc}}{\mbox{\sc}}{\mbox{\sc}}{\mbox{\sc}}{\mbox{\sc}}{\mbox{\sc}}{\mbox{\sc}}{\mbox{\sc}}{\mbox{\sc}}{\mbox{\sc}}{\mbox{\sc}}{\mbox{\sc}}{\mbox{\sc}}{\mbox{\sc}}{\mbox{\sc}}{\mbox{\sc}}{\mbox{\sc}}{\mbox{\sc}}{\mbox{\sc}}{\mbox{\sc}}{\mbox{\sc}}{\mbox{\sc}}{\mbox{\sc}}{\mbox{\sc}}{\mbox{\sc}}{\mbox{\sc}}{\mbox{\sc}}{\mbox{\sc}}{\mbox{\sc}}{\mbox{\sc}}{\mbox{\sc}}{\mbox{\sc}}{\mbox{\sc}}{\mbox{\sc}}{\mbox{\sc}}{\mbox{\sc}}{\mbox{\sc}}{\mbox{\sc}}{\mbox{\sc}}{\mbox{\sc}}{\mbox{\sc}}{\mbox{\sc}}{\mbox{\sc}}{\mbox{\sc}}{\mbox{\sc}}{\mbox{\sc}}{\mbox{\sc}}{\mbox{\sc}}{\mbox{\sc}}{\mbox{\sc}}{\mbox{\sc}}{\mbox{\sc}}{\mbox{\sc}}{\mbox{\sc}}{\mbox{\sc}}{\mbox{\sc}}{\mbox{\sc}}{\mbox{\sc}}{\mbox{\sc}}{\mbox{\sc}}{\mbox{\sc}}{\mbox{\sc}}{\mbox{\sc}}{\mbox{\sc}}{\mbox{\sc}}{\mbox{\sc}}{\mbox{\sc}}{\mbox{\sc}}{\mbox{\sc}}{\mbox{\sc}}{\mbox{\sc}}{\mbox{\sc}}{\mbox{\sc}}{\mbox{\sc}}{\mbox{\sc}}{\mbox{\sc}}{\mbox{\sc}}{\mbox{\sc}}{\mbox{\sc}}{\mbox{\sc}}{\mbox{\sc}}{\mbox{\sc}}{\mbox{\sc}}{\mbox{\sc}}{\mbox{\sc}}{\mbox{\sc}}{\mbox{\sc}}{\mbox{\sc}}{\mbox{\sc}}{\mbox{\sc}}{\mbox{\sc}}{\mbox{\sc}}{\mbox{\sc}}{\mbox{\sc}}{\mbox{\sc}}{\mbox{\sc}}{\mbox{\sc}}{\mbox{\sc}}{\mbox{\sc}}{\mbox{\sc}}{\mbox{\sc}}{\mbox{\sc}}{\mbox{\sc}}{\mbox{\sc}}{\mbox{\sc}}{\mbox{\sc}}{\mbox{\sc}}{\mbox{\sc}}{\mbox{\sc}}{\mbox{\sc}}{\mbox{\sc}}{\mbox{\sc}}{\mbox{\sc}}{\mbox{\sc}}{\mbox{\sc}}{\mbox{\sc}}{\mbox{\sc}}{\mbox{\sc}}{\mbox{\sc}}{\mbox{\sc}}{\mbox{\sc}}{\mbox{\sc}}{\mbox{\sc}}{\mbox{\sc}}{\mbox{\sc}}{\mbox{\sc}}{\mbox{\sc}}{\mbox{\sc}}{\mbox{\sc}}{\mbox{\sc}}{\mbox{\sc}}{\mbox{\sc}}{\mbox{\sc}}{\mbox{\sc}}{\mbox{\sc}}{\mbox{\sc}}{\mbox{\sc}}{\mbox{\sc}}{\mbox{\sc}}{\mbox{\sc}}{\mbox{\sc}}
3284 \ensuremath{\texttt{Noc}} fontShape{\jsc@JTn}{mc}{bx}{it}{<->ssub*gt/m/n}{}
3285 \ensuremath{\mbox{\mbox{$1$}}{c}} \ensuremath{\mbox{\mbox{\mbox{$1$}}}{c}} \ensuremath{\mbox{\mbox{$1$}}{c}} \ensuremath{\mbox{\mbox{$1$}}{c}} \ensuremath{\mbox{\mbox{$1$}}{c}} \ensuremath{\mbox{\mbox{$1$}}{c}} \ensuremath{\mbox{$1$}}{c} \ensuremath{\mbox{$
                             欧文総称フォント命令で和文フォントが連動するように修正する。その他の和文フォント
             関係の定義を行う。
3286 \DeclareRobustCommand\rmfamily
                                              {\not@math@alphabet\rmfamily\mathrm
3287
3288
                                                      \romanfamily\rmdefault\kanjifamily\mcdefault\selectfont}
3289 \DeclareRobustCommand\sffamily
                                             {\not@math@alphabet\sffamily\mathsf
3290
                                                      \romanfamily\sfdefault\kanjifamily\gtdefault\selectfont}
3291
3292 \DeclareRobustCommand\ttfamily
3293
                                            {\not@math@alphabet\ttfamily\mathtt
3294
                                                      \romanfamily\ttdefault\kanjifamily\gtdefault\selectfont}
3295\ \verb|\frac{1}{ifx} \ \ \verb|\frac{1}{ifx} \ \ \|\frac{1}{ifx} \ \ \|\frac{1}{ifx} \ \ \|\frac{1}{ifx
3296 \DeclareJaTextFontCommand{\textmc}{\mcfamily}
3297 \DeclareJaTextFontCommand{\textgt}{\gtfamily}
3298 \fi
3299 \bxjs@if@sf@default{%
                                       \renewcommand\kanjifamilydefault{\gtdefault}}
                             念のため。
3301 \setminus selectiont
              ■パラメタの設定
3302 \prebreakpenalty\jis"2147=10000
3303 \postbreakpenalty\jis"2148=10000
3304 \prebreakpenalty\jis"2149=10000
3305 \inhibitxspcode`!=1
3306 \inhibitxspcode \=2
3307 \xspcode \ += 3
3308 \times \%=3
                             "80~"FF の範囲の \spcode を 3 に変更。
3309 \@tempcnta="80 \@whilenum\@tempcnta<"100 \do{%
                                       \xspcode\@tempcnta=3\advance\@tempcnta\@ne}
                             \jsInhibitGlueAtParTop の定義。「JS クラスでの定義」を利用する。
3311 \let\jsInhibitGlueAtParTop\@inhibitglue
                             \jsResetDimen は空のままでよい。
```

**■組方向依存の処理** 組方向判定の if-トークン(\if?dir)は pTeX 以外では未定義である ため、そのまま if 文に入れることができない。これを回避するため部分的に!をエスケープ 文字に使う。

```
3312 \begingroup
3313 \catcode`\!=0

\bxjs@ptex@dir 現在の組方向: t=縦、y=横、?=その他。
3314 \gdef\bxjs@ptex@dir{%
3315 !iftdir t%
3316 !else!ifydir y%
3317 !else ?%
3318 !fi!fi}
```

新版の pT<sub>F</sub>X で脚注番号の周囲の空きが過大になる現象への対処。

※現在の pIATeX カーネルでは対処が既に行われている。ここでは、\@makefnmark の定義が古いものであった場合に、新しいものに置き換える。

```
3319 % 古い \@makefnmark の定義
3320 \long\def\bxjs@tmpa{\hbox{%
3321 !ifydir \@textsuperscript{\normalfont\@thefnmark}%
3322 !else\hbox{\yoko\@textsuperscript{\normalfont\@thefnmark}}!fi}}
3323 \ifx\@makefnmark\bxjs@tmpa
3324 \long\gdef\@makefnmark{%
3325 !ifydir \hbox{}\hbox{\@textsuperscript{\normalfont\@thefnmark}}\hbox{}%
3326 !else\hbox{\yoko\@textsuperscript{\normalfont\@thefnmark}}!fi}
3327 \fi
3328 \endgroup
```

## B.3 pdfT<sub>F</sub>X 用の処理

```
3329 \le ifx p\
3330 \let\bxjs@let@hchar@chr\bxjs@let@hchar@chr@ue
3331 \@onlypreamble\bxjs@cjk@loaded
3332 \def\bxjs@cjk@loaded{%
      \def\@footnotemark{%
3333
         \leavevmode
3334
         \ifhmode
3335
           \edef\@x@sf{\the\spacefactor}%
3336
           \label{lastkern} $$ \left( \sum_{x \in \mathbb{Z}_{0}} \left( \sum_{x \in \mathbb{Z}_{0}} \right) \right) $$
3337
3338
               \unkern\unkern
               \ifdim\lastskip>\z@ \unskip \fi
3339
           \fi\fi
3340
           \nobreak
3341
3342
         \fi
         \@makefnmark
3343
3344
         \ifhmode \spacefactor\@x@sf \fi
         \relax}%
3345
```

```
3346
                         \let\bxjs@cjk@loaded\relax
                    3347 }
                    3348 \AtBeginDocument{%
                         \@ifpackageloaded{CJK}{%
                    3349
                           \bxjs@cjk@loaded
                    3350
                         }{}%
                    3351
                    3352 }
                     B.4 X<sub>TF</sub>X 用の処理
                    3353 \else\ifx x\jsEngine
                       \bxjs@let@hchar@chr について、「BMP 外の文字の文字トークンに対して \string を
                     適用するとサロゲートペアに分解される」という問題に対する応急措置を施す。
                    3354 \def\bxjs@let@hchar@chr#1{%
                         \@tempcnta`#1\relax \divide\@tempcnta"800\relax
                    3355
                    3356
                         \bxjs@cond\ifnum\@tempcnta=27 \fi{%
                           \bxjs@let@hchar@chr@xe
                    3357
                         }{\bxjs@let@hchar@out\def{{#1}}}}
                    3358
                    3359 \def\bxjs@let@hchar@chr@xe#1{%
                         \c)=\t)
                         \lowercase{\bxjs@let@hchar@out\def{{0}}}}
 \bxjs@do@precisetext precisetext オプションの処理。
                    3362 \ifx\XeTeXgenerateactualtext\Qundefined\else
                         \def\bxjs@do@precisetext{%
                    3363
                    3364
                           \XeTeXgenerateactualtext=\@ne}
                    3365 \fi
\bxjs@do@simplejasetup simplejasetup オプションの処理。
                    3366 \@onlypreamble\bxjs@do@simplejasetup
                    3367 \def\bxjs@do@simplejasetup{%
                         \ifnum\XeTeXinterchartokenstate>\z@
                    3368
                         3369
                    3370
                           \jsSimpleJaSetup
                           \ClassInfo\bxjs@clsname
                    3371
                            {'\string\jsSimpleJaSetup' is applied\@gobble}%
                    3372
                    3373
                         \fi\fi}
     \jsSimpleJaSetup 日本語出力用の超簡易的な設定。
                    3374 \newcommand*{\jsSimpleJaSetup}{%
                         \XeTeXlinebreaklocale "ja"\relax
                    3375
                    3376
                         \XeTeXlinebreakskip=Opt plus 1pt minus 0.1pt\relax
                    3377
                         \XeTeXlinebreakpenalty=0\relax}
```

# B.5 後処理(エンジン共通)

3378 \fi\fi\fi

simplejasetup オプションの処理。

```
3379 \ifx\bxjs@do@simplejasetup\@undefined\else
3380
      \AtBeginDocument{%
        \ifbxjs@simplejasetup
3381
          \bxjs@do@simplejasetup
3382
        \fi}
3383
3384 \fi
   precisetext オプションの処理。
3385 \ifbxjs@precisetext
     \ifx\bxjs@do@precisetext\@undefined
        \ClassWarning\bxjs@clsname
3387
3388
         {The current engine does not supprt the\MessageBreak
          'precisetext' option\@gobble}
3389
3390
        \bxjs@do@precisetext
3391
3392
      \fi
3393 \fi
```

#### ■段落頭でのグルー挿入禁止

\bxjs@check@everyparhook 本体開始時において \everyparhook を検査して、"結局何もしない" ことになっている場合は、副作用を完全に無くすために \everyparhook を空にする。

```
3394 \@onlypreamble\bxjs@check@everyparhook
3395 \def\bxjs@check@everyparhook{%
3396 \ifx\jsInhibitGlueAtParTop\@empty
3397 \def\bxjs@tmpa{\jsInhibitGlueAtParTop}%
3398 \ifx\everyparhook\bxjs@tmpa
3399 \let\everyparhook\@empty
3400 \fi
3401 \fi}
3402 \AtBeginDocument{\bxjs@check@everyparhook}
```

everyparhook=modern の場合の、\everyparhook の有効化の実装。

※本体開始時ではなく最初から有効化していることに注意。

 $3403 \verb|\ifnum\bxjs@everyparhook=\bxjs@everyparhook@modern|$ 

まず \everypar を "乗っ取る" 処理を行う。

```
3404 \let\bxjs@everypar\everypar
```

3405 \newtoks\everypar

3406 \everypar\bxjs@everypar

そして本物の \everypar では、最後で常に \everyparhook が実行されるようにする。

3407 \bxjs@everypar{\the\expandafter\everypar\everyparhook}% 3408 \fi

- ■fancyhdr 対策 fancyhdr オプションの値が true であり、かつ fancyhdr が使用された場合に以下の対策を行う。
  - デフォルトの書式設定に含まれる"二文字フォント命令"を除去する。
  - bxjsbook において、ヘッダ・フッタの横幅を \fullwidth に変える。

#### 3409 \ifbxjs@fancyhdr

\bxjs@adjust@fancyhdr fancyhdr の初期設定に関する改変の処理。fancyhdr 読込完了と \pagestyle{fancy} 実 行の間で実行されるべき。 3410 \@onlypreamble\bxjs@adjust@fancyhdr 3411 \def\bxjs@adjust@fancyhdr{% ヘッダ・フッタの要素の書式について、それが既定のままであれば、"二文字フォント命令" を除去したものに置き換える。 ※和文なので \sl は無い方がよいはず。 3413 \def\bxjs@tmpb{\fancvplain{}{\rightmark}\strut}% \ifx\f@ncyelh\bxjs@tmpa \global\let\f@ncyelh\bxjs@tmpb \fi 3414 \ifx\f@ncyerh\bxjs@tmpa \global\let\f@ncyerh\bxjs@tmpb \fi 3415 \ifx\f@ncyolh\bxjs@tmpa \global\let\f@ncyolh\bxjs@tmpb \fi 3416 3417 \ifx\f@ncyorh\bxjs@tmpa \global\let\f@ncyorh\bxjs@tmpb \fi \def\bxjs@tmpa{\fancyplain{}{\sl\leftmark}\strut}% 3418 3419 \def\bxjs@tmpb{\fancyplain{}{\leftmark}\strut}% \ifx\f@ncyelh\bxjs@tmpa \global\let\f@ncyelh\bxjs@tmpb \fi 3420 \ifx\f@ncyerh\bxjs@tmpa \global\let\f@ncyerh\bxjs@tmpb \fi 3421 3422 \ifx\f@ncyolh\bxjs@tmpa \global\let\f@ncyolh\bxjs@tmpb \fi \ifx\f@ncyorh\bxjs@tmpa \global\let\f@ncyorh\bxjs@tmpb \fi 3423 \def\bxjs@tmpa{\rm\thepage\strut}% \def\bxjs@tmpb{\thepage\strut}% 3425 3426 \ifx\f@ncyecf\bxjs@tmpa \global\let\f@ncyecf\bxjs@tmpb \fi \ifx\f@ncyocf\bxjs@tmpa \global\let\f@ncyocf\bxjs@tmpb \fi \fullwidth が(定義済で)\textwidth よりも大きい場合、ヘッダ・フッタの横幅を \fullwidth に合わせる。 3428 \ifx\fullwidth\@undefined\else \ifdim\textwidth<\fullwidth \setlength{\@tempdima}{\fullwidth-\textwidth}% 3429 3430 \edef\bxjs@tmpa{\noexpand\fancyhfoffset[EL,OR]{\the\@tempdima}% }\bxjs@tmpa 3431 \fi\fi 3432 \PackageInfo\bxjs@clsname {Patch to fancyhdr is applied\@gobble}} 3434 \bxjs@pagestyle@hook \pagestyle へのフックの本体。 3435 \def\bxjs@pagestyle@hook{% \@ifpackageloaded{fancyhdr}{% 3436 \bxjs@adjust@fancyhdr 3437 \global\let\bxjs@adjust@fancyhdr\relax 3438

\pagestyle にフックを入れ込む。

3440 \let\bxjs@org@pagestyle\pagestyle

3441 \def\pagestyle{%

}{}}

3439

\bxjs@pagestyle@hook \bxjs@org@pagestyle}

```
begin-document フック。
             ※これ以降に fancyhdr が読み込まれることはあり得ない。
           3443 \AtBeginDocument{%
           3444 \bxjs@pagestyle@hook
                 \global\let\bxjs@pagestyle@hook\relax}
             ■和文空白命令
           3446 \ifbxjs@jaspace@cmd
 \jaenspace 半角幅の水平空き。
           3447 \ \def \jaenspace {\hskip.5\jsZw\relax}
\jathinspace 和欧文間空白を入れるユーザ命令。
             ※ minimal ではダミー定義。
                 \def\jathinspace{\hskip\z@skip}
        \_ 全角空白文字 1 つからなる名前の制御綴。\zwspace と等価になる。
           3449 \ \ensuremath{\texttt{def}} \ \ensuremath{\texttt{\sc t}}
   \jaspace jlreq クラスと互換の命令。
           3450
                 \DeclareRobustCommand*{\jaspace}[1]{%
                   \verb|\expandafter\ifx\csname| bxjs@jaspace@@#1\endcsname\relax| \\
           3451
           3452
                     \ClassError\bxjs@clsname
                      {Unknown jaspace: #1}{\@eha}%
           3453
           3454
                   \else
                     \csname bxjs@jaspace@@#1\endcsname
           3455
                   \fi}
           3456
           3457
                 \def\bxjs@jaspace@@zenkaku{\hskip 1\jsZw\relax}
                 \def\bxjs@jaspace@@nibu{\hskip .5\jsZw\relax}
           3458
                 \def\bxjs@jaspace@@shibu{\hskip .25\jsZw\relax}
           3460 \fi
               終わり。
           3461 \fi
               以上で終わり。
           3462 %</minimal>
```

# 付録 C 和文ドライバ: standard 🕸

標準のドライバ。

- \rmfamily/\sffamily/\ttfamily での和文ファミリ連動
- \mcfamily/\gtfamily
- \textmc/\textgt
- \zw

- \jQ/\jH
- \trueQ/\trueH/\ascQ
- \setkanjiskip/\getkanjiskip
- \setxkanjiskip/\getxkanjiskip
- \autospacing/\noautospacing
- \autoxspacing/\noautoxspacing

■和文フォント指定の扱い standard 和文ドライバでは \jsJaFont の値を和文フォントの "プリセット" の指定として用いる。プリセットの値は、 $T_{EX}$  Live の kanji-configupdmap コマンドで使う "ファミリ"と同じにすることを想定する。特別な値として、autoは kanji-config-updmap で現在指定されているファミリを表す。

# C.1 共通処理 (1)

まず minimal ドライバを読み込む。

3463 %<\*standard>

3464 %% このファイルは日本語文字を含みます

3465 \input{bxjsja-minimal.def}

simplejasetup は standard では無効になる。

3466 \bxjs@simplejasetupfalse

■japaram オプションの処理 japaram の値を key-value リストとして解釈する。keyval のファミリは bxjsStd とする。

\bxjs@jp@jismmiv 2004JIS 字形を優先させるか。

3467 \newif\ifbxjs@jp@jismmiv

jis2004 オプションの処理。

 $3468 \verb|\bxjs@cslet{bxjs@kv@jis2004@true}\bxjs@jp@jismmivtrue| \\$ 

 $3469 \verb|\bxjs@cslet{bxjs@kv@jis2004@false}\bxjs@jp@jismmivfalse| \\$ 

 $3470 \ensuremath{ \mbox{\sc define@key{bxjsStd}{jis2004}[true]{%} } \$ 

 $3471 \quad \texttt{\bxjs@set@keyval{jis2004}{\#1}{}}$ 

\bxjs@jp@font フォントパッケージの追加オプション。

 $3472 \ \text{let}\ \text{bxjs@jp@font}\ \text{empty}$ 

jis2004 オプションの処理。

3473 \define@key{bxjsStd}{font}{%

3474 \edef\bxjs@jp@font{#1}}

実際の japaram の値を適用する。

 $3475 \ensuremath{$\def\bxjs@next\#1{\bxjs@safe@setkeys{bxjsStd}{\#1}}}$ 

 $3476 \exp \text{dafter}$ 

■jis2004 パラメタ jis2004 パラメタが有効の場合は、グローバルオプションに jis2004 を追加する。

※ otf や luatexja-preset 等のパッケージがこのオプションを利用する。

3477 \ifbxjs@jp@jismmiv

3478 \g@addto@macro\@classoptionslist{,jis2004}

3479 % \@ifpackagewith 判定への対策

3480 \PassOptionsToPackage{jis2004}{otf}

3481 \fi

 $3482 \ifjsWitheTeX$ 

使える場合は、「\dimexpr外部寸法表記\relax」の形式(これは内部値なので単位として使える)で各命令定義する。

 $\j$ Q  $\j$ Q と  $\j$ H はともに  $0.25\,\mathrm{mm}$  に等しい。

\jH3483 \@tempdima=0.25mm

3484 \protected\edef\jQ{\dimexpr\the\@tempdima\relax}

 $3485 \left| \text{let} \right| JQ$ 

\trueQ \trueQ と \trueH はともに 0.25 true mm に等しい。

\trueH3486 \ifjsc@mag

3487 \@tempdimb=\jsBaseFontSize\relax

3488 \edef\bxjs@tmpa{\strip@pt\@tempdimb}%

3489 \@tempdima=2.5mm

3490 \bxjs@invscale\@tempdima\bxjs@tmpa

 $3491 \qquad \texttt{\protected\edef\trueQ{\dimexpr\the\cupdima\relax}}$ 

3492 \@tempdima=10pt

3493 \bxjs@invscale\@tempdima\bxjs@tmpa

3494 \protected\edef\bxjs@truept{\dimexpr\the\@tempdima\relax}

3495 \else \let\trueQ\jQ \let\bxjs@truept\p@

3496 \fi

3497 \let\trueH\trueQ

\ascQ \ascQ は \trueQ を和文スケール値で割った値。例えば、\fontsize{12\ascQ}{16\trueH} \ascpt とすると、和文が 12Q になる。

同様に、\ascpt は truept を和文スケールで割った値。

3498 \Otempdima\trueQ \bxjsOinvscale\Otempdima\jsScale

 $3499 \quad \texttt{\protected\edef\ascQ{\dimexpr\the\dempdima\relax}}$ 

 ${\tt 3500} \qquad \verb{\tt \footnote{0}tempdima\fisScale} \\ {\tt \footnote{0}t$ 

 $3501 \verb| \protected\edef\ascpt{\dimexpr\the\0tempdima\relax}|$ 

3502 \fi

\jsSetQHLength \jsSetQHLength\CS{〈長さ式〉}: \setlength の変種で、通常の calc の長さ式の代わりに、〈実数〉Q・〈実数〉H・〈実数〉trueQ・〈実数〉trueH が記述できる。

3503 \def\jsSetQHLength#1#2{%

```
\begingroup
            3505
                   \bxjs@parse@qh{#2}%
                   \ifx\bxjs@tmpb\relax \setlength\@tempdima{#2}%
            3506
                   \else \@tempdima\bxjs@tmpb\relax
            3507
            3508
                   \xdef\bxjs@g@tmpa{\the\@tempdima}%
            3509
            3510
                  \endgroup
            3511
                  #1=\bxjs@g@tmpa\relax}
\bxjs@parse@qh jsSetQHLength の下請け。#1 が Q/H/trueQ/trueH で終わる場合、\bxjs@tmpb にそれに
              等しい寸法の表現を返す。それ以外では、\bxjs@tmpb は \relax になる。
            3512 \if j\jsEngine
              (u)pIATFX ではこの処理は不要なので無効化する。
            3513 \def\bxjs@parse@qh#1{%
            3514
                 \let\bxjs@tmpb\relax}
            3515 \else
            3516 \def\bxjs@parse@qh#1{%}
                 \def\bxjs@tmpa{#1}\let\bxjs@tmpb\relax
            3518
                 \bxjs@parse@qh@a{trueQ}\trueQ
            3519
                 \bxjs@parse@qh@a{trueH}\trueH
            3520
                 \bxjs@parse@qh@a{Q}\jQ
                 \bxjs@parse@qh@a{H}\jH}
            3522 \def\bxjs@parse@qh@a#1#2{%
                 \ifx\bxjs@tmpb\relax
            3523
            3524
                   3525
                   \expandafter\bxjs@next\bxjs@tmpa\@nil#1\@nil\@nnil{#2}%
                 \fi}
            3526
            3527 \def\bxjs@parse@qh@b#1#2#3{%
                 \ifx\@nnil#2\@nnil\else \def\bxjs@tmpb{#1#3}\fi}
            3529 \fi
  \jafontsize \jafontsize{⟨フォントサイズ⟩}{⟨行送り⟩}: 和文フォント規準で、すなわち、1 zw が ⟨
              フォントサイズ〉に等しくなるようにフォントサイズを指定する。この命令の引数では、Q/H
              の単位が使用できる。
            3530 \def \jafontsize#1#2{%}
            3531
                 \begingroup
            3532
                   \bxjs@jafontsize@a{#1}%
            3533
                   \@tempdimb\jsInverseScale\@tempdima
            3534
                   \bxjs@jafontsize@a{#2}%
                   \xdef\bxjs@g@tmpa{%
            3535
                     \noexpand\fontsize{\the\@tempdimb}{\the\@tempdima}}%
            3536
            3537
                  \endgroup\bxjs@g@tmpa}
            3538 \def\bxjs@jafontsize@a#1{%
                 \bxjs@parse@qh{#1}%
                 \ifx\bxjs@tmpb\relax \def\bxjs@tmpb{#1}\fi
            3540
                 \@defaultunits\@tempdima\bxjs@tmpb pt\relax\@nnil}
            3541
                続いて、和文間空白・和欧文間空白関連の命令を実装する。(エンジン依存のコード。)
```

```
3542 \def\bxjs@kanjiskip{0pt}
                           \setkanjiskip 和文間空白の量を設定する。
                                                       3543 \newcommand*\setkanjiskip[1]{%
                                                                    \edef\bxjs@kanjiskip{#1}%
                                                       3545
                                                                    \bxjs@reset@kanjiskip}
                           \getkanjiskip 和文間空白の量を表すテキストに展開する。
                                                       3546 \newcommand*\getkanjiskip{%
                                                                    \bxjs@kanjiskip}
  \ifbxjs@kanjiskip@enabled 和文間空白の挿入が有効か。ただし pTFX では自身の \(no)autospacing での制御を用い
                                                            るのでこの変数は常に真とする。
                                                       3548 \newif\ifbxjs@kanjiskip@enabled \bxjs@kanjiskip@enabledtrue
        \bxjs@enable@kanjiskip 和文間空白の挿入を有効/無効にする。(pTrX 以外)
      \verb|\bxjs@disable@kanjiskip| 3549 \verb|\bxjs@robust@def\bxjs@enable@kanjiskip| \% |
                                                                    \bxjs@kanjiskip@enabledtrue
                                                       3550
                                                       3551
                                                                    \bxjs@reset@kanjiskip}
                                                       3552 \bxjs@robust@def\bxjs@disable@kanjiskip{%
                                                       3553
                                                                    \bxjs@kanjiskip@enabledfalse
                                                       3554
                                                                    \bxjs@reset@kanjiskip}
          \bxjs@reset@kanjiskip 現在の和文間空白の設定を実際にエンジンに反映させる。
                                                       3555 \bxjs@robust@def\bxjs@reset@kanjiskip{%
                                                       3556
                                                                    \ifbxjs@kanjiskip@enabled
                                                                        \setlength{\@tempskipa}{\bxjs@kanjiskip}%
                                                       3557
                                                                    \else \@tempskipa\z@
                                                       3558
                                                       3559
                                                                    \fi
                                                                    \bxjs@apply@kanjiskip}
                                                       3560
                     \bxjs@xkanjiskip 和欧文間空白について同様のものを用意する。
                         \setxkanjiskip3561 \def\bxjs@xkanjiskip{0pt}
                         \label{eq:command*setxkanjiskip} $$ \operatorname{setxkanjiskip}[1]_{\%} $$
                                                                    \edef\bxjs@xkanjiskip{#1}%
\ifbxjs@xkanjiskip@enabled _{3564}
                                                                    \bxjs@reset@xkanjiskip}
      \verb|\bxjs@enable@xkanjiskip| 3565 \verb|\newcommand*| getxkanjiskip{% | Setxkanjiskip| 1.565 | 
                                                                    \bxjs@xkanjiskip}
    \bxjs@disable@xkanjiskip ^{3566}
                                                       3567 \neq \frac{1}{2} \newif\ifbxjs@xkanjiskip@enabled \bxjs@xkanjiskip@enabledtrue
        \verb|\bxjs@reset@xkanjiskip||_{3568} \\ \verb|\bxjs@robust@def\bxjs@enable@xkanjiskip||_{\%}
                                                       3569
                                                                    \bxjs@xkanjiskip@enabledtrue
                                                                    \bxjs@reset@xkanjiskip}
                                                       3570
                                                       3571 \bxjs@robust@def\bxjs@disable@xkanjiskip{%
                                                       3572
                                                                    \bxjs@xkanjiskip@enabledfalse
                                                                    \bxjs@reset@xkanjiskip}
                                                       3573
                                                       3574 \bxjs@robust@def\bxjs@reset@xkanjiskip{%
                                                                    \ifbxjs@xkanjiskip@enabled
                                                       3575
                                                       3576
                                                                         \setlength{\@tempskipa}{\bxjs@xkanjiskip}%
```

\bxjs@kanjiskip 和文間空白の量を表すテキスト。

```
3577 \else \@tempskipa\z@
3578 \fi
3579 \bxjs@apply@xkanjiskip}

\jsResetDimen を用いて、フォントサイズが変更された時に空白の量が追随するようにする。
3580 \g@addto@macro\jsResetDimen{%
3581 \bxjs@reset@kanjiskip
3582 \bxjs@reset@xkanjiskip}
3583 \let\bxjs@apply@kanjiskip\relax
3584 \let\bxjs@apply@xkanjiskip\relax
```

#### ■和文フォント指定の扱い

\bxjs@adjust@jafont \jsJaFont に入っている和文フォント設定の値を"調整"して、その結果を \bxjs@tmpa に返す。#1 が f の場合は"非埋込 (noEmbed)"の設定が禁止される。この禁止の場合も含め、何か異常がある場合は \bxjs@tmpa は空になる。

```
3585 \@onlypreamble\bxjs@adjust@jafont
3586 \def\bxjs@adjust@jafont#1{%
      \ifx\jsJaFont\bxjs@@auto
        \bxjs@get@kanjiEmbed
3588
3589
        \ifx\bxjs@kanjiEmbed\relax
          \let\bxjs@tmpa\@empty
3590
3591
        \else
          \let\bxjs@tmpa\bxjs@kanjiEmbed
3592
        \fi
3593
3594
      \else
3595
        \let\bxjs@tmpa\jsJaFont
3596
      \if f#1\ifx\bxjs@tmpa\bxjs@@noEmbed
3597
        \ClassWarningNoLine\bxjs@clsname
3598
3599
         {Option 'jafont=noEmbed' is ignored, because it is\MessageBreak
3600
          not available on the current situation}%
        \let\bxjs@tmpa\@empty
3601
3602
      \fi\fi
3603 }
3604 \def\bxjs@@auto{auto}
3605 \def\bxjs@@noEmbed{noEmbed}
```

\bxjs@kanjiEmbed 現在の updmap の kanjiEmbed パラメタの値。\bxjs@get@kanjiEmbed により実際の設定値が取得されてここに設定される。

 $3606 \verb|\let\bxjs@kanjiEmbed\relax|$ 

\bxjs@get@kanjiEmbed 現在の updmap の kanjiEmbed パラメタの値を取得する。

```
3607 \@onlypreamble\bxjs@get@kanjiEmbed
3608 \def\bxjs@get@kanjiEmbed{%
3609 \begingroup\setbox\z@=\hbox{%
3610 \global\let\bxjs@g@tmpa\relax
```

```
3612
               \let\do\@makeother\dospecials
       3613
               \catcode32=10 \catcode12=10 %form-feed
               \let\bxjs@tmpa\@empty
       3614
               \openin\@inputcheck="|kpsewhich updmap.cfg"\relax
       3615
               \ifeof\@inputcheck\else
       3616
                 \read\@inputcheck to\bxjs@tmpa
       3617
       3618
                 \closein\@inputcheck
               \fi
       3619
               \ifx\bxjs@tmpa\@empty\else
       3620
                 \openin\@inputcheck="\bxjs@tmpa"\relax
       3621
       3622
                 \@tempswatrue
                 \loop\if@tempswa
       3623
                   \read\@inputcheck to\bxjs@tmpa
       3624
       3625
                   \expandafter\bxjs@get@ke@a\bxjs@tmpa\@nil kanjiEmbed \@nil\@nnil
       3626
                   \ifx\bxjs@tmpb\relax\else
                     \global\let\bxjs@g@tmpa\bxjs@tmpb
       3627
                     \@tempswafalse
       3628
       3629
                   \fi
                   \expandafter\bxjs@get@ke@b\bxjs@tmpa\@nil jaEmbed \@nil\@nnil
       3630
       3631
                   \ifx\bxjs@tmpb\relax\else
                     \global\let\bxjs@g@tmpa\bxjs@tmpb
       3632
       3633
                     \@tempswafalse
       3634
                   \ifeof\@inputcheck \@tempswafalse \fi
       3635
                 \repeat
       3636
               \fi
       3637
       3638
             }\endgroup
       3639
             \let\bxjs@kanjiEmbed\bxjs@g@tmpa
       3640 }
       3641 \@onlypreamble\bxjs@get@ke@a
       3642 \def\bxjs@get@ke@a#1kanjiEmbed #2\@nil#3\@nnil{%
             \f \f \f \
       3643
       3644
             \else \let\bxjs@tmpb\relax
             fi
       3645
       3646 \@onlypreamble\bxjs@get@ke@b
       3647 \def\bxjs@get@ke@b#1jaEmbed #2\@nil#3\@nnil{%
             \fine $1$\def\bxjs@tmpb{#2}%
       3648
       3649
             \else \let\bxjs@tmpb\relax
       3650
             fi
\jachar \jachar{(文字)}: 和文文字として出力する。
       3651 \newcommand*\jachar[1]{%
             \begingroup
         \jsLetHeadChar で先頭の"文字"を拾ってそれを \bxjs@jachar に渡す。
               \jsLetHeadChar\bxjs@tmpa{#1}%
       3653
       3654
               \ifx\bxjs@tmpa\relax
                 \ClassWarningNoLine\bxjs@clsname
       3655
```

\endlinechar\m@ne

```
3657
                                   \else
                           3658
                                     \expandafter\bxjs@jachar\expandafter{\bxjs@tmpa}%
                                   \fi
                           3659
                                 \endgroup}
                           3660
                             \jsJaChar を \jachar と等価にする。
                           3661 \let\jsJaChar\jachar
                             下請けの \bxjs@jachar の実装はエンジンにより異なる。
                           3662 \let\bxjs@jachar\@firstofone
                             ■hyperref 対策 出力ページサイズに館する処理は geometry パッケージが行うので、
                             hyperref 側の処理は無効にしておく。
                           3663 \PassOptionsToPackage{setpagesize=false}{hyperref}
  \bxjs@fix@hyperref@unicode hyperref の unicode オプションの値を固定する。
                           3664 \verb|\conlypreamble\bxjs@fix@hyperref@unicode|\\
                           3665 \def\bxjs@fix@hyperref@unicode#1{%
                                 \PassOptionsToPackage{bxjs/hook=#1}{hyperref}%
                           3666
                                 \@namedef{KV@Hyp@bxjs/hook}##1{%
                           3667
                                   \KV@Hyp@unicode{##1}%
                           3668
                                   \def\KV@Hyp@unicode####1{%
                           3669
                           3670
                                     \expandafter\ifx\csname if##1\expandafter\endcsname
                           3671
                                        \csname if####1\endcsname\else
                                       \ClassWarningNoLine\bxjs@clsname
                           3672
                           3673
                                       {Blcoked hyperref option 'unicode=####1'}%
                           3674
                                     \fi
                                   }%
                           3675
                           3676
                                 }%
                           3677 }
    \jsCheckHyperrefUnicode 「hyperref の unicode オプションの値を検証する」ための本体開始時のフック。
                           3678 \@onlypreamble\jsCheckHyperrefUnicode
                           3679 \let\jsCheckHyperrefUnicode\@empty
                           3680 \AtBeginDocument{\jsCheckHyperrefUnicode}
\bxjs@check@hyperref@unicode hyperrefのunicode オプションの値を本体開始時に検証する。
                           3681 \@onlypreamble\bxjs@check@hyperref@unicode
                           3682 \ensuremath{\mbox{def}\mbox{bxjs@check@hyperref@unicode#1{%}}}
                           3683
                                 \g@addto@macro\jsCheckHyperrefUnicode{%
                           3684
                                   \@tempswafalse
                                   \begingroup
                           3685
                                     \expandafter\ifx\csname ifHy@unicode\endcsname\relax
                           3686
                           3687
                                       \aftergroup\@tempswatrue \fi
                                     \expandafter\ifx\csname ifHy@unicode\expandafter\endcsname
                           3688
                                         \csname if#1\endcsname
                           3689
                                       \aftergroup\@tempswatrue \fi
                           3690
                                   \endgroup
                           3691
```

{Illegal argument given to \string\jachar}%

```
\if@tempswa\else
                                                   3692
                                                   3693
                                                                            \ClassError\bxjs@clsname
                                                   3694
                                                                              {The value of hyperref 'unicode' key is not suitable\MessageBreak
                                                                                 for the present engine (must be #1)}%
                                                   3695
                                                                              {\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\en
                                                   3696
                                                   3697
                                                                       fi}
\bxjs@urgent@special DVI のなるべく早い位置に special を出力する。
                                                   3698 \@onlypreamble\bxjs@urgent@special
                                                   3699 \def\bxjs@urgent@special#1{%
                                                                  \AtBeginDvi{\special{#1}}%
                                                   3700
                                                                  \AtBeginDocument{%
                                                   3701
                                                                       \@ifpackageloaded{atbegshi}{%
                                                   3702
                                                                            \begingroup
                                                   3703
                                                   3704
                                                                                  \toks\z@{\special{#1}}%
                                                   3705
                                                                                 \toks\tw@\expandafter{\AtBegShi@HookFirst}%
                                                   3706
                                                                                 3707
                                                                            \endgroup
                                                   3708
                                                                       }{}%
                                                   3709
                                                                 }%
                                                   3710 }
                                                                      pT<sub>E</sub>X 用設定
                                                   3711 \if j\jsEngine
                                                        ■共通命令の実装
                                                   3712 \def\bxjs@apply@kanjiskip{%
                                                                \kanjiskip\@tempskipa}
                                                   3714 \def\bxjs@apply@xkanjiskip{%
                                                                 \xkanjiskip\@tempskipa}
                                                            \jaJaChar のサブマクロ。
                                                   3716 \def\bxjs@jachar#1{%
                                                   3717 \bxjs@jachar@a#1....\@nil}
                                                   3718 \def\bxjs@jachar@a#1#2#3#4#5\@ni1{%}
                                                        引数が単一トークンなら和文文字トークンが得られたと見なしてそれをそのまま出力する。
                                                   3719 \ifx.#2#1%
                                                        引数が複数トークンの場合は、UTF-8 のバイト列であると見なし、そのスカラー値を
                                                       \@tempcnta に代入する。
                                                                 \left( x^{3}\right) 
                                                                       \@tempcnta`#1 \multiply\@tempcnta64
                                                   3721
                                                   3722
                                                                       \advance\@tempcnta`#2 \advance\@tempcnta-"3080
                                                   3723
                                                                       \bxjs@jachar@b
                                                                  \left\langle x, 4, 4, 4 \right\rangle
                                                   3724
                                                   3725
                                                                       \@tempcnta`#1 \multiply\@tempcnta64
                                                                       \advance\@tempcnta`#2 \multiply\@tempcnta64
                                                   3726
```

```
3727
       \advance\@tempcnta~#3 \advance\@tempcnta-"E2080
3728
       \bxjs@jachar@b
3729
     \else
       \@tempcnta`#1 \multiply\@tempcnta64
3730
       \advance\@tempcnta`#2 \multiply\@tempcnta64
3731
       \advance\@tempcnta`#3 \multiply\@tempcnta64
3732
       \advance\@tempcnta`#4 \advance\@tempcnta-"3C82080
3733
3734
       \bxjs@jachar@b
     \fi\fi\fi}
3735
 符号値が \@tempcnta の和文文字を出力する処理。
3736 \ifjsWithupTeX
     \def\bxjs@jachar@b{\kchar\@tempcnta}
3737
3738 \else
3739
     \def\bxjs@jachar@b{%
       \ifx\bxUInt\@undefined\else
3740
         \bxUInt{\@tempcnta}%
       \fi}
3742
3743 \fi
   和欧文間空白の命令 \jathinspace の実装。
3744 \ifbxjs@jaspace@cmd
3745 \quad \texttt{\def\jathinspace\{\hskip\xkanjiskip\}}
3746 \fi
 ■jis2004 パラメタ pxchfon と pxbabel では 2004JIS を指定するオプションの名が
 prefer2004jis である。
3747 \ifbxjs@jp@jismmiv
    \PassOptionsToPackage{prefer2004jis}{pxchfon}
    \PassOptionsToPackage{prefer2004jis}{pxbabel}
3750 \fi
 ■和文フォント指定の扱い pTpX は既定で kanji-config-updmap の設定に従うため、
 \jsJaFont が auto の場合は何もする必要がない。無指定でも auto でもない場合は、
 \jsJaFont をオプションにして pxchfon パッケージを読み込む。ここで、和文ドライバパ
 ラメタ font が指定されいる場合は、その値を pxchfon のオプションに追加する。
3751 \let\bxjs@tmpa\jsJaFont
3752 \ifx\bxjs@tmpa\bxjs@@auto
3753 \let\bxjs@tmpa\@empty
3754 \le ifx\bxjs@tmpa\bxjs@@noEmbed
    \def\bxjs@tmpa{noembed}
3755
3757 \edef\bxjs@tmpa{\bxjs@catopt\bxjs@tmpa\bxjs@jp@font}
3758 \ifx\bxjs@tmpa\empty\else
     \edef\bxjs@next{%
       \noexpand\RequirePackage[\bxjs@tmpa]{pxchfon}[2010/05/12]% v0.5
3760
3761
    }\bxjs@next
3762 \fi
```

```
応している場合は scale=(\jsScale の値) を事前に otf に渡す。
 ※ otf.sty の中に「\RequirePackage{keyval}」の行が存在するかにより判定している。
 (もっといい方法はないのか……。)
3763 \begingroup
3764
      \global\let\@gtempa\relax
      \catcode`\|=0 \catcode`\\=12
3765
      |def|bxjs@check#1|@nil{%
3766
        |bxjs@check@a#1|@nil\RequirePackage|@nnil}%
3767
      |def|bxjs@check@a#1\RequirePackage#2|@nnil{%
3768
        |ifx$#1$|bxjs@check@b#2|@nil keyval|@nnil |fi}%
3769
      |catcode`|\=0 \catcode`\|=12
3770
      \def\bxjs@check@b#1keyval#2\@nnil{%
3771
3772
       ifx$#2$\epsilon
         \xdef\@gtempa{%
3773
3774
            \noexpand\PassOptionsToPackage{scale=\jsScale}{otf}}%
       fi
3775
3776 \@firstofone{%
      \catcode10=12 \endlinechar\m@ne
      \let\do\@makeother \dospecials \catcode32=10
3778
     \openin\@inputcheck=otf.sty\relax
3779
     \@tempswatrue
3780
     \loop\if@tempswa
3781
3782
       \ifeof\@inputcheck \@tempswafalse \fi
3783
       \if@tempswa
         \read\@inputcheck to\bxjs@line
3785
         \expandafter\bxjs@check\bxjs@line\@nil
       \fi
3786
3787
      \repeat
      \closein\@inputcheck
3788
3789 \endgroup}
3790 \@gtempa
 ■hyperref 対策 unicode にしてはいけない。
3791 \ifbxjs@hyperref@enc
3792 \bxjs@check@hyperref@unicode{false}
3793 \fi
   tounicode special 命令を出力する。
3794 \if \ifx\bxjs@driver@given\bxjs@driver@@dvipdfmx T%
3795
       \else\ifjsWithpTeXng T\else F\fi\fi T%
3796
     \ifnum\jis"2121="A1A1 %euc
       \bxjs@urgent@special{pdf:tounicode EUC-UCS2}
3797
     \left| \frac{1}{2121} \right| = 140 \% 
3798
3799
       \bxjs@urgent@special{pdf:tounicode 90ms-RKSJ-UCS2}
```

■otf パッケージ対策 インストールされている otf パッケージが scale オプションに対

\else\ifnum\jis"2121="3000 %uptex

\ifbxjs@bigcode

```
3802 \bxjs@urgent@special{pdf:tounicode UTF8-UTF16}
3803 \PassOptionsToPackage{bigcode}{pxjahyper}
3804 \else
3805 \bxjs@urgent@special{pdf:tounicode UTF8-UCS2}
3806 \fi
3807 \fi\fi\fi
3808 \let\bxToUnicodeSpecialDone=t
3809 \fi
```

■和文数式ファミリ 和文数式ファミリは既定で有効とする。すなわち enablejfam=false 以外の場合は @enablejfam を真にする。

```
3810 \ifx f\bxjs@enablejfam\else
3811 \@enablejfamtrue
3812 \fi
実際に和文用の数式ファミリの設定を行う。
```

```
3813 \if@enablejfam
     3814
     \DeclareSymbolFontAlphabet{\mathmc}{mincho}
3815
3816
     \SetSymbolFont{mincho}{bold}{\jsc@JYn}{gt}{m}{n}
     \jfam\symmincho
3817
     \DeclareMathAlphabet{\mathgt}{\jsc@JYn}{gt}{m}{n}
3818
     \AtBeginDocument{%
3819
       \ifx\reDeclareMathAlphabet\@undefined\else
3820
3821
         \reDeclareMathAlphabet{\mathrm}{\@mathrm}{\@mathrm}{\
         \reDeclareMathAlphabet{\mathbf}{\@mathbf}{\@mathbf}}%
3822
         \reDeclareMathAlphabet{\mathsf}{\@mathsf}{\@mathsf}}%
```

# C.3 pdfTEX 用設定: CJK + bxcjkjatype

 $3826 \le j p \le n$ 

\fi}

3824

3825 \fi

- ■bxcjkjatype パッケージの読込 \jsJaFont が指定されている場合は、その値を bxcjkjatype のオプション (プリセット指定) に渡す。(auto ならば \bxjs@get@kanjiEmbed を実行する。) スケール値 (\jsScale) の反映は bxcjkjatype の側で行われる。
- ※ Pandoc モードでは autotilde を指定しない。

```
3827 \bxjs@adjust@jafont{f}
3828 \edef\bxjs@tmpa{\bxjs@catopt\bxjs@tmpa\bxjs@jp@font}
3829 \edef\bxjs@tmpa{\bxjs@catopt\bxjs@tmpa{whole}}
3830 \def\bxjs@tmpb{pandoc}\ifx\bxjs@tmpb\bxjs@jadriver\else
3831 \edef\bxjs@tmpa{\bxjs@catopt\bxjs@tmpa{autotilde}}
3832 \fi
3833 \edef\bxjs@next{%
3834 \noexpand\RequirePackage[\bxjs@tmpa]{bxcjkjatype}[2013/10/15]% v0.2c
3835 }\bxjs@next
```

```
■hyperref 対策 bxcjkjatype 使用時は unicode にするべき。
 ※取りあえず固定はしない。
3837 \ifbxjs@hyperref@enc
3838 \PassOptionsToPackage{unicode}{hyperref}
3839 \fi
   \hypersetup 命令で(CJK* 環境に入れなくても)日本語文字を含む文書情報を設定でき
 るようにするための細工。
 ※ bxcjkjatype を whole 付きで使っていることが前提。
 ※パッケージオプションでの指定に対応するのは、「アクティブな高位バイトトークンがそ
 の場で展開されてしまう」ため困難である。
3840 \ifx\bxcjkjatypeHyperrefPatchDone\@undefined
3841 \begingroup
3842 \CJK@input{UTF8.bdg}
3843 \setminus endgroup
3844 \g@addto@macro\pdfstringdefPreHook{\%}
     \@nameuse{CJK@UTF8Binding}%
3846 }
3847 \fi
   ~ が和欧文間空白である場合は PDF 文字列中で空白文字でなく空に展開させる。
3848 \ifx\bxcjkjatypeHyperrefPatchDone\@undefined
3849 \verb|\g@addto@macro\pdfstringdefPreHook{%}|
     \ifx~\bxjs@@CJKtilde
3850
       \let\bxjs@org@LetUnexpandableSpace\HyPsd@LetUnexpandableSpace
       \let\HyPsd@LetUnexpandableSpace\bxjs@LetUnexpandableSpace
3852
3853
       \let~\@empty
3854
     \fi
3855 }
3856 \def\bxjs@@CJKtilde{\CJKecglue\ignorespaces}
3857 \def\bxjs@@tildecmd{~}
3858 \ensuremath{\mbox{def}\mbox{bxjs@LetUnexpandableSpace#1}}\
     \def\bxjs@tmpa{#1}\ifx\bxjs@tmpa\bxjs@@tildecmd\else
       \bxjs@org@LetUnexpandableSpace#1%
3860
3861
     \fi}
3862 \fi
 ■共通命令の実装
3863 \newskip\jsKanjiSkip
3864 \newskip\jsXKanjiSkip
3865 \ifx\CJKecglue\@undefined
3866
    \def\CJKtilde{\CJK@global\def~{\CJKecglue\ignorespaces}}
3867 \fi
3868 \let\autospacing\bxjs@enable@kanjiskip
3869 \let\noautospacing\bxjs@disable@kanjiskip
```

3870 \protected\def\bxjs@CJKglue{\hskip\jsKanjiSkip}

```
3871 \def\bxjs@apply@kanjiskip{%
3872
     \jsKanjiSkip\@tempskipa
     \let\CJKglue\bxjs@CJKglue}
3874 \let\autoxspacing\bxjs@enable@xkanjiskip
3875 \let\noautoxspacing\bxjs@disable@xkanjiskip
3876 \protected\def\bxjs@CJKecglue{\hskip\jsXKanjiSkip}
3877 \def\bxjs@apply@xkanjiskip{%
     \jsXKanjiSkip\@tempskipa
     \let\CJKecglue\bxjs@CJKecglue}
3879
   \jachar のサブマクロの実装。
3880 \def\bxjs@jachar#1{%
3881 \CJKforced{#1}}
   和欧文間空白の命令 \jathinspace の実装。
3882 \ifbxjs@jaspace@cmd
3883 \protected\def\jathinspace{\CJKecglue}
3884 \fi
 ■和文数式ファミリ CJK パッケージは(恐らく)数式文字として CJK 文字をサポートし
 ていない。従って @enablejfam は常に偽になる。
3885 \ifx t\bxjs@enablejfam
     \ClassWarningNoLine\bxjs@clsname
3887
      {You cannot use 'enablejfam=true', since the\MessageBreak
       CJK package does not support Japanese math}
3889 \fi
 C.4 X¬TFX 用設定: xeCJK + zxjatype
3890 \else\if x\jsEngine
```

■zxjatype パッケージの読込 スケール値(\jsScale)の反映は zxjatype の側で行われる。

```
3891 \RequirePackage{zxjatype}
3892 \PassOptionsToPackage{no-math}{fontspec}%!
3893 \PassOptionsToPackage{xetex}{graphicx}%!
3894 \PassOptionsToPackage{xetex}{graphics}%!
3895 \ifx\zxJaFamilyName\@undefined
3896 \ClassError\bxjs@clsname
3897 {xeCJK or zxjatype is too old}\@ehc
3898 \fi
```

■和文フォント定義 \jsJaFont が指定された場合は、その値をオプションとして zxjafont を読み込む。非指定の場合は IPAex フォントを使用する。

```
3899 \bxjs@adjust@jafont{f}
3900 \edef\bxjs@tmpa{\bxjs@catopt\bxjs@tmpa\bxjs@jp@font}
3901 \ifx\bxjs@tmpa\@empty
3902 \setCJKmainfont[BoldFont=IPAexGothic]{IPAexMincho}
3903 \setCJKsansfont[BoldFont=IPAexGothic]{IPAexGothic}
```

```
3904 \else
3905 \edef\bxjs@next{%
3906 \noexpand\RequirePackage[\bxjs@tmpa]{zxjafont}[2013/01/28]% v0.2a
3907 }\bxjs@next
3908 \fi
```

■hyperref 対策 unicode オプションの指定に関する話。

 $X_{\rm T}T_{\rm E}X$  の場合は、xdvipdfmx が UTF-8  $\rightarrow$  UTF-16 の変換を行う機能を持っているため、本来は special 命令の文字列の文字コード変換は不要である。ところが、xhyperref での方針としては、xhyperref での方針としては、xhyperref での方針としては、xhyperref での方針としては、xhyperref での方式になる。実際、xhyperref での方式になる。実際、xhyperref での方式になる。実際、xhyperref での方式になる。実際、xhyperref での方式になる。

これを踏まえて、ここでは、「 $X_{\Xi}T_{E}X$  のバージョンが 0.99992 以上の場合に unicode を 既定で有効にする」ことにする。

※取りあえず固定はしない。

```
3909 \ifnum\strcmp{\the\XeTeXversion\XeTeXrevision}{0.99992}>\m@ne
3910 \ifbxjs@hyperref@enc
3911 \PassOptionsToPackage{unicode}{hyperref}
3912 \fi
3913 \fi
```

■段落頭でのグルー挿入禁止 どうやら、zxjatype の \inhibitglue の実装が極めて杜撰なため、1.0 版での実装では全く期待通りの動作をしていないし、そもそも(少なくとも現状の)xeCJK では、段落頭での \inhibitglue は実行しないほうが JS クラスの出力に近いものが得られるらしい。

従って、\jsInhibitGlueAtParTop は結局何もしないことにする。 強制改行直後のグルー禁止処理、のような怪しげな何か。

```
3914 \AtEndOfPackage{%
3915 \def\@gnewline #1{%
3916 \ifvmode \@nolnerr
3917 \else
3918 \unskip \reserved@e {\reserved@f#1}\nobreak \hfil \break \null
3919 \nobreak \hskip-1sp\hskip1sp\relax
3920 \ignorespaces
3921 \fi}
3922 }
```

## ■共通命令の実装

```
3923 \newskip\jsKanjiSkip
3924 \newskip\jsXKanjiSkip
3925 \ifx\CJKecglue\@undefined
3926 \def\CJKtilde{\CJK@global\def~{\CJKecglue\ignorespaces}}
3927 \fi
3928 \let\autospacing\bxjs@enable@kanjiskip
```

```
3929 \let\noautospacing\bxjs@disable@kanjiskip
3930 \protected\def\bxjs@CJKglue{\hskip\jsKanjiSkip}
3931 \def\bxjs@apply@kanjiskip{%
     \jsKanjiSkip\@tempskipa
3932
     \xeCJKsetup{CJKglue={\bxjs@CJKglue}}}
3934 \let\autoxspacing\bxjs@enable@xkanjiskip
3935 \let\noautoxspacing\bxjs@disable@xkanjiskip
3936 \protected\def\bxjs@CJKecglue{\hskip\jsXKanjiSkip}
3937 \def\bxjs@apply@xkanjiskip{%
    \jsXKanjiSkip\@tempskipa
    \xeCJKsetup{CJKecglue={\bxjs@CJKecglue}}}
   \mcfamily、\gtfamily は本来は zxjatype の方で定義すべきであろうが、現状は暫定的
 にここで定義する。
3940 \ifx\mcfamily\@undefined
    \protected\def\mcfamily{\CJKfamily{\CJKrmdefault}}
3942 \protected\def\gtfamily{\CJKfamily{\CJKsfdefault}}
3943 \fi
   \jachar のサブマクロの実装。
3944 \def\bxjs@jachar#1{%
3945 \xeCJKDeclareCharClass{CJK}{`#1}\relax
3946 #1}
   \jathinspace の実装。
3947 \ifbxjs@jaspace@cmd
3948 \protected\def\jathinspace{\CJKecglue}
3949 \fi
 ■和文数式ファミリ 和文数式ファミリは既定で無効とする。すなわち enablejfam=true
 の場合にのみ @enablejfam を真にする。
3950 \ifx t\bxjs@enablejfam
3951 \@enablejfamtrue
3952 \fi
   実際に和文用の数式ファミリの設定を行う。
 ※ FIXME: 要検討。
3953 \if@enablejfam
3954 \xeCJKsetup{CJKmath=true}
3955 \fi
```

# C.5 LuaT<sub>F</sub>X 用設定: LuaT<sub>E</sub>X-ja

3956 \else\if l\jsEngine

■LuaT<sub>E</sub>X-ja パッケージの読込 luatexja とともに luatexja-fontspec パッケージを読み込む。

luatexja は自前の \zw (これは実際の現在和文フォントに基づく値を返す) を定義するので、\zw の定義を消しておく。なお、レイアウト定義の「全角幅」は「規定」に基づく

\jsZw であることに注意が必要。

% 1.0b 版から「graphics パッケージに pdftex オプションを渡す」処理を行っていたが、 1.4 版で廃止された。

3957 \let\zw\@undefined

3958 \RequirePackage{luatexja}

3959 \RequirePackage{luatexja-fontspec}

■和文フォント定義 luatexja-fontspec で使用する和文スケール値を \jsScale と合致 させたいのだが……もっと良い方法はないのか?

3960 \ExplSyntaxOn

3961 \fp\_gset:Nn \g\_ltj\_fontspec\_scale\_fp { \jsScale }

3962 \ExplSyntaxOff

\jsJaFont が指定された場合は、その値をオプションとして luatexja-preset を読み込む。非指定の場合は、luatexja-preset パッケージの ipaex オプション (IPAex フォント使用) と等価な設定を用いる (luatexja-preset は読み込まない)。

3963 \bxjs@adjust@jafont{t}

 $3964 \ifx\bxjs@tmpa\bxjs@@noEmbed$ 

3965 \def\bxjs@tmpa{noembed}

3966 \fi

3967 \edef\bxjs@tmpa{\bxjs@catopt\bxjs@tmpa\bxjs@jp@font}

3968 \ifx\bxjs@tmpa\@empty

3969 \defaultjfontfeatures{ Kerning=Off }

3970 \setmainjfont[BoldFont=IPAexGothic,JFM=ujis]{IPAexMincho}

 $3971 \quad \texttt{\sc{Setsansjfont[BoldFont=IPAexGothic,JFM=ujis]{IPAexGothic}}$ 

3972 \else

3973 \edef\bxjs@next{%

3974 \noexpand\RequirePackage[\bxjs@tmpa]{luatexja-preset}%

3975 }\bxjs@next

3976 \fi

欧文総称フォント命令で和文フォントが連動するように修正する。その他の和文フォント 関係の定義を行う。

3977 \DeclareRobustCommand\rmfamily

3978 {\not@math@alphabet\rmfamily\mathrm

3979 \romanfamily\rmdefault\kanjifamily\mcdefault\selectfont}

3980 \DeclareRobustCommand\sffamily

 $3981 \quad {\bf Qnot Qmath Qalphabet \s ffamily \ \ maths f}$ 

3982 \romanfamily\sfdefault\kanjifamily\gtdefault\selectfont}

3983 \DeclareRobustCommand\ttfamily

3984 {\not@math@alphabet\ttfamily\mathtt

 $3985 \qquad \verb|\romanfamily| ttdefault\kanjifamily\gtdefault\selectfont|$ 

3986 \AtBeginDocument{%

3987 \reDeclareMathAlphabet{\mathrm}{\mathrm}{\mathrm}

 ${\tt 3988} \qquad {\tt \end{thalphabet{\bf \{\mathbb \}_{\bf \{}\}}} }$ 

3989 \reDeclareMathAlphabet{\mathsf}{\mathsf}{\mathsf}}\%

3990 \bxjs@if@sf@default{%

3991 \renewcommand\kanjifamilydefault{\gtdefault}}

```
■和文パラメタの設定

3992 % 次の 3 つは既定値の通り

3993 %\ltjsetparameter{prebreakpenalty={``,10000}}

3994 %\ltjsetparameter{postbreakpenalty={``,10000}}

3995 %\ltjsetparameter{prebreakpenalty={``,10000}}

3996 \ltjsetparameter{jaxspmode={`!,1}}

3997 \ltjsetparameter{jaxspmode={`!,1}}

3998 \ltjsetparameter{alxspmode={`+,3}}

3999 \ltjsetparameter{alxspmode={`\%,3}}

■段落頭でのグルー挿入禁止 基本的に現状の ltjs* クラスの処理に合わせる。
※\jsInhibitGlueAtParTop は使わない。
```

\ltjfakeparbegin 現在の LuaT<sub>E</sub>X-ja で定義されているマクロで、段落中で段落冒頭用の処理を発動する。未 定義である場合にに備えて同等のものを用意する。

```
4000 \ifx\ltjfakeparbegin\@undefined
4001 \protected\def\ltjfakeparbegin{%
4002 \ifhmode
4003 \relax\directlua{%
4004 luatexja.jfmglue.create_beginpar_node()}}
4005 \fi
4006 \fi
```

ltjs\* クラスの定義と同等になるようにパッチを当てる。

```
4007 \unless\ifnum\bxjs@everyparhook=\bxjs@everyparhook@none
4008 \begingroup
      \let\%\@percentchar \def\@#1{[[\detokenize{#1}]]}
4009
      \@gobble\if\def\bxjs@tmpa{\@{\everypar{}\fi}}
4010
      \ifnum\bxjs@everyparhook=\bxjs@everyparhook@compat
4011
4012
        \@gobble\if\def\bxjs@tmpa{\@{\everypar{\everyparhook}\fi}}\fi
4013
     \directlua{
        local function patchcmd(cs, code, from, to)
4014
          tex.sprint(code:gsub(from:gsub("\%W", "\%\%\%0"), "\%0"..to)
4015
            :gsub("macro:", \@\gdef..cs, 1):gsub("->", "{", 1).."}")
4016
4017
        patchcmd(\@\@xsect, [[\meaning\@xsect]],
4018
4019
          \@{\hskip-\@tempskipa}, \@\ltjfakeparbegin)
4020
        patchcmd(\@\@item, [[\meaning\@item]],
          \bxjs@tmpa, \@\ltjfakeparbegin)}
4021
4022 \endgroup
4023 \fi
```

■hyperref 対策 unicode にするべき。

※ 1.6c 版より、固定ではなく既定設定+検証に切り替えた。

```
4024 \ifbxjs@hyperref@enc
```

- 4025 \PassOptionsToPackage{unicode}{hyperref}
- 4026 \bxjs@check@hyperref@unicode{true}

#### ■共通命令の実装

```
4028 \protected\def\autospacing{%}
     \ltjsetparameter{autospacing=true}}
4030 \protected\def\noautospacing{%}
     \ltjsetparameter{autospacing=false}}
4032 \protected\def\autoxspacing{%
     \ltjsetparameter{autoxspacing=true}}
4034 \protected\def\noautoxspacing{%
     \ltjsetparameter{autoxspacing=false}}
4036 \def\bxjs@apply@kanjiskip{%
     \ltjsetparameter{kanjiskip={\@tempskipa}}}
4038 \def\bxjs@apply@xkanjiskip{%
     \ltjsetparameter{xkanjiskip={\@tempskipa}}}
   \jachar のサブマクロの実装。
4040 \def\bxjs@jachar#1{%
4041 \ \left| \frac{4041}{relax} \right|
   \jathinspace の実装。
\protected\def\jathinspace{%
        \hskip\ltjgetparameter{xkanjiskip}\relax}
4045 \fi
```

■和文数式ファミリ LuaT<sub>E</sub>X-ja では和文数式ファミリは常に有効で、既にこの時点で必要な設定は済んでいる。従って @enablejfam は常に真になる。

```
4046 \ifx f\bxjs@enablejfam

4047 \ClassWarningNoLine\bxjs@clsname

4048 {You cannot use 'enablejfam=false', since the\MessageBreak

4049 LuaTeX-ja always provides Japanese math families}

4050 \fi
```

#### C.6 共通処理 (2)

4051 \fi\fi\fi\fi

#### ■共通命令の実装

```
\label{lem:decommand} $$4058 \ \DeclareJaMathFontCommand{\mathgt}_{\decommand}$$ 4059 \fi
```

#### ■和文空白命令

\* 非数式中では \jathinspace と等価になるように再定義する。 ※数式中では従来通り(\:と等価)。

```
4060 \ \ ifbxjs@jaspace@cmd
4061
      \bxjs@protected\def\bxjs@choice@jathinspace{%
        \relax\ifmmode \mskip\medmuskip
4062
4063
        \else \jathinspace\ignorespaces
4064
        \fi}
      \jsAtEndOfClass{%
4065
        \ifjsWitheTeX \let\>\bxjs@choice@jathinspace
4066
        \else \def\>{\protect\bxjs@choice@jathinspace}%
4067
        \fi}
4068
4069 \fi
```

#### ■和文・和欧文間空白の初期値

```
4070 \setkanjiskip{0pt plus.1\jsZw minus.01\jsZw}
4071 \ifx\jsDocClass\jsSlide \setxkanjiskip{0.1em}
4072 \else \setxkanjiskip{0.25em plus 0.15em minus 0.06em}
4073 \fi
以上で終わり。
4074 %</standard>
```

# 付録 D 和文ドライバ: modern 湾

```
モダーンな設定。
standard ドライバの設定を引き継ぐ。
4075 %<*modern>
4076 \input{bxjsja-standard.def}
```

## D.1 フォント設定

```
T1 エンコーディングに変更する。
※以下のコードは \usepackage[T1]{fontenc} と同等。
4077 \ifnum0\if x\jsEngine1\fi\if 1\jsEngine1\fi=\z@
4078 \def\encodingdefault{T1}%
4079 \input{t1enc.def}%
4080 \fontencoding\encodingdefault\selectfont
4081 \fi
基本フォントを Latin Modern フォントファミリに変更する。
```

```
※以下は \usepackage [noamth] {lmodern} と同じ。ユーザは後で lmodern を好きなオプションを付けて読み込むことができる。
```

- $4082 \in x\$  x\jsEngine1\fi\if 1\jsEngine1\fi=\z0
- $4083 \mbox{ }\mbox{lmr}$
- 4084 \renewcommand{\sfdefault}{lmss}
- 4085 \renewcommand{\ttdefault}{lmtt}
- 4086 \fi

大型演算子用の数式フォントの設定。

- ※ amsfonts パッケージと同等にする。
- $4087 \label{localize} $$4087 \end{subseteq} $$ 1000 \end{subseteq} $$ 4087 \end{subseteq} $$ 1000 \end{subseteq}$
- 4088 <-7.5>cmex7<7.5-8.5>cmex8%
- 4089 <8.5-9.5>cmex9<9.5->cmex10}{}%
- $4090 \verb|\expandafter\ex| omX/cmex/m/n/10\endcsname\relax|$

amsmath 読込時に上書きされるのを防ぐ。

 $4091 \def\cmex@opt{10}$ 

#### D.2 fixltx2e 読込

- ※ fixltx2e 廃止前の LATFX カーネルの場合。
- $4092 \ifx\CincludeInRelease\Cundefined$
- 4093 \RequirePackage{fixltx2e}
- 4094 \fi

## D.3 和文カテゴリコード

和文カテゴリコード設定のための補助パッケージを読みこむ。

 $4095 \verb|\RequirePackage{bxjscjkcat}|$ 

### D.4 完了

おしまい。

4096 %</modern>

# 付録 E 和文ドライバ: pandoc 🕾

Pandoc 用の何か。

standard ドライバの設定を引き継ぐ。

- 4097 %<\*pandoc>
- 4098 \input{bxjsja-standard.def}
- $4099 \verb|\RequirePackage{bxjspandoc}|$

#### E.1 dupload システム

パッケージが重複して読み込まれたときに"option clash"の検査をスキップする。この時に何らかのコードを実行させることができる。

#### \bxjs@set@dupload@proc

\bxjs@set@dupload@proc{ $\langle ファイル名\rangle$ }{ $\langle 定義本体\rangle$ } 特定のファイルの読込が \ @filewithoptions で指示されて、しかもそのファイルが読込済である場合に、オプション重複検査をスキップして、代わりに  $\langle 定義本体\rangle$  のコードを実行する。このコード中で #1 は渡されたオプション列のテキストに置換される。

- 4100 \@onlypreamble\bxjs@set@dupload@proc
- 4101 \def\bxjs@set@dupload@proc#1{%
- 4102 \expandafter\bxjs@set@dupload@proc@a\csname bxjs@dlp/#1\endcsname}
- 4103 \@onlypreamble\bxjs@set@dupload@proc@a
- 4104 \def\bxjs@set@dupload@proc@a#1{%
- 4105 \@onlypreamble#1\def#1##1}

#### \@if@ptions \@if@ptions の再定義。

- 4106 \@onlypreamble\bxjs@org@if@ptions
- 4107 \let\bxjs@org@if@ptions\@if@ptions
- 4108 \newif\ifbxjs@dlp
- $4109 \ensuremath{\mbox{\sc def}\mbox{\sc d$
- 4110 \bxjs@dlpfalse
- $4111 $$ \def\bxjs@tmpa{#1}\def\bxjs@tmpb{\@currext}%$
- 4112 \ifx\bxjs@tmpa\bxjs@tmpb
- 4113 \expandafter\ifx\csname bxjs@dlp/#2.#1\endcsname\relax\else
- 4114 \bxjs@dlptrue \fi
- 4115 \fi
- 4116 \ifbxjs@dlp \expandafter\bxjs@do@dupload@proc
- 4117 \else \expandafter\bxjs@org@if@ptions
- 4118 \fi {#1}{#2}{#3}}
- 4119  $\AtBeginDocument\{\%$
- 4120 \let\@if@ptions\bxjs@org@if@ptions}
- $4121 \verb|\donlypreamble\bxjs@do@dupload@proc|$
- $4122 \verb|\def\bxjs@do@dupload@proc#1#2#3{%}|$
- 4123 \csname bxjs@dlp/#2.#1\endcsname{#3}%
- 4124 \@firstoftwo}

## E.2 lang 変数

lang=ja という言語指定が行われると、Pandoc はこれに対応していないため不完全な Babel や Polyglossia の設定を出力してしまう。これを防ぐため、とりあえず両パッケージ を無効化しておく。

4125 \ifnum0\if x\jsEngine1\fi\if 1\jsEngine1\fi>0

Polyglossia について。

4126 \pandocSkipLoadPackage{polyglossia}

```
4127 \bxjs@set@dupload@proc{polyglossia.sty}{%
4128
      \ClassWarning\bxjs@clsname
4129
       {Loading of polyglossia is blocked}}
4130 \ \text{ifx} \ \text{cundefined}
4131 \newcommand*\setmainlanguage[2][]{}
4132 \newcommand*\setotherlanguage[2][]{%
      \ifcat_#2_\else
4133
4134
        \expandafter\let\csname #2\endcsname\@empty
        \expandafter\let\csname end#2\endcsname\@empty
4135
        \expandafter\let\csname text#2\endcsname\@firstofone
4136
4137
      fi
4138 \newcommand*\setotherlanguages[2][]{%
      \ensuremath{\texttt{Qfor\bxjs@tmpa:={\#2}\do{\%}}
        \setotherlangauge{\bxjs@tmpa}}}
4140
4141 \fi
4142 \else
 Babel について。
4143 \pandocSkipLoadPackage{babel}
4144 \bxjs@set@dupload@proc{babel.sty}{%
4145
      \ClassWarning\bxjs@clsname
       {Loading of babel is blocked}}
4147 \ \text{let} \ \text{gnlanguage} \ \text{@secondoftwo}
4148 \let\otherlanguage\@gobble
4149 \let\endotherlanguage\@empty
4150 \fi
```

#### E.3 geometry 変数

```
geometry を "再度読み込んだ"場合に、そのパラメタで \setpagelayout* が呼ばれるようにする。
```

```
4151 \verb|\bxjs@set@dupload@proc{geometry.sty}{\%}|
```

4152 \setpagelayout\*{#1}}

## E.4 CJKmainfont 変数

LuaT<sub>E</sub>X (+ LuaTeX-ja) の場合に CJKmainfont 変数が指定された場合は \setmainjfont の指定にまわす。

```
4153 \if 1\jsEngine
4154 \pandocSkipLoadPackage{xeCJK}
4155 \providecommand*{\setCJKmainfont}{\setmainjfont}
4156 \fi
```

#### E.5 paragraph のマーク

BXJS クラスでは \paragraph の見出しの前に \jsParagraphMark で指定したマークが付加され、既定ではこれは "■"である。しかし、この規定は \paragraph が本来のレイアウトを保っている、すなわち「行内見出しである」「節番号が付かない」ことが前提になっていると考えられる。Pandoc はこの規定を変更することがある(特に既定で \paragraphを別行見出しに再定義する)ため、変更された場合は \jsParagraphMark の既定値を空にする。

Pandoc がプレアンブルで行う再定義の結果を調べるため、begin-document フックを利用する。

- 4157 \AtBeginDocument{%
- 4158 \@tempswafalse

まず、マーク変更が必要かを調べる。\oldparagraph という制御綴が定義済の場合、Pandocが \paragraph の様式を変更したということなので、マーク変更が必要である。

- 4159 \ifx\oldparagraph\@undefined\else
- 4160 \@tempswatrue
- 4161 \fi

\paragraph が番号付きの場合は、マーク変更が必要である。

- 4162 \ifnum\c@secnumdepth>3
- 4163 \Otempswatrue
- 4164 \fi

「マーク変更が必要」である場合、\jsParagraphMark が既定値のままであれば空に変更する。

- 4165 \if@tempswa\ifx\jsParagraphMark\bxjs@org@paragraph@mark
- 4166 \let\jsParagraphMark\@empty
- 4167 \fi\fi}

#### E.6 全角空白文字

```
4168 \ifnum0\if x\jsEngine1\fi\if 1\jsEngine1\fi>\z@
```

- 4169 \catcode"3000=\active
- 4170 \begingroup \catcode`\!=7
- 4171 \protected\gdef!!!!3000{\zwspace}
- 4172 \endgroup
- $4173 \verb|\else| ifx\DeclareUnicodeCharacter\\ @undefined\else$
- 4174 \DeclareUnicodeCharacter{3000}{\bxjs@zsp@char}
- $4175 \qquad \verb|\bxjs@protected\def\bxjs@zsp@char{\zwspace}|$
- 4176 \fi\fi

■hyperref 対策 hyperref の unicode オプションの固定を行う。

- 4177 \if j\jsEngine
- 4178 \bxjs@fix@hyperref@unicode{false}
- 4179 \else

4180 \bxjs@fix@hyperref@unicode{true} 4181 \fi

#### E.7 完了

おしまい。

4182 %</pandoc>

和文ドライバ実装はここまで。

4183 %</drv>

# 付録 F 補助パッケージー覧 🕾

BXJS クラスの機能を実現するために用意されたものだが、他のクラスの文書で読み込んで利用することもできる。

• bxjscompat : ムニャムニャムニャ。

• bxjscjkcat: modern ドライバ用の和文カテゴリを適用する。

• bxjspandoc: Pandoc 用のナニカ。

4184 %<\*anc>

# 付録 G 補助パッケージ: bxjscompat 🕾

ムニャムニャムニャ……。

#### G.1 準備

4185 %<\*compat>

4186 \def\bxac@pkgname{bxjscompat}

\bxjx@engine エンジンの種別。

 $4187 \le 4187 \le 0$ 

4188 \def\bxac@do#1#2{%

4189 \edef\bxac@tmpa{\string#1}%

 $4190 \qquad \texttt{\edef\bxac@tmpb{\meaning\#1}\%}$ 

4191 \ifx\bxac@tmpa\bxac@tmpb #2\fi}

 $4192 \verb|\bxac@do\XeTeXversion{\let\bxac@engine=x}|$ 

4193 \bxac@do\luatexversion{\let\bxac@engine=1}

\bxac@delayed@if@bxjs もし BXJS クラスの読込中でこのパッケージが読み込まれているならば、BXJS のクラスの終わりまで実行を遅延する。

 $4194 \ifx\jsAtEndOfClass\@undefined$ 

4195 \let\bxac@delayed@if@bxjs\@firstofone

 $4196 \verb|\else \let\bxac@delayed@if@bxjs\jsAtEndOfClass|$ 

4197 \fi

```
\ImposeOldLuaTeXBehavior ムニャムニャ。
\verb|\RevokeOldLuaTeXBehavior| 4198 \verb|\newif\ifbxac@in@old@behavior| 
                          4199 \let\ImposeOldLuaTeXBehavior\relax
                          4200 \let\RevokeOldLuaTeXBehavior\relax
                            G.2 X<sub>TF</sub>X 部分
```

```
4201 \ifx x\bxac@engine
    XfTrX 文字クラスのムニャムニャ。
4202 \verb|\conlypreamble\bxac@adjust@charclass|
4203 \bxac@delayed@if@bxjs{%
      \@ifpackageloaded{xeCJK}{}{\%else
4204
4205
        \ifx\xe@alloc@intercharclass\@undefined\else
            \ifnum\xe@alloc@intercharclass=\z@
4206
4207
          \PackageInfo\bxac@pkgname
4208
            {Setting up interchar class for CJK...\@gobble}%
4209
          \InputIfFileExists{load-unicode-xetex-classes.tex}{%
            \xe@alloc@intercharclass=3
4210
4211
4212
            \PackageWarning\bxac@pkgname
              {Cannot find file 'load-unicode-xetex-classes.tex'%
4213
4214
               \@gobble}%
          }%
4215
4216
        \fi\fi
4217
        \ifnum\XeTeXcharclass"3041=\z@
          \PackageInfo\bxac@pkgname
4218
            {Adjusting interchar class for CJK...\@gobble}%
          \ensuremath{\texttt{Qfor\bxac@x:=}}
4220
            3041,3043,3045,3047,3049,3063,3083,3085,3087,308E,%
4221
            3095,3096,30A1,30A3,30A5,30A7,30A9,30C3,30E3,30E5,%
4222
            30E7,30EE,30F5,30F6,30FC,31F0,31F1,31F2,31F3,31F4,%
4223
4224
            31F5,31F6,31F7,31F8,31F9,31FA,31FB,31FC,31FD,31FE,%
            31FF%
4225
          }\do{\XeTeXcharclass"\bxac@x=\@ne}%
4226
4227
        \fi
      }%
4228
4229 }
 以上。
4230 \fi
 G.3
       LuaTFX 部分
4231 \ifx 1\bxac@engine
    ムニャムニャ。
4232 \unless\ifnum\luatexversion<80 \ifnum\luatexversion<85
```

\chardef\pdftexversion=200 \def\pdftexrevision{0}

4234

```
\let\pdftexbanner\luatexbanner
                                                                                 4236 \fi\fi
\ImposeOldLuaTeXBehavior ムニャムニャ。
\verb|\RevokeOldLuaTeXBehavior| 4237 \verb|\logingroup| expandafter| expanda
                                                                                 4238 \end{small} \end{small} \end{small} 4238 \end{small} \end{s
                                                                                 4239 \def\bxac@ob@list{%
                                                                                 4240
                                                                                                      \do{\let}\pdfoutput{\outputmode}%
                                                                                                      \do{\let}\pdfpagewidth{\pagewidth}%
                                                                                 4241
                                                                                                      \do{\let}\pdfpageheight{\pageheight}%
                                                                                 4242
                                                                                                      \do{\protected\edef}\pdfhorigin{{\pdfvariable horigin}}%
                                                                                 4243
                                                                                                      \do{\protected\edef}\pdfvorigin{{\pdfvariable vorigin}}}
                                                                                 4244
                                                                                 4245 \def\bxac@ob@do#1#2{\begingroup}
                                                                                                      \expandafter\bxac@ob@do@a\csname bxac@\string#2\endcsname{#1}#2}
                                                                                 4246
                                                                                 4247 \def\bxac@ob@do@a#1#2#3#4{\endgroup}
                                                                                                      \ifbxac@in@old@behavior \let#1#3\relax #2#3#4\relax
                                                                                 4248
                                                                                 4249
                                                                                                      \else \let#3#1\relax \let#1\@undefined
                                                                                 4250
                                                                                 4251 \protected\def\ImposeOldLuaTeXBehavior{%
                                                                                                      \unless\ifbxac@in@old@behavior
                                                                                                             \bxac@in@old@behaviortrue
                                                                                 4253
                                                                                                             \let\do\bxac@ob@do \bxac@ob@list
                                                                                 4254
                                                                                 4255
                                                                                                     \fi}
                                                                                 4256 \verb|\protected\def\RevokeOldLuaTeXBehavior{%}|
                                                                                                      \ifbxac@in@old@behavior
                                                                                                             \bxac@in@old@behaviorfalse
                                                                                 4258
                                                                                                             \let\do\bxac@ob@do \bxac@ob@list
                                                                                 4259
                                                                                 4260
                                                                                                    \fi}
                                                                                 4261 \fi
                                                                                              漢字および完成形ハングルのカテゴリコードのムニャムニャ。
                                                                                                      \ifnum\luatexversion>64 \directlua{
                                                                                 4262
                                                                                                             local function range(cs, ce, cc, ff)
                                                                                 4263
                                                                                 4264
                                                                                                                    if ff or not tex.getcatcode(cs) == cc then
                                                                                 4265
                                                                                                                          local setcc = tex.setcatcode
                                                                                                                           for c = cs, ce do setcc(c, cc) end
                                                                                  4266
                                                                                 4267
                                                                                                                    end
                                                                                                             end
                                                                                 4268
                                                                                                             range(0x3400, 0x4DB5, 11, false)
                                                                                 4269
                                                                                                             range(0x4DB5, 0x4DBF, 11, true)
                                                                                 4270
                                                                                 4271
                                                                                                             range(0x4E00, 0x9FCC, 11, false)
                                                                                                             range(0x9FCD, 0x9FFF, 11, true)
                                                                                 4272
                                                                                                             range(0xAC00, 0xD7A3, 11, false)
                                                                                 4273
                                                                                                             range(0x20000, 0x2A6D6, 11, false)
                                                                                 4274
                                                                                                             range(0x2A6D7, 0x2A6FF, 11, true)
                                                                                 4275
                                                                                                             range(0x2A700, 0x2B734, 11, false)
                                                                                 4276
                                                                                                             range(0x2B735, 0x2B73F, 11, true)
                                                                                 4277
                                                                                 4278
                                                                                                             range(0x2B740, 0x2B81D, 11, false)
```

range(0x2B81E, 0x2B81F, 11, true)

4279

```
4280 range(0x2B820, 0x2CEA1, 11, false)
4281 range(0x2CEA2, 0x2FFFD, 11, true)
4282 }\fi
以上。
4283 \fi
```

#### G.4 完了

おしまい。 4284 %</compat>

# 付録 H 補助パッケージ:bxjscjkcat 🕸

modern ドライバ用の和文カテゴリを適用する。

#### H.1 準備

```
4285 %<*cjkcat>
4286 \def\bxjx@pkgname{bxjscjkcat}
4287 \newcount\bxjx@cnta

\bxjx@engine エンジンの種別。

4288 \let\bxjx@engine=n
4289 \def\bxjx@do#1#2{%
4290 \edef\bxjx@tmpa{\string#1}%
4291 \edef\bxjx@tmpb{\meaning#1}%
4292 \ifx\bxjx@tmpb\meaning#1}%
4293 \bxjx@do\kanjiskip{\let\bxjx@engine=j}
4294 \bxjx@do\enablecjktoken{\let\bxjx@engine=u}
4295 \bxjx@do\YeTeXversion{\let\bxjx@engine=x}
4296 \bxjx@do\pdftexversion{\let\bxjx@engine=p}
4297 \bxjx@do\luatexversion{\let\bxjx@engine=1}
```

それぞれのエンジンで、前提となる日本語処理パッケージが実際に読み込まれているかを 検査する。

```
4298 \def\bxjx@do#1#2{%
4299
      \if#1\bxjx@engine
        \@ifpackageloaded{#2}{}{%else
4300
4301
          \PackageError\bxjx@pkgname
4302
           {Package '#2' must be loaded}%
4303
           {Package loading is aborted.\MessageBreak\@ehc}%
          \endinput}
4304
      \fi}
4305
4306 \bxjx@do{p}{bxcjkjatype}
4307 \bxjx@do{x}{xeCJK}
4308 \sl 2000{1}{luatexja}
```

```
古い IATEX の場合、\TextOrMath は fixltx2e パッケージで提供される。
4309 \ifx\TextOrMath\@undefined
4310 \RequirePackage{fixltx2e}
4311 \fi
```

#### H.2 和文カテゴリコードの設定

upIdTeX の場合、和文カテゴリコードの設定を LuaTeX-ja と(ほぼ)等価なものに変更する。

```
※ LuaT<sub>F</sub>X-ja との相違点: A830、A960、1B000。
4312 \if u\bxjx@engine
4313 \@for\bxjx@x:={%
4314 0080,0100,0180,0250,02B0,0300,0500,0530,0590,0600,%
4315 0700,0750,0780,07C0,0800,0840,08A0,0900,0980,0A00,%
4316\ \mathtt{OA80,0B00,0B80,0C00,0C80,0D00,0D80,0E00,0E80,0F00,\%}
4317 1000, 10A0, 1200, 1380, 13A0, 1400, 1680, 16A0, 1700, 1720, %
4318 1740, 1760, 1780, 1800, 18B0, 1900, 1950, 1980, 19E0, 1A00, %
4319 1A20,1AB0,1B00,1B80,1BC0,1C00,1C50,1CC0,1CD0,1D00,%
4320 1D80, 1DC0, 1E00, 2440, 27C0, 27F0, 2800, 2A00, 2C00, 2C60, %
4321 2C80, 2D00, 2D30, 2D80, 2DE0, 2E00, 4DC0, A4D0, A500, A640, %
4322 A6A0, A700, A720, A800, A830, A840, A880, A8E0, A900, A930, %
4323 A980, A9E0, AA00, AA60, AA80, AAE0, AB00, AB30, AB70, ABC0, %
4324 D800, DB80, DC00, E000, FB00, FB50, FE00, FE70, %
4325 10000,10080,10100,10140,10190,101D0,10280,102A0,%
4326 102E0,10300,10330,10350,10380,103A0,10400,10450,%
4327 10480,10500,10530,10600,10800,10840,10860,10880,%
4328 108E0,10900,10920,10980,109A0,10A00,10A60,10A80,%
4329 10ACO,10B00,10B40,10B60,10B80,10C00,10C80,10E60,%
4330 11000, 11080, 110D0, 11100, 11150, 11180, 111E0, 11200, %
4331 11280,112B0,11300,11480,11580,11600,11680,11700,%
4332 118A0,11AC0,12000,12400,12480,13000,14400,16800,%
4333 16A40,16AD0,16B00,16F00,1BC00,1BCA0,1D000,1D100,%
4334 1D200,1D300,1D360,1D400,1D800,1E800,1EE00,1F000,%
4335 1F030,1F0A0,1F100,1F200,1F300,1F600,1F650,1F680,%
4336 1F700,1F780,1F800,1F900,E0000,F0000,100000%
4337 \do{\kcatcode"\bxjx@x=15}
4338 \fi
```

#### H.3 ギリシャ・キリル文字の扱い

※ここで「ギリシャ・キリル文字」は Unicode と JIS X 0213 に共通して含まれるもののみを指すことにする。

```
\bxjx@grkcyr@list 対象のギリシャ・キリル文字に関するデータ。
```

```
4339 \def\bxjx@grkcyr@list{%

4340 \do{0391}{LGR}{\textAlpha}{A}% % GR. C. L. ALPHA

4341 \do{0392}{LGR}{\textBeta}{B}% % GR. C. L. BETA
```

```
% GR. C. L. GAMMA
4342 \do{0393}{LGR}{\text{cmma}}%
4343 \do{0394}{LGR}{\text{LCR}}{\text{Delta}}
                                                  % GR. C. L. DELTA
4344 \do{0395}{LGR}{\text{textEpsilon}{E}}\%
                                                  % GR. C. L. EPSILON
4345 \do{0396}{LGR}{\text{cxtZeta}{Z}}%
                                                  % GR. C. L. ZETA
4346 \do{0397}{LGR}{\text{LGR}}{\text{LGR}}{
                                                  % GR. C. L. ETA
                                                  % GR. C. L. THETA
4347 \do{0398}{LGR}{\text{Theta}}
                                                  % GR. C. L. IOTA
4348 \do{0399}{LGR}{\text{LCR}}{\text{I}}%
4349 \do{039A}{LGR}{\text{kppa}}{K}%
                                                  % GR. C. L. KAPPA
                                                  % GR. C. L. LAMDA
4350 \do{039B}{LGR}{\text{Lmbda}}{\text{Lambda}}
                                                  % GR. C. L. MU
4351 \do{039C}\{LGR}{\text{LGR}}{\text{M}}%
                                                  % GR. C. L. NU
4352 \do{039D}{LGR}{\text{LCR}}{\text{N}}%
4353 \do{039E}{LGR}{\text{textXi}}{\text{Xi}}%
                                                  % GR. C. L. XI
                                                  % GR. C. L. OMICRON
4354 \do{039F}{LGR}{\text{cmicron}}{0}%
4355 \do{03A0}{LGR}{\text{textPi}}{\Pi}%
                                                   % GR. C. L. PI
4356 \do{03A1}{LGR}{\text{textRho}}{P}%
                                                  % GR. C. L. RHO
4357 \do{03A3}{LGR}{\textsc{Sigma}}%
                                                  % GR. C. L. SIGMA
                                                  % GR. C. L. TAU
4358 \do{03A4}{LGR}{\text{textTau}}{T}%
4359 \do{03A5}{LGR}{\textUpsilon}{\Upsilon}%
                                                  % GR. C. L. UPSILON
                                                  % GR. C. L. PHI
4360 \do{03A6}{LGR}{\text{textPhi}}{\Phi}%
4361 \do{03A7}{LGR}{\text{LGR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{
                                                  % GR. C. L. CHI
4362 \do{03A8}{LGR}{\text{textPsi}}{\Psi}%
                                                  % GR. C. L. PSI
                                                  % GR. C. L. OMEGA
4363 \do{03A9}{LGR}{\text{cmega}}{\Omega}
4364 \do{03B1}{LGR}{\text{\colored}} \
                                                  % GR. S. L. ALPHA
                                                  % GR. S. L. BETA
4365 \do{03B2}{LGR}{\text{textbeta}}{\text{beta}}
4366 \do{03B3}{LGR}{\text{xtgamma}}{\text{gamma}}
                                                  % GR. S. L. GAMMA
                                                  % GR. S. L. DELTA
4367 \do{03B4}{LGR}{\text{textdelta}}{\text{delta}}
4368 \do{03B5}{LGR}{\text{\conj}{\conj}{\conj}}
                                                  % GR. S. L. EPSILON
4369 \do{03B6}{LGR}{\text{xeta}}{\text{zeta}}
                                                  % GR. S. L. ZETA
4370 \do{03B7}{LGR}{\text{texteta}}{\text{ca}}
                                                  % GR. S. L. ETA
                                                  % GR. S. L. THETA
4371 \do{03B8}{LGR}{\text{texttheta}}{\text{theta}}
4372 \do{03B9}{LGR}{\text{textiota}}{\iota}%
                                                  % GR. S. L. IOTA
4373 \do{03BA}{LGR}{\text{xappa}}%
                                                  % GR. S. L. KAPPA
4374 \do{03BB}{LGR}{\text{lambda}}{\lambda}
                                                  % GR. S. L. LAMDA
4375 \do{03BC}{LGR}{\text{mu}}%
                                                  % GR. S. L. MU
                                                  % GR. S. L. NU
4376 \do{03BD}{LGR}{\text{nu}}%
4377 \do{03BE}{LGR}{\text{xi}}%
                                                  % GR. S. L. XI
                                                  % GR. S. L. OMICRON
4378 \do{03BF}{LGR}{\text{textomicron}}{o}%
                                                  % GR. S. L. PI
4379 \do{03C0}{LGR}{\text{textpi}}{\pi}
                                                  % GR. S. L. RHO
4380 \do{03C1}{LGR}{\text{textrho}}{\text{ho}}%
4381 \do{03C2}{LGR}{\text{\colored}} % GR. S. L. FINAL SIGMA  
4382 \do{03C3}{LGR}{\text{xtsigma}}{\text{sigma}}
                                                  % GR. S. L. SIGMA
4383 \do{03C4}{LGR}{\text{tau}}%
                                                  % GR. S. L. TAU
4384 \do{03C5}{LGR}{\textupsilon}{\upsilon}%
                                                  % GR. S. L. UPSILON
4385 \do{03C6}{LGR}{\text{textphi}}{\phi}
                                                  % GR. S. L. PHI
4386 \do{03C7}{LGR}{\text{chi}}%
                                                  % GR. S. L. CHI
4387 \do{03C8}{LGR}{\text{textpsi}}{\psi}{
                                                  % GR. S. L. PSI
4388 \do{03C9}{LGR}{\text{cmega}}{\text{omega}}
                                                  % GR. S. L. OMEGA
                                                  % CY. C. L. IO
4389 \do{0401}{T2A}{\CYRYO}{}%
4390 \do{0410}{T2A}{\CYRA}{}%
                                                  % CY. C. L. A
```

```
% CY. C. L. BE
4391 \do{0411}{T2A}{\CYRB}{}%
4392 \do{0412}{T2A}{\CYRV}{}%
                                                                                          % CY. C. L. VE
4393 \do{0413}{T2A}{\CYRG}{}% \do{0413}{T2A}{\CYRG}{}% \do{0413}{\CYRG}{}% \do{0413}{\CYRG}{}% \do{0413}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{\CYRG}{
                                                                                          % CY. C. L. GHE
4394 \do{0414}{T2A}{\CYRD}{}%
                                                                                          % CY. C. L. DE
                                                                                          % CY. C. L. IE
4395 \do{0415}{T2A}{\CYRE}{}%
                                                                                          % CY. C. L. ZHE
4396 \do{0416}{T2A}{\CYRZH}{}%
                                                                                          % CY. C. L. ZE
4397 \do{0417}{T2A}{\CYRZ}{}%
4398 \do{0418}{T2A}{\CYRI}{}%
                                                                                          % CY. C. L. I
                                                                                          % CY. C. L. SHORT I
4399 \do{0419}{T2A}{\CYRISHRT}{}%
                                                                                          % CY. C. L. KA
4400 \do{041A}{T2A}{\CYRK}{}%
                                                                                          % CY. C. L. EL
4401 \do{041B}{T2A}{\CYRL}{}%
                                                                                          % CY. C. L. EM
4402 \do{041C}{T2A}{\CYRM}{}%
                                                                                          % CY. C. L. EN
4403 \do{041D}{T2A}{\CYRN}{}%
                                                                                          % CY. C. L. O
4404 \do{041E}{T2A}{\CYRO}{}%
4405 \do{041F}{T2A}{\CYRP}{}%
                                                                                          % CY. C. L. PE
4406 \do{0420}{T2A}{\CYRR}{}%
                                                                                          % CY. C. L. ER
                                                                                          % CY. C. L. ES
4407 \do{0421}{T2A}{\CYRS}{}%
                                                                                          % CY. C. L. TE
4408 \do{0422}{T2A}{\CYRT}{}%
4409 \do{0423}{T2A}{\CYRU}{}%
                                                                                          % CY. C. L. U
                                                                                          % CY. C. L. EF
4410 \do{0424}{T2A}{\CYRF}{}%
4411 \do{0425}{T2A}{\CYRH}{}%
                                                                                          % CY. C. L. HA
                                                                                          % CY. C. L. TSE
4412 \do{0426}{T2A}{\CYRC}{}%
                                                                                          % CY. C. L. CHE
4413 \do{0427}{T2A}{\CYRCH}{}%
                                                                                          % CY. C. L. SHA
4414 \do{0428}{T2A}{\CYRSH}{}%
                                                                                          % CY. C. L. SHCHA
4415 \do{0429}{T2A}{\CYRSHCH}{}%
                                                                                          % CY. C. L. HARD SIGN
4416 \do{042A}{T2A}{\CYRHRDSN}{}%
                                                                                          % CY. C. L. YERU
4417 \do{042B}{T2A}{\CYRERY}{}%
4418 \do{042C}{T2A}{\CYRSFTSN}{}%
                                                                                          % CY. C. L. SOFT SIGN
4419 \do{042D}{T2A}{\CYREREV}{}%
                                                                                          % CY. C. L. E
                                                                                          % CY. C. L. YU
4420 \do{042E}{T2A}{\CYRYU}{}\%
                                                                                          % CY. C. L. YA
4421 \do{042F}{T2A}{\CYRYA}{}%
4422 \do{0430}{T2A}{\cyra}{}%
                                                                                          % CY. S. L. A
                                                                                          % CY. S. L. BE
4423 \do{0431}{T2A}{\cyrb}{}%
4424 \do{0432}{T2A}{\cyrv}{}%
                                                                                          % CY. S. L. VE
                                                                                          % CY. S. L. GHE
4425 \do{0433}{T2A}{\cyrg}{}%
4426 \do{0434}{T2A}{\cvrd}{}%
                                                                                          % CY. S. L. DE
                                                                                          % CY. S. L. IE
4427 \do{0435}{T2A}{\cyre}{}%
                                                                                          % CY. S. L. ZHE
4428 \do{0436}{T2A}{\cyrzh}{}%
                                                                                          % CY. S. L. ZE
4429 \do{0437}{T2A}{\cyrz}{}%
                                                                                          % CY. S. L. I
4430 \do{0438}{T2A}{\cyri}{}%
4431 \do{0439}{T2A}{\cyrishrt}{}%
                                                                                          % CY. S. L. SHORT I
4432 \do{043A}{T2A}{\cyrk}{}%
                                                                                          % CY. S. L. KA
4433 \do{043B}{T2A}{\cyrl}{}%
                                                                                          % CY. S. L. EL
                                                                                          % CY. S. L. EM
4434 \do{043C}{T2A}{\cyrm}{}%
4435 \do{043D}{T2A}{\cyrn}{}%
                                                                                          % CY. S. L. EN
                                                                                         % CY. S. L. O
4436 \do{043E}{T2A}{\cyro}{}%
4437 \do{043F}{T2A}{\cyrp}{}%
                                                                                          % CY. S. L. PE
                                                                                         % CY. S. L. ER
4438 \do{0440}{T2A}{\cyrr}{}%
4439 \do{0441}{T2A}{\cyrs}{}%
                                                                                          % CY. S. L. ES
```

```
% CY. S. L. TE
               4440 \do{0442}{T2A}{\cyrt}{}%
               4441 \do{0443}{T2A}{\cyru}{}%
                                                             % CY. S. L. U
               4442 \do{0444}{T2A}{\cyrf}{}%
                                                             % CY. S. L. EF
               4443 \do{0445}{T2A}{\cyrh}{}%
                                                             % CY. S. L. HA
                                                             % CY. S. L. TSE
               4444 \do{0446}{T2A}{\cyrc}{}%
                                                            % CY. S. L. CHE
               4445 \do{0447}{T2A}{\cyrch}{}%
               4446 \do{0448}{T2A}{\cyrsh}{}%
                                                            % CY. S. L. SHA
               4447 \do{0449}{T2A}{\cyrshch}{}%
                                                             % CY. S. L. SHCHA
                                                            % CY. S. L. HARD SIGN
               4448 \do{044A}{T2A}{\cyrhrdsn}{}%
                                                            % CY. S. L. YERU
               4449 \do{044B}{T2A}{\cyrery}{}%
                                                             % CY. S. L. SOFT SIGN
               4450 \do{044C}{T2A}{\cyrsftsn}{}%
                                                            % CY. S. L. E
               4451 \do{044D}{T2A}{\cyrerev}{}%
               4452 \do{044E}{T2A}{\cyryu}{}%
                                                            % CY. S. L. YU
                                                             % CY. S. L. YA
               4453 \do{044F}{T2A}{\cyrya}{}%
               4454 \do{0451}{T2A}{\cyryo}{}%
                                                            % CY. S. L. IO
               4455 \do{00A7}{TS1}{\textsection}{\mathsection}% SECTION SYMBOL
               4456 \do{00A8}{TS1}{\text{textasciidieresis}}%
                                                            % DIAERESIS
               4457 \do{00B0}{TS1}{\textdegree}{\mathdegree}% % DEGREE SIGN
               4458 \do{00B1}{TS1}{\text{textpm}}{\pm}%
                                                            % PLUS-MINUS SIGN
               4459 \do{00B4}{TS1}{\textasciiacute}{}%
                                                             % ACUTE ACCENT
               4460 \do{00B6}{TS1}{\textparagraph}{\mathparagraph}% PILCROW SIGN
               4461 \do{00D7}{TS1}{\text{texttimes}}{\text{times}}
                                                             % MULTIPLICATION SIGN
               4462 \do{00F7}{TS1}{\text{textdiv}}{\text{div}}
                                                             % DIVISION SIGN
               4463 }
               4464 \providecommand*{\mathdegree}{{}^{\circ}}
\ifbxjx@gcc@cjk 〔スイッチ〕ギリシャ・キリル文字を和文扱いにするか。
               4465 \neq 465 
   \greekasCJK ギリシャ・キリル文字を和文扱いにする。
  \nogreekasCJK ギリシャ・キリル文字を欧文扱いにする。
               4466 \newcommand*\greekasCJK{%
               4467 \bxjx@gcc@cjktrue}
               4468 \newcommand*\nogreekasCJK{%
                    \bxjx@gcc@cjkfalse}
   \bx0fake0grk \bx0fake0grk{(出力文字)}{(基準文字)}:
               4470 \def\bxjx@do#1\relax{%}
                     \def\bxjx@fake@grk##1##2{%
               4471
                       \expandafter\bxjx@fake@grk@a\meaning##2#1\@nil{##1}{##2}}%
               4472
                    \def\bxjx@fake@grk@a##1#1##2\@nil##3##4{%
               4473
                      \ifx\\##1\\%
               4474
                         \bxjx@cnta##4\divide\bxjx@cnta\@cclvi
               4475
                         \multiply\bxjx@cnta\@cclvi \advance\bxjx@cnta`##3\relax
               4476
               4477
                         \mathchar\bxjx@cnta
                       \else ##3\fi}
               4478
               4479 }\expandafter\bxjx@do\string\mathchar\relax
```

```
■pdfLaTeX・upLaTeX の場合
4480 \ifnum0\if p\bxjx@engine1\fi\if u\bxjx@engine1\fi>0
 まず inputenc を読み込んで入力エンコーディングを utf8 に変更する。
4481 \@ifpackageloaded{inputenc}{}{\%else
     \RequirePackage[utf8]{inputenc}}
4483 \def\bxjx@tmpa{utf8}
4484 \ifx\bxjx@tmpa\inputencdoingname
     \PackageWarningNoLine\bxjx@pkgname
4485
      {Input encoding changed to utf8}%
4486
    \inputencoding{utf8}%
4487
4488 \fi
   upIATrX の場合は当該の文字を含むブロックをの和文カテゴリコードを変更する。
4489 \if u\bxjx@engine
4490 \kcatcode"0370=15
4491 \kcatcode"0400=15
4492 \kcatcode"0500=15
4493 \fi
 各文字について \DeclareUnicodeCharacter を実行する。
4494 \def\do#1{%
     \@tempcnta="#1\relax
4496
     \@tempcntb=\@tempcnta \divide\@tempcntb256
     \expandafter\let\csname bxjx@KCR/\the\@tempcntb\endcsname=t%
     \expandafter\bxjx@do@a\csname bxjx@KC/\the\@tempcnta\endcsname{#1}}
4499 \def\bxjx@do@a#1#2#3#4#5{%
4500
    \ifx\\#5\\%
       \def\bxjx@tmpa{\@inmathwarn#4}%
4501
4502
    \else\ifcat A\noexpand#5%
       \edef\bxjx@tmpa{\noexpand\bxjx@fake@grk{#5}%
4503
         4504
     \else \def\bxjx@tmpa{#5}%
4505
     \fi\fi
4506
4507
     \def\bxjx@tmpb{\bxjx@do@b{#1}{#2}{#3}{#4}}%
     \expandafter\bxjx@tmpb\expandafter{\bxjx@tmpa}}
4509 \if u\bxjx@engine
4510 % {\bxjx@KC/NN}{XXXX}{ENC}{\textCS}{\mathCS}
4511 \def\bxjx@do@b#1#2#3#4#5{%
4512
    \kchardef#1=\@tempcnta
4513
     \DeclareUnicodeCharacter{#2}{\TextOrMath{#4}{#5}}}
4515 \else\if p\bxjx@engine
4516 \def\bxjx@do@b#1#2#3#4#5{%
     \mathchardef#1=\@tempcnta
4517
     \DeclareTextCommandDefault{#4}{\bxjx@ja@or@not{\UTF{#2}}{#3}{#4}}%
    \DeclareUnicodeCharacter{#2}{\TextOrMath{#4}{#5}}}
4519
4520 \fi\fi
```

4521 \bxjx@grkcyr@list

```
4522 \let\bxjx@do@a\undefined
4523 \let\bxjx@do@b\undefined
```

\bxjx@DeclareUnicodeCharacter \bxjx@DeclareUnicodeCharacter を改変して、ギリシャ・キリル文字の場合に再定義を 抑止したもの。

- 4524 \@onlypreamble\bxjx@org@DeclareUnicodeCharacter
- 4526 \@onlypreamble\bxjx@DeclareUnicodeCharacter
- 4527 \def\bxjx@DeclareUnicodeCharacter#1#2{%
- 4528 \count@="#1\relax \bxjx@cnta\count@ \divide\bxjx@cnta256
- $4529 \qquad \texttt{\expandafter\ifx\csname\ bxjx@KCR/\the\bxjx@cnta\endcsname\relax}$
- 4530 \bxjx@org@DeclareUnicodeCharacter{#1}{#2}%
- $4531 \qquad \verb|\else| expand after \| bxjx@KC/\| the \| count@\| endcsname \| relax$
- 4532 \bxjx@org@DeclareUnicodeCharacter{#1}{#2}%
- 4533 \else
- 4534 \wlog{ \space\space skipped defining Unicode char U+#1}%
- 4535 \fi\fi}

#### \bxjx@ja@or@not \bxjx@ja@or@not

4536 \def\bxjx@ja@or@not#1#2#3{%

\greekasCJK の場合は、無条件に和文用コードを実行する。

4537 \ifbxjx@gcc@cjk #1%

\nogreekasCJK の場合は、エンコーディングを固定して欧文用のコードを実行するが、そのエンコーディングが未定義の場合は(フォールバックとして)和文用コードを使う。

- 4538 \else\expandafter\ifx\csname T@#2\endcsname\relax #1%
- 4539 \else \UseTextSymbol{#2}{#3}%
- 4540 \fi\fi}

\DeclareFontEncoding@ \DeclareFontEncoding@ にパッチを当てて、\DeclareFontEncoding の実行中だけ改変 後の \DeclareUnicodeCharacter が使われるようにする。

- 4541 \begingroup
- $4542 \verb|\toks@expandafter{\DeclareFontEncoding@{#1}{#2}{#3}}$
- $4543 \ensuremath{\mbox{4543}} \ensuremath{\mbox{beclareFontEncoding@##1##2##3{\%}} \label{fig:encoding}$
- 4544 \noexpand\bxjx@swap@DUC@cmd
- 4545 \the\toks@
- 4546 \noexpand\bxjx@swap@DUC@cmd}}
- $4547 \endgroup\next$
- $4548 \def\bxjx@swap@DUC@cmd{%}$
- 4549 \let\bxjx@tmpa\DeclareUnicodeCharacter
- 4550 \let\DeclareUnicodeCharacter\bxjx@DeclareUnicodeCharacter
- 4551 \let\bxjx@DeclareUnicodeCharacter\bxjx@tmpa}

以上。

#### ■X¬LATFX・LuaLATFX の場合

 $4552 \le ifnum0 if x\bxjx@engine1\fi\if 1\bxjx@engine1\fi>0$ 

```
各文字について、math active を設定する。
4553 \def\do#1{%
     \bxjx@cnta="#1\relax
4554
     \begingroup
4555
       \lccode`~=\bxjx@cnta
4556
     \lowercase{\endgroup
4557
       \bxjx@do@a{~}}{#1}}
4558
4559 \def\bxjx@do@a#1#2#3#4#5{%
     \ifx\\#5\\\let\bxjx@tmpa\relax
4560
     \else\ifcat A\noexpand#5%
4561
       \edef\bxjx@tmpa{\noexpand\bxjx@fake@grk{#5}%
4562
         {\code`\#5=`\#5\\noexpand\Pi\else\\noexpand\pi\fi}}\%
4563
4564
     \else \def\bxjx@tmpa{#5}%
4565
     \fi\fi
4566
     \ifx\bxjx@tmpa\relax\else
4567
       \mathcode\bxjx@cnta"8000 \let#1\bxjx@tmpa
4568
     fi
 「Unicode な数式」の設定が行われているかを(簡易的に)検査して、そうでない場合にの
 み、こちらの設定を有効にする。
4569 \mathchardef\bxjx@tmpa="119
4570 \ifx\bxjx@tmpa\pi \bxjx@grkcyr@list \fi
4571 \let\bxjx@do@a\undefined
   LuaT<sub>F</sub>X における \(no)greekasCJK の定義。jacharrange の設定を変更する。
4572 \if 1\bxjx@engine
     \protected\def\greekasCJK{%
       \bxjx@gcc@cjktrue
4574
4575
       \ltjsetparameter{jacharrange={+2, +8}}}
4576
     \protected\def\nogreekasCJK{%
       \bxjx@gcc@cjkfalse
4577
4578
       \ltjsetparameter{jacharrange={-2, -8}}}
4579 \fi
   X元TFX における \(no)greekasCJK の定義。
4580 \if x\bxjx@engine
4581
     \protected\def\greekasCJK{%
4582
       \bxjx@gcc@cjktrue
4583
       \def\do##1##2##3##4{\XeTeXcharclass"##1\@ne}%
       \bxjx@grkcyr@list}
4584
     \protected\def\nogreekasCJK{%
4585
4586
       \bxjx@gcc@cjkfalse
       4587
       \bxjx@grkcyr@list}
4589 \fi
   以上。
4590 \fi\fi
```

#### H.4 初期設定

ギリシャ・キリル文字を欧文扱いにする。

4591 \nogreekasCJK

#### H.5 完了

おしまい。

4592 %</cjkcat>

# 付録 I 補助パッケージ:bxjspandoc 🕾

%テンプレートの  $T_{EX}$  コードより前に読み込む必要があるため、専ら文書クラス内での読込に限られる。

#### I.1 準備

4593 %<\*ancpandoc>

4594 % このファイルは日本語文字を含みます.

4595 \def\bxjsp@pkgname{bxjscjkcat}

\bxjsp@engine エンジンの種別。

4596 \let\bxjsp@engine=n

4597 \@onlypreamble\bxjsp@do

 $4598 \ensuremath{\mbox{def\bxjsp@do#1#2}}\%$ 

4599 \edef\bxjsp@tmpa{\string#1}%

4600 \edef\bxjsp@tmpb{\meaning#1}%

4601 \ifx\bxjsp@tmpa\bxjsp@tmpb #2\fi}

4602 \bxjsp@do\kanjiskip{\let\bxjsp@engine=j}

4603 \bxjsp@do\XeTeXversion{\let\bxjsp@engine=x}

 $4604 \bxjsp@do\pdftexversion{\let\bxjsp@engine=p}$ 

4605 \bxjsp@do\luatexversion{\let\bxjsp@engine=l}

#### I.2 パッケージ読込の阻止

\pandocSkipLoadFile \pandocSkipLoadFile{⟨ファイル名⟩}: 特定のファイルを(\@filewithoptions の処理に関して)読込済であるとマークする。

 $4606 \verb|\newcommand*\pandocSkipLoadFile[1]{%}$ 

4607 \expandafter\bxjsp@skip@load@file@a\csname ver@#1\endcsname{#1}}

4608 \def\bxjsp@skip@load@file@a#1#2{%

 $1609 \left( \frac{1}{1}\right)$ 

```
4610 \def#1{2001/01/01}%
4611 \PackageInfo\bxjsp@pkgname
4612 {File '#2' marked as loaded\@gobble}%
4613 \fi}
```

\pandocSkipLoadPackage \pandocSkipLoadPackage{\( パッケージ名\) }: \pandocSkipLoadFile の機能を用いて パッケージの読込を阻止する。

#### 1.3 fixltx2e パッケージ

テンプレートでは fixltx2e パッケージを読み込むが、最近(2015 年版以降)の  $\LaTeX$  ではこれで警告が出る。これを抑止する。

LATEX カーネルが新しい場合は fixltx2e を読込済にする。

#### I.4 cmap パッケージ

エンジンが (u)pIATEX のときに cmap パッケージが読み込まれるのを阻止する。(実際は警告が出るだけで無害であるが。)

```
4619 \if j\bxjsp@engine
4620 \pandocSkipLoadPackage{cmap}
4621 \fi
```

### I.5 microtype パッケージ

警告が多すぎなので消す。

エンジンが (u)pIATEX のときに microtype パッケージが読み込まれるのを阻止し、さらにテンプレートで使われている命令を通すためにダミーの定義を行う。

※昔は standard ドライバでこの処理を行っていたが、元来は Pandoc 用の処理なので、1.5 版で pandoc に移動。

```
4625 \if j\bxjsp@engine

4626 \pandocSkipLoadPackage{microtype}

4627 \newcommand*\UseMicrotypeSet[2][]{}

4628 \fi
```

#### I.6 Unicode 文字変換対策

Pandoc で LATEX 形式に書き出す場合は、元データ中の一部の Unicode 文字を「LATEX の表記」に置き換える。その中には日本語文書で問題になるものが含まれる。

```
\cdots \rightarrow \texttt{\ ldots\{\}} \quad `\rightarrow` \quad '\rightarrow' \quad "\rightarrow` \quad "\rightarrow' \, '
```

日本語  $\LaTeX$  では「 $\LaTeX$  の表記」は欧文扱い、Unicode 文字は和文扱いとして使い分ける 習慣があるので、このような置換が行われるのは好ましくない。

これらの置換のうち、後の 4 つは Pandoc の --no-tex-ligatures オプションを指定すれば抑止できるが、「…」の置換を抑止する機能はないようである。そこで、「\ldots{} を『…』に戻す」という処置を行う。

\pandocLdots Pandoc用の \ldots の実装。非数式でありかつ後続が {} の場合は代わりに … を実行する。

```
4629 \verb|\DeclareRobustCommand{\pandocLdots}{\cite{MondocLdots}} \label{thm:local_command}
      \relax\ifmmode \expandafter\bxjsp@org@ldots
4630
4631
      \else \expandafter\bxjsp@ldots@a
     \fi}
4632
4633 \def\bxjsp@ja@ellipsis{\...}
4634 \left| bxjsp@org@ldots \right|
4635 \def\bxjsp@ldots@a{%
     \futurelet\bxjsp@tok\bxjsp@ldots@b}
4637 \def\bxjsp@ldots@b{%
      \ifx\bxjsp@tok\bgroup \expandafter\bxjsp@ldots@c
      \else \expandafter\bxjsp@org@ldots
4639
      \fi}
4640
4641 \def\bxjsp@ldots@c{%}
      \afterassignment\bxjsp@ldots@d \let\bxjsp@tok=}
4643 \def\bxjsp@ldots@d{%
     \futurelet\bxjsp@tok\bxjsp@ldots@e}
4645 \ensuremath{\mbox{def\bxjsp@ldots@e}}\%
      \ifx\bxjsp@tok\egroup \expandafter\bxjsp@ldots@f
     \else \expandafter\bxjsp@ldots@g
4647
4648
4649 \def\bxjsp@ldots@f{%
     \bxjsp@ja@ellipsis \let\bxjsp@tok=}
4651 \def\bxjsp@ldots@g{%
      \expandafter\bxjsp@org@ldots\expandafter{\romannumeral-`} }
4652
    \ldots の実装を置き換える。
4653 \AtBeginDocument{%
      \let\bxjsp@org@ldots\ldots
```

\let\ldots\pandocLdots}

#### I.7 PandoLa モジュール

インストール済であれば読み込む。

 $4656 \verb|\IfFileExists{bxpandola.sty}{{\%}}$ 

4657 \RequirePackage{bxpandola}\relax

 $4658 \qquad \verb|\PackageInfo| bxjsp@pkgname|$ 

4659 {PandoLa module is loaded\@gobble}

4660 }{}

## 1.8 完了

おしまい。

4661 %</ancpandoc>

補助パッケージ実装はここまで。

4662 %</anc>